

予言書

前書 まへ

以下収める所の十七書が予言書と称ばれるのは、ただこれらにばかり予言が載せてあるというのではなくて、これらが予言者たちの手で録され、予言をその主要な内容としているからである。それはイスラエル民族の将来、ならびに天主が約束し給いイスラエル人が待望していた救主に関するものである。トレンチノ公会議は予言書として十七書を認定したが、その順序は次の通りである。

イザヤ書、イエレミヤ書、バルク書、エゼキエル書、ダニエル書、オゼー書、ヨエル書、アモス書、アブデイア書、ヨナ書、ミケア書、ナフム書、ハバクク書、ソフオニア書、アゲオ書、ザカリア書、およびマラキア書。

聖書の意味する予言者とは、天主から現在ならびに将来に関する御旨の告知者たる御委託を受けて現われた人を言う。「ナビー」というヘブレオ語も、「プロフエーテス」(προφეტες)というギリシヤ語も、そういう意味を持つてゐる。

イスラエル人のなかには、かような予言者が沢山あつた。ユデア人は旧約の予言者として、男四十八人、女七人を挙げている。しかしその数は確定し難く、いわゆる執筆予言者、すなわちダヴィド以後の時代の上記十七人の如く、己が予言を書き止めた予言者もあれば、またサムエル書や列王記略中に出てくるサムエル、ガド、ナタン、エリア、エリゼオなどのように、執筆しなか

つた予言者もあつた。

なお前記執筆予言者十七人のうち、最初の五人は大予言者、残りの十二人は小予言者と言われているが、これは主として、その著書の分量の大小に由るのである。

イザヤ書

イザヤは一般に執筆予言者中最大と目されているが、それは一つにはかれの著書が最も浩瀚であるのと、二つには聖アウグスチノがかれを「予言者よりも寧ろ福音記者で使徒」と称したように、メシアおよびその御国たる教会についてのかれの予言が、一読しながら聖福音書を読むかのような感を与えるほど、明快を極めているのとに由るのである。聖書の中でさえ、かれは最大の予言者と言われている（集四八・二五）。さればかれの言葉が、主御自身によつて、例えばナザレトにおける御説教中に用いられたり、敬虔なユデア人やユデア教に改宗した異教徒たちによつて引用されたりしたのも、敢て驚くに足りないのである。

イザヤはダビッド王家の出であるらしく、オジア、ヨアタン、アカズ、エゼキア諸王の頃在世した人であつて、キリスト紀元前七百四十七年予言者の使命に召され、二子があつた。ローマ殉教録の七月六日の所には、かれを殉教者と記してあるが、ユデアの言伝えによれば、不信仰な王マナツセの時代に、鋸引きにせられて（来一一・三七参照）、殺されたという。

かれの名は「主救い給う」という意味である。

イザヤ書は二部に分たれ、第一部（一―四〇章）は慰藉と教訓、殊にアツシリア来襲の危険についてのそれであり、第二部（四一―六六章）はバビロンの捕囚からの解放およびメシアの救いに関する慰めの予言である。

現代の聖書釈義学者の中には、この第二部をイザヤの書いたものでないとしている人も若干あるけれども、ユデア教及びキリスト教の言伝えと、新約聖書の諸書に見出される引用とは、到底疑うことを許さない証拠を提供しているのである。

第一章

イザヤ預言者ユダとイエルサレムとの罪を鳴らし、これに真心よりの改心をすすむ

一 アモスの子イザヤがユダの王オジア、ヨアタン、アカズ、及びエゼキアの代に、ユダとイエルサレムとに就きて見たる啓視。¹⁾ 二 諸天よ、聴け、地よ、耳に留めよ、²⁾ 実に主は曰えり。
我子等を養い育てたれども、³⁾ 彼等は我を軽んじたり。^三 牛はその所有主を、驢馬はその主の抹槽を知る。されどイスラエルは我を知らず、わが民は曉らざるなり。^四 禍なるかな、罪深き

第一章 1) イザヤ預言者

は心眼で将来のことを見た。¹⁾ 2) 申三二・一参照。

3) この言い方は天主がイスラエル族の有史以来かれらのためになし給うた一切を包括する。―何一
一・三。

五 国人、不義を負う民、奸悪なる胤、罪惡の子等。彼等は主を棄て、イスラエルの聖なる御者を冒瀆し、之に背き離れたり。五 邪曲に邪曲を累ぬる者等よ、汝等の何処をか我更に打つべき。その頭は余す所なく病み、その心は全く患えり。六 足の裏より頭の頂に至るまで、その身に全き所なく、ただ傷と、打たれし痕の青痣と、蚯蚓腫とのみ。しかも之に繃帶を巻く者なく、藥を塗る者なく、また油もて罨法を施す者もなきなり。七 汝等の地は荒れ、汝等の諸都市は火に焼かれ、汝等の田園は汝等の前にて他国の者に吞まれたり。そは敵に荒らされたる時の如く、廃れん。八 また、娘シオンは葡萄畑の小亭の如く、瓜畑の小屋の如く、荒らされたる城市の如く、取残さるべし。九 万軍の主我等の為に後胤を遺し給わざりせば、六 我等はソドマの如くなり、またゴモラに似たりしならん。一〇 汝等ソドマの侯伯等よ、主の御言を聴け、汝等ゴモラの民よ、我等の天主の律法を耳に留めよ。二 汝等

四 イスラエルは、諸侯から賤民に至るまで、誰も彼も不信仰であつた。五 收穫の後、荒れるに任されていた。六 イスラエルにどんな禍があつても生き残る者があるという考えは、イザヤのお告げにこれからもまた最も度々出てくる思想の一つ。一 七 羅九・二九。創一九・二四。一 八 イスラエルがソドマやゴモラに譬えてある

一八 然る後來りて我を責めよ、¹⁴⁾ と主云い給う。汝等の罪たとい
 一七 念の悪しきを去り、非を行ふことをやめ、¹²⁾ 善をなすことを学び、公
 一六 義を求め、虐げらるる者を助け、孤兒を公平に扱い、寡婦を庇い護
 一五 たり。一五 されば我は汝等が手を差伸ぶる時も、わが眼を汝等に背向け、
 一四 汝等が頻りに祈禱をなす時も、之を聴容れじ、蓋は汝等の手に血満ち
 一三 之に得堪えじ。汝等の集會は不義なり。一四 わが靈は汝等の新月と、汝
 一二 香は我にとりて厭わしき物なり。新月、安息日、その他の祝日も、我
 一一 之手より是等の物を求めたる。¹⁰⁾ 一三 最早空しき犠牲を献ぐるなかれ。
 一〇 羊の燔祭、肥えたる牲の膏、及び犢や小羊や牡山羊の血は、我之を欲
 九) まず。一三 汝等わが庭を歩まんとて、わが眼前に來りし時、誰か汝等

九) 犠牲の精神なき
 供犠は天主の御前
 に無価値。耶六・
 二〇。歴五・二二、
 二二。一〇) 正しい
 心がけで聖殿に來
 ない人は、ただむ
 だに敷石を踏みへ
 らすだけ。一〇) 本
 五九・三。一〇) 彼
 前三・一一。
 一三) 善をなすことを
 すすめるための類
 義語五つ。一四) 天
 主がかれらに、言
 わば新契約の申し
 入れを行い給う。

一九 緋の如くなりとも、雪の如く白くなり、たとい朱の如く赤くとも、羊
 毛の如く白くならん。¹⁵⁾ 汝等もし快く我に聴従わば、地の佳物を食
 するを得べし。²⁰⁾ されど汝等もし洩りて我を怒らしめば、劍汝等を
 呑むに至るべし。是、主の御口の語り給いし所なり。²¹⁾ 公義に満ちた
 りし忠誠の都市、如何にして娼婦¹⁶⁾ となりしや。その中には嘗て正義
 住いしに、今は殺人者あるのみ。²²⁾ 汝の白銀¹⁷⁾ は滓に変じ、汝の葡萄
 酒には水混じたり。²³⁾ 汝の侯伯等是不忠にして盜賊の仲間となり、い
 ずれも賄賂を好み、報酬を求め、孤兒に公平の処置をせず、寡婦の訴
 訟は彼等の許に至ることなし。¹⁸⁾ ²⁴⁾ この故に主、万軍の天主、イスラ
 エルの強き者¹⁹⁾ は云い給う、ああ、我、わが敵に怨を晴らし、わが仇
 に復讐せん。²⁵⁾ 我また汝にわが手を向け、汝の滓を熔かして淨くし、
 汝の錫を全く取除き、²⁶⁾ 汝の裁判官を始の如く、²⁰⁾ 汝の参議を古の如
 く立て直さん。然る後、汝は正義の都、忠誠の邑と称えらるべし。

15) 緋と朱との喩は一五節の結びの句から出ている。
 16) 娼婦とは他の神々に心を寄せるもの。イスラエルの民は天主に花嫁として娶られた。
 17) この「しろがね」即ち銀は純潔で価値あることの象徴。—18) 耶五・二八。—19) 創四九・二四をも暗示している。—20) モイゼ、ヨブエ、ゲデオン、サムエルのように。

二七 シオンは審判を経て贖われ、人々之を正義によりて復興せ
 二八 ん。二八されど悪をなす者と罪を犯す者とは、共に主の滅ぼし
 二九 給う所となり、主を棄てたる者は失せ去るべし。二九即ち彼等
 三〇 はその犠牲を捧げたる偶像によりて亡ぶべきなり。また汝等
 三一 もその選びたる園²¹⁾故に赤面するに至らん。三〇そは汝等が葉
 の落つる榲^{かし}樹の如く、水なき園の如くならん時なり。三二汝等
 の力は麻屑の灰の如く、汝等の事業は火花の如くなるべし。
 両つながら同時に燃え上り、誰も之を消す者なからん。

21) 偶像、わけでもアシエレ
 が安置されていた「神の森」
 ヘブレオ語本ではもつと強
 く、「汝らが無上の楽しみ
 としたる処」。

第二章

メシアの国に関する啓視とユデアに対する審判

一 アモスの子イザヤが、ユダとイエルサレムとに就きて見た
 二 ること¹⁾。二末の日頃²⁾主の家の山は山々の頂に備わりて、丘
 々の上に高く聳え立ち、国々の民みな滔々と之に赴かん。

第二章 1) ヴルガタ訳 verb-

um「言」これはヘブレオ語
 の言い方で「事」の意。

2) イザヤは、メシア待望の

三 多くの民行きて云うべし、「いざ、我等主の山³⁾に、ヤコブの天主
の家^{いへ}に上らん、さらば主我等にその道を教え給うべし、我等その径を
歩まん」と。そは律法はシオンより、主の御言はイエルサレムより、
出ずべければなり。⁴⁾ 主は諸々の国人を裁き、多くの民を責め給わ
ん。是において彼等その劍を鋤に、その槍を鎌に、打ち直し、民は民
に敵対いて劍をあぐることなく、最早人々戦闘に備えて訓練すること
なきに至るべし。⁵⁾ ヤコブの家よ、来れ、我等主の光の中を歩まん。
六 実に汝がその民ヤコブの家を棄て給いしは、彼等が昔の如きに⁵⁾ 満
ちフィリスト人の如く占う者を置き、異邦の子等に附きたるが故なり。
七 その国には白銀黄金充滿ち、その宝は尽くることなし。⁶⁾ 八 またその
国には馬充滿ち、その戦車は数を知らず。更にその国には偶像充滿ち、
人々己が手の作、己が指の造りし物を礼拝せり。⁹⁾ かく人は身を屈め、
男は謙れり、⁶⁾ されば彼等を容し給わされ。¹⁰⁾ 汝、岩窟に入り土穴

準備期とメシアの
事業完成の末の日
と二期に分けてい
る。但二・二八な
ど参照。——³⁾米四
・一一三参照。旧
約で天主を祀った
場所なる聖殿の山
はここでは新約の
天主の御国の象
徴。——⁴⁾約四・二
六参照。——⁵⁾昔荒
野で天主に背き離
れた時したような
厭うべき悪事に。
⁶⁾空しい偶像神の
前に。

二 二に隠れて、主の怖るべき御面と、その御稜威の光とを避けよ。二人の高ぶ
 二 二れる眼は卑くせられ、男等の思い上りは挫かれ、かくてかの日⁷⁾には独り
 二 二主のみ崇められ給うべし。三そは万軍の主の日、凡て高ぶれる者、思い上
 二 二れる者、驕れる者に臨みて、かかる者卑くせらるべければなり。三なおそ
 二 二はりバノンの高く聳ゆるすべての杉樹、バサンのすべての榲樹、一四あらゆ
 二 二る高き山、あらゆる聳立つ丘、⁸⁾一五すべての高き塔、すべての堅き石垣、
 二 二一六またタルシスのすべての船、⁹⁾すべての見て美しきものに臨むべし。
 二 二一七かくて人々の高慢は挫かれ、男等の思い上りは卑くせられ、かの日には
 二 二ひとり主のみ崇められ給うべく、一八偶像は全く蹂躪らるべし。一九主の起ちて
 二 二地を撃ち給わん時、人々その恐るべき御面と、その御稜威の光とを避けて
 二 二岩の洞、地の穴に入らん。¹⁰⁾二〇その日には人己が拝せんとして造りし白銀の
 二 二偶像や黄金の肖像を、土龍や蝙蝠¹¹⁾を投げ棄て、二一また岩の裂罅、石の洞
 二 二に入りて、主の起ちて地を撃ち給わん時、その恐るべき御面と、その御稜

7) 審判の日。
 8) 人間の驕慢
 に役立つた自
 然はかれと共
 に罰せられる
 である。
 9) 王上一〇・
 二二参照。
 10) 何一〇・八
 路二三・三〇
 11) 動物崇拜。
 ヘブレオ語本
 「もぐらやこ
 うもりのもと
 に」即ち是ら
 の住む暗い所
 に。

二三 威の光とを避けん。二三 されば鼻孔もて呼吸する人に頼るをやめよ、彼はあまりに尊しと思われたればなり。一)

12) ヘブレオ語本では問の形で、意味は「弱い人間をどうして尊しとすることができようか」。

第三章

ユデア人がその罪ゆえに蒙るべき恥辱その他の不幸—その女等の傲慢罰せらるべし

一 実にも視よ、支配者にて在す万軍の主、イエルサレム及びユダより、猛き者、雄々しき者、パンの力という力、水の力という力、^{一)} 勇士、軍人、判士、預言者、占卜者、長老、^三 五十夫長、顔の売れたる名望家、参議、建築に巧みなる者、及び玄妙なる言に卓れたる者を取去り給うべし。
 四 我は彼等の君として少年を与え、男娼をして彼等を治めしめん。²⁾ 民は互に他を、人は各々その近き者を襲い、少年は老人に対し、賤しき者は貴き者に対して騒ぎ立つべし。
 六 蓋し、人その父の家族³⁾ なる己が兄弟を捉えて云わん、

第三章 1) パンや水のように生活にぜひ無くてはならぬもの。

2) 伝一〇・一六。

3) 単なる市民。

七 「汝には衣服あり、汝我等の侯となりて、この荒廃を掌るべし。」と。
 八 その日彼答えて云わん、「我は医す者にあらず、且わが家には糧もな
 く衣服もなし。我を立てて民の侯となすなかれ。」と。⁴⁾ 八抑々イエルサ
 レムが倒れ、ユダが崩折れたるは、彼等の舌、彼等の企図が主に背き、
 九 その御威光の眼に余りしが故なり。⁵⁾ 彼等の顔の状は、その保証をなせ
 り。彼等はソドマの如くその罪を公然に示して隠さざりき。禍なるかな
 一〇 彼等の靈魂、そはあらゆる悪、報として彼等に臨めばなり。⁶⁾ 義人に云
 二 え、幸ありと。そは彼己が企画の果を食すべければなり。⁷⁾ 不敬なる者
 三 はその悪しき報ゆえに禍なるかな、実にその手の報、その身に來るべし。
 四 二わが民は之を虐ぐる者の掠奪むる所、女の治むる所となれり。⁸⁾ わが
 民よ、汝を福なりと云う者等こそ、汝を欺き、汝の歩むべき道を毀つ
 一四三 なれ。⁹⁾ 主審判かんとて起ち給う、民を審判かんとて起ち給う。¹⁰⁾ 主は
 來りて、御民の長老等及びその諸侯に対し、審判を行い給わん。「そは

4) この人は、自分自身と自分の家族のために有り余る心配があるから、他人のことなど考えられない。従来尊敬された王位が嘲弄されている
 5) 厚顔破廉恥の様子。⁶⁾ 不幸の二つの源泉。即ち圧制と女天下。

一五 汝等葡萄畑⁷⁾を食い尽し、貧しき者より奪い取りし物汝等の家にあればなり。一五 汝等なんぞわが民を蹂躪^{ふみにじ}り、貧しき者の面をすり碎くや。
 一六 と主万軍の天主は云い給う。一六 主はまた曰えり、「シオンの娘等は思
 一七 い上り、頸を伸ばして歩み、行く行く秋波を送り、手を拍ちつつ足も
 一七 て小刻みに歩み、取澄したる歩きぶりにて行きしに由りて、⁸⁾ 一七 主は
 一八 シオンの娘等の頭顱^{むすめら}を禿^{いただき}にし、主その髪毛を剥取り給わん。一八 その日
 一九 主は杏の装飾、半月形^{はんげつがた}、⁹⁾ 一九 鏈、頸飾、腕環、頭帽、^{二〇} 簪、脛飾、
 二〇 飾帶、香箱、耳飾、^{二一} 指環、額にかくる宝玉、^{二三} 晴衣、肩被、蔽帕、
 二三 留針、^{二三} 鏡、亜麻布、鉢卷、及び被布を取り除き給うべし。二四 その時
 二五 悪臭は芳香の代り、糲^{なわ}は帯の代り、禿^{かむろ}は縮れ髪^{はみ}の代り、毛衣は胸飾の
 二六 代りとならん。二五 汝の最美しき男等も劍に、汝の勇士等も戦闘に、仆
 二六 るべし。¹⁰⁾ 二六 かくてその門は嘆き悲しみ、そは荒廃して地上に坐せん。¹¹⁾

7) イスラエルの民
 8) 両足を短かい鎖
 でつないであるの
 で、歩くと音を立
 て、且小さい歩幅
 しか踏み出せない
 9) 月形の装身具。
 10) 天主から結婚相
 手や子宝を授けら
 れないのは、女に
 とつて無上の恥で
 あつた。——11) シオ
 ンそのものさえ、
 ひとり残されて住
 民の滅亡を悲しみ
 嘆く寡婦に似てい
 る。

第 四 章

ユデア人等極度の不幸に逢うも、残れる者はメシアによりて恵を得べし

一 またその日には七人¹⁾の女、一人の男を捉えて云うべし、
我等己が糧を食し、己が衣服を着ん、ただ我等に汝の名を名
乗らしめて、²⁾ 我等の恥辱³⁾を除けかし、と。二 その日には
主の若枝⁴⁾大となりて輝くに至り、地より生ずる物⁵⁾高く伸
びてイスラエルの救われたる人々の歓喜となるべし。三 また
凡てシオンに残るべき者、イエルサレムに存うべき者、即ち
イエルサレムの生命の書に録されたる者⁶⁾はいずれも、聖と
称えらるるに至らん。四 主が審判の霊と焼き尽す霊⁷⁾とによ
りて、シオンの娘等の汚穢を洗い潔め、イエルサレムの血を
その中より濯ぎ去り給いたらん時、五 主はシオンの山⁸⁾の到
る所と、呼び頼まるる所との上に、昼は雲と煙とを、夜は焰

第四章 1) 数人。— 2) いつ
の時代にも妻は夫の姓を名
乗つた。— 3) 子がないとい
う恥辱。創三〇・一二三参照。
4) 天主を本源とするメシア
5) イスラエル民族から出る
メシア。— 6) 天主からメシ
アの宝の配分にあずかるこ
とを許された者。— 7) 天主
の霊は不浄を焼き尽くし、
見事な秩序の新時代をもた
らす。— 8) 本二・三に主の
山と言われている「天主の
御国」。

なす火の光輝を創造り給わん。⁹⁾ 実に一切の榮あるものの上に庇護あるべし。^六 なお一つの幕屋¹⁰⁾ ありて、昼は炎暑を凌ぐ蔭となり、旋風と雨とを避くる安全なる隠処とならん。

⁹⁾ 荒野の旅の間イスラエル人を守つた昼の雲と夜の火の柱とを喩に用いてある。――¹⁰⁾ 教会。

第五章

葡萄畑の譬話によるユデア人が天主に見棄てらるることの予告――
天主が罪人等を討たん為に遣し給う軍勢

一 我はわが愛する者の為に、その葡萄畑¹⁾ に関するわが従兄弟の歌²⁾ を唱わん。わが愛する者には、肥えたる丘の上に一つの葡萄畑ありしが、^二 彼之に垣し、之より石を拾い集め、そこに選りすぐりたる葡萄を植え、その只中に望樓を建て、またそこに酒搾場を設けて、葡萄を結ぶを待ち望みけるに、結びしは野葡萄なりき。^三 さればいざ、イエルサレムに住む民とユダの人々よ、我とわが葡萄畑³⁾ との是非を裁け。^四 わが葡萄畑に対して、わがなし

第五章 1) 旧約聖書の

記者達がイスラエルを

さすためによく用いる

喩。耶二・二一。五・

一〇。マテオ二一・三

三―三四など参照。

2) ヘブレオ語本「わが

愛する者の歌」。――3) 本

三・一四参照。

五 たる事ことの外ほか、何なんのなすべき事ことありや。我われその葡萄ぶどうを結むすぶを待まちち望のぞみしに、
 野葡萄のぶどうを結むすびしは何なんぞや。⁴⁾ 五 さればいざ、我われはわが葡萄畑ぶどうばたけに對たいしてなさん
 とする所ところを汝等なんじらに示しめさん。我われはその生垣いけがきを取除とりのぞきて之これを荒あらさるるに任まかせ、
 六 其の石垣いしがきを毀こぼちて之これを踏ふまるるに任まかせん。 六 我われは之これを荒あれたるまゝに棄すて
 おかん。枝えだを剪きることも溝みぞを掘ほることもせず、薊あざみと茨いばらとを生しょうぜしめん。ま
 七 た雲くもに命めいじて、最早もはやその上うえに雨あめを降ふらしめじ。 七 万軍ばんぐんの主しゅの葡萄畑ぶどうばたけは蓋けだし
 イスラエルの家いえなり。ユダの人ひとはその嘉よみし給たまう植木うえきなり。我われその公平こうへいを行おこな
 うことを期き待たいしたるに、見みよ、不ふ公平こうへいを行おこなえり。我われその正義ただしきをなすことを
 八 望のぞみしに、見みよ、叫号さけびあり。 八 禍わざわいなるかな、汝等家なんじらいえに家いえを連つらね、田畑たはたに
 田畑たはたを加くわえて、余あます処ところなきに至いたらしむる者もの。⁶⁾ 国くにの中なかに住すむべきは独ひとり汝
 九 等らのみならんや。 九 是等これらの事ことはわが耳みみにしたる所ところなり、と万軍ばんぐんの主しゅは云いい
 一〇 給たまう。実けに大おほいにして美うるわしき家いえ、数多あまた荒廢あれたれて住すむ者ものなきに至いたらん。一〇 実けに
 十段たんの葡萄畑ぶどうばたけは僅わずかに一壘ひとびんの実みを結むすび、三十柵ますの種たねは僅わずかに三柵ますの実みを結むす

4) されば私が
 こう考えたの
 は、思違いで
 あつたか。
 5) 虐げられた
 貧しい人々の
 怨み嘆く叫び
 6) 律法(利二
 五・二五―二
 八)は土地を
 一手に集め所
 有することを
 禁じた。

二 ぶのみなるべし。二禍なるかな、汝等朝早く起きて⁷⁾ 酔わんことを求め、晩まで飲み続けて、葡萄酒に己が身を灼く者。三汝等の酒宴には、小琴、手琴、鼓に笛あり、また葡萄酒あり。されど汝等は主の御業を顧みず、その御手業を考えず。一三この故に知識なかりしわが民は、捕われ引かれ、その貴き者は飢えて死し、その衆くの民は渴きて仆れしなり。⁸⁾ 一四是によりて冥府はその貪慾を拡げ、その限なき口を開けり。彼等の勇士、民草、および彼等の高位にありて栄えし者等、その中に下らん。一五かくて人は屈せしめられ、男は賤しくせられ、高ぶる者の眼は低くせらるべし。一六されど万軍の主は審判によりて崇められ、聖なる天主は正義によりて聖とせられ給わん。一七その時小羊は己が習性のままに草を喰み、⁹⁾ 他所より来れる者は荒野の豊かになりしを食すべし。一八禍なるかな、汝等虚栄の繩もて不義を、車の綱の如く罪をひく者。¹⁰⁾

7) かれらの酒宴は明方から始まつた。——8) 道ならぬ享樂は捕囚の悲惨な境遇により、酒宴の楽しみはひどい欠乏により罰せられた。
 9) 国はほとんど全住民が居なくなつて、広い牧場になるであらう。
 10) 多くの者は天主の御正義と、まさに来らんとする天罰(一九節)を信ぜず、それを嘲笑する。しかしほかならぬそういう態度によつて、かれらは愚かにもいわばちぎることのできない強い繩や綱で引

一九 汝等は云う、彼急ぎて速かにその業をなしとげよ、我等之を見ん。11)

イスラエルの聖なる者の図る所成就せよかし、我等之を知らん、と。

二〇 禍なるかな、汝等惡を善、善を惡と称び、闇を光、光を闇となし、

二 苦きを甘し、甘きを苦しとする者。二 禍なるかな、汝等自ら見て己を

二 智者とし、自ら量りて己を賢者とする者。12) 二 禍なるかな、汝等葡萄

二 酒を飲むに強く、酔う酒を混合すに勇なる者。三 汝等贈物ゆえに不

二 敬なる者を義しとし、義人の義を之より奪い去る者。二 此の故に火の

舌が刈株を喰う如く、焰の熱が之を焼き尽す如く、彼等の根もまた灰

の如くなり、彼等の蒼もまた塵の如く颺がらん。13) 盖は彼等万軍の主

の律法を棄て、イスラエルの聖なる者の御言を冒瀆したればなり。

二 是によりて主の御義怒、その民に対して燃え上り、主御手をその上

に伸べて彼等を打ち給いしに、山々は震憾き、彼等の屍体は街衢の中

にありて糞土の如くなりぬ。然れども、御義怒いまだ去りやらず、そ

き寄せるように、間違ひなく罰を招くのである。

11) 汝が遠い将来起こると言うことを

我らは信じない。

12) 箴三・七。羅一

二・一六。一 13) 二

つの喩。第一のは

火から取つてあり

第二のは植物界か

ら引いてあつて、

全く滅びる植物に

なぞらえてある。

二六 の御手はなお伸べ給えるままなり。二六かくて遠き国々の民の為に旗
をあげ、¹⁴⁾ 彼¹⁵⁾ に向かい呼子笛吹き鳴らして地の果より召し寄せ給
わん。時に見よ、彼速かに急ぎ来るべし。二七その中には疲れたる者
も病める者もあらず。彼等は睡むことも眠ることもなからん。また
その腰帶の解くることも、その脊紐の断ることもなからん。二八そ
の矢は鋭く、その弓はすべて引き絞られたり。その馬の蹄は燧石の
如く、¹⁶⁾ その車輪は疾風の勢の如くなるべし。二九その吼ゆること獅子
の如し、即ち彼等若き獅子の如く咆え、牙を鳴らして獲物を捉え、
堅く掴みて放たざらん、救い出す者なからん。三〇またその日には
海鳴の如き音、彼等にも鳴り轟かん、我等地を望まん、見よ、患
難の暗黒あるのみにして、濃霧の中に光晦むべし。¹⁷⁾

14) 昔は戦争の時進軍の方向もしくは集合地点を示すため、高い山の上に旗をたてた。——15) 敵軍の戦士。
16) 昔の馬は、蹄鉄を打たなかつたので、特に堅い蹄であることが必要であつた。
17) この結果を招くには、アツシリア、バビロニア、ついに聖殿を破壊し尽くしたローマなど、世界の強国が関与した。

第 六 章

イザヤ啓視の中に召命を受く

一 オジア王の死したる年に、¹⁾ 我主が^{われしゆ}高くあがれる玉座に坐し給うを見しが、その衣の裾^{すそ}²⁾は聖殿に満ちわたれり。ニその上には熾天使等^{セラフイム}³⁾立ちたり。そは此にも六つの翼、彼にも六つの翼あり、二つもて己が面を覆い、二つもて己が足を覆い、⁴⁾二つもて飛び翔り、⁵⁾互に呼び交して云いけるは、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主万軍の天主、その御栄光は全地に充満てり、と。⁶⁾

四 この呼ばわる者の声に枢の鴨居揺れ動き、家には煙^{けむり}⁷⁾満ち渡りぬ。五時に我云いけらく、禍なるかな、我の黙せること。⁸⁾ 我は唇の穢れたる人に

第六章 1) 西紀前七五七年。 2) ヴルガタは「かれの下にあるもの」。 3) この天使は最上級の霊で、その名はサーラフ、「焼く」という語から出ている。 4) 面と足とをおおうのは、畏敬を表わすため。 5) 二つの交唱歌隊。 6) いわゆる Trisagion 三聖頌。グワードースこれは「離れた」という意味らしい」という形容詞を三度繰り返すのは、ヘブレオ語の言い方で、天主の聖の絶対的完全性を示す。しかしカトリックの釈義学者らは教父たちに倣つて、これを一天主の聖三位をさすものと見てゐる。―黙四・八。 7) 天主御出現の時御姿を包む煙の雲は、聖書中に度々出てくる。例えば出一九・九など。

して、唇の穢れたる民の中に住むに、わが眼もて万軍の主^{しゆ}に在^ます王^{おう}
 を見^み奉^{まつ}りたればなり、と。^六折しも熾天使等の一位^{ひとり}、わが許^{もと}に飛^とび
 来^きりしが、その手^てには熱石^{あつきいし}あり、是^{これ}その火^ひ挾^{はさ}みもて壇^{だん}の所^{ところ}より取^とり
 来^{きた}りしものなり。^九彼^{かれ}、それをわが口^{くち}に触^ふれて云^いいけるは、見^みよ、
 此物^{このもの}汝^{なんじ}の唇^{くちびる}に触^ふれたれば、汝^{なんじ}の不義^{ふぎ}は取除^{とりぞ}かれ、汝^{なんじ}の罪^{つみ}は潔^{きよ}めら
 るべし、と。^八我^{われ}また主^{しゆ}の御声^{みこえ}を聞^きけり、曰^{いわ}く、我^{われ}誰^{たれ}をか遣^{つか}すべ
 き、誰^{たれ}か我^{われ}等^らの爲^{ため}に行^ゆくべき、と。我^{われ}すなわち云^いいけるは、見^み
 給^{たま}え、ここに我^{われ}あり、我^{われ}を遣^{つか}し給^{たま}え、と。^九主^{しゆ}曰^いいけるは、行^ゆけ、
 汝^{なんじ}この民^{たみ}にかく云^いうべし、汝^{なんじ}等^ら聞^ききまた聞^きけよ、されど曉^{さと}ることな
 かれ、見^みまた見^みよ、されど知^しることなかれ、と。^{一〇}汝^{なんじ}この民^{たみ}の心^{こころ}を
 蒙^{くら}くし、その耳^{みみ}を頑固^{かたくな}にし、その眼^めを閉鎖^{とざ}せよ、是^{これ}、彼等^{かれら}がその眼^め
 もて見^み、その耳^{みみ}もて聞^きき、その心^{こころ}もて曉^{さと}り、立^たち歸^{かえ}りて我^{われ}に癒^いさる
 ることのなからん爲^{ため}なり。^{一一}二時^{とき}に我^{われ}、主^{しゆ}よ、そは何時^{いつ}までぞ、と

^八) 私がそのままにし
 ていたこと。すなわ
 ち目をそむけなかつ
 たこと。――^九) 乳香は
 炭火および熱石にふ
 りかけて焚く習慣で
 あつた。――^{一〇}) 天主に
 三位あることを暗示
 11) 天主は彼らを頑冥
 にし給うのではない
 が、彼らがそくなる
 事実を予見しておい
 でになり、天主はこ
 れを以て、イスラエ
 ルの民に御自分の正
 義に在すことを示し
 給うであらう。

云いけるに、主曰いけるは、諸市荒れ果てて住う者なく、家に
人なく、国も荒るるに任されん時までなり。二三その時主は人々
を遠くまで遷し給わん、されど地の中に荒れ廃れたる所多くな
るべし。12) 二三そこになお居るは十分の一ならん、是は立歸り
て、13) さながらテレビンの樹の如く、枝を張る榲樹の如き状を
示さん。そこに残さるべき者は、聖なる種となるべし。

12) 国の荒れはてることと
民の捕虜となることとの
予言。――13) 民の残つた者
は死に絶えず、それから
新約の天主の御国の民が
出るであらう。

第七章

イザヤ、アカズ王にその敵がイエルサレムを取らざるべき旨を断言す――
童貞女懐胎して一子を産まん――アツシリアより禍来るべし

一 オジアの子なるヨアタンの子にして、ユダの王たるアカズの
代に、1) シリアの王ラシン、及びロメリアの子、イスラエルの
王ファケ、イエルサレムに上り来りて、之を攻めしことあり
しが、乗取ること能わざりき。二 然るに或人々ダヴィドの家に

第七章 1) オジアからア
カズまでは十六年。

三 告^つげて、シリア人^{びと}エフライム²⁾に^よ拠^よれり、と云^いしかば、ア
 カズの心^{こころ}及び^{およ}その民^{たみ}の心^{こころ}、森^{もり}の樹木^{きぎ}の風^{かぜ}に揺^ゆらるる如^{ごと}くに動^{どう}
 揺^{よう}せり。三^{とき}時^{とき}しも主^{しゅ}イザヤに^{のたま}曰^いけるは、汝^{なんじ}及び^{およ}汝^{なんじ}の遺^{のこ}れる
 子^こヤスブ、³⁾漂^{さらし}布野^のの道^{みち}のほとりなる上^{かみ}の池^{いけ}の樋口^{ひぐち}にアカズ
 四 出^いで迎^{むか}えて、⁴⁾四^{かれ}彼^{かれ}に云^いうべし、汝^{なんじ}注^{しよ}意^いして静^{しず}かなれ、恐^{おそ}
 五 るなかれ、シリア王^{おう}ラシンとロメリアの子^こと怒^{いか}り狂^{くる}えるも、
 六 これ二つの燃^も木^ぎの余^{のこ}燼^りが煙^けれるなり、⁵⁾汝^{なんじ}の心^{こころ}怯^{おび}ゆるなかれ、
 七 対^{たい}して悪^あしき策^{はかり}謀^{こと}をめぐらし、⁶⁾我^{われ}等^らユダに上^{のぼ}りゆきて、之^{これ}
 八 を愕^{おどろ}かし、之^{これ}を奪^{うば}い取^とり、その中^{なか}にタベールの子^こを置^おきて王^{おう}
 九 たらしめん」と云^いうとも、主^{しゅ}なる天主^{てんしゅ}はかく云^いい給^{たま}う、か
 十 かる事^{こと}は成^{なり}立^たたず、実^{じつ}現^{げん}せざるべし。⁸⁾却^{かえ}つてシリアの頭^{かしら}は
 十一 ダマスコ、ダマスコの頭^{かしら}はラシンたり、今後^{こんご}六十五年^{ねん}を経^へな

2) 北方王国の主要支族の名
 エフライムで、イスラエル
 全体をさしている。――3) へ
 ブレオ語シャルヤシユブ、
 「残り³⁾は立ち帰る」の義。
 4) ギホンの高い方の池。こ
 れに対して低い方を下の
 池という。王はこの場所を
 固めるために、この池か
 ら城市のなかへ水を引いた
 めにか、この土地を視察し
 に行つたのである。
 5) 彼らは消えそうになつて
 くすぶつてゐる燃え木のよ
 うに、多少厄介をかける位
 がせいぜいで、本当の戦火
 になる心配はない。

九	ば、エフライムは民として存立せざるに至らん。九またエフ
一〇	ライムの首はサマリア、サマリアの首はロメリアの子たら
二	ん、 ⁶⁾ 汝等もし信ぜずば、存続せざるべし、 ⁷⁾ と。一〇主なお
二	アカズに対し御言を継ぎて曰いけるは、二汝、冥府の深き所
二	にても、上なる高き所にても、主汝の天主に兆を請い求めよ。
二三	三アカズ云いけるは、我は請い求めじ、主を試み奉らじ。 ⁸⁾
二三	三彼云いけるは、さらば聴け、ダヴィドの家よ、汝等は人を
二四	悩ますを以てなお足らずとなし、わが天主をも悩まし奉るや。
二四	一四この故に主御自ら、汝等に兆を与え給うべし。 ⁹⁾ 見よ、童
二五	貞女懐胎して一子を産まん、その名はエンマヌエルと称えら
二五	るべし。一五彼は乳酪と蜂蜜とを食して、 ¹⁰⁾ 悪を斥け、善を選
二六	ぶことを弁うるに至らん。 ¹¹⁾ 一六さて童子の未だ悪を斥け善を
二六	選ぶことを弁えざる間に、汝がその二人の王 ¹²⁾ ゆえに忌み嫌

⁶⁾ 両国ともその領土をひるめることはできまい。ダマスコはただシリアの都、サマリアはただ北方王国の都たるに留まるであらう。
⁷⁾ 汝らもエフライムと運命を共にするだらう。――⁸⁾ 不信仰の言訳に、謙遜を偽り装う。――⁹⁾ エンマヌエルの兆の現われるのが確實であるように、国も確實に現在の敵から救われるであらう。
¹⁰⁾ バタと蜂蜜とは、貧しい人々の食物であつた。
¹¹⁾ 「悪を斥け、善を選ぶ」という言い方は、物心づくとの義。――¹²⁾ ラシンとファケー。

一七 う国は荒らさるべし。¹³⁾ 主は汝の上に、汝の民の上に、また汝の父の家の上に、エフライムがユダを離れし頃より、未だ曾て来りしことなき日を、アッシリア人の王によりて、臨ましめ給わん。一八その日にはかくなるべし、主叱咤して、エジプトの河口におる蠅と、アッシリアの地におる蜂¹⁴⁾とを召び給わんに、^{一九}彼等来りて皆溪谷の流、岩の穴、すべての繁み、すべての空洞に棲まらん。^{二〇}その日には、主借りたる剃刀、すなわち河¹⁵⁾の彼方なる人々、アッシリア人の王を用いて、頭と足の毛、及び鬚をば悉く、剃り給わん。¹⁶⁾ 三またその日には、人若き牝牛一頭と、羊二頭とを飼い、三乳の豊かなるによりて乳酪を食せん。¹⁷⁾ 実に、国の中に遺れる者はいずれも皆乳酪と蜂蜜とを食すべし。¹⁸⁾ 三またその日にはかくなるべし、千株にて銀千枚の価値ある¹⁹⁾葡萄ありし処も、悉く茨と薊とに変わるに至らん。

¹³⁾ 小児が物心つく年頃になるまでの間、すなわち三四年の間、ユダは圧迫されるであらう。——¹⁴⁾ エジプトには、えが多かつたように、アッシリアには蜂が多かつた。その国民をさすのにその国のいかな昆虫の名が使つてある。¹⁵⁾ エウフラト。——¹⁶⁾ ユダが毛をことごとく取られてしまふ体にとえてある。——¹⁷⁾ 国は草の多いしける牧場となるだらう。¹⁸⁾ 住民が非常に数少なくなつているので。——¹⁹⁾ 即ち非常に優秀な。

二四 そこには人々矢と弓とを携えて入るべし、²⁰⁾ 蓋は薊と茨と、地にあ
 二五 まねければなり。二五 また小鋏もて日頃雑草取りたりしすべての山々も
 最早そこに茨や薊の生うるを恐るることなくなりて、ただ牛の草喰む
 処となり、畜の踏むに委さるべし。

第八章

生まるべき子の名—ユデア人は己が罪ゆえに多くの禍に逢わん

一 主我に曰いけるは、汝大なる一の板を取り、¹⁾ その中に人の筆も
 二 録せ、²⁾ 「速かに物を奪え、疾く掠めよ」と。^三 我は司祭ウリアと、
 バラキアの子ザカリアとを、わが為に立てて信実の証人となせり。
 三 さて我妻³⁾ に近づきしに、彼女懐胎して一子を産めり。⁴⁾ 時に主我
 四 に曰いけるは、汝その名を「急ぎ物を奪え、疾く掠めよ」と名づくべ
 し。^四 そはこの童子、未だその父その母を呼ぶことを知らざる間に、⁵⁾
 ダマスコの力と、サマリアの財貨と、アッシリア王の前に奪い去らる

²⁰⁾ 国が荒れると野
 獣がはばを利かせ
 る。

第八章 1) 注意を
 ひくため。—2) だ
 れにでも読めるよ
 うに。—3) 原文「女
 予言者」。—4) この
 懐胎は本七・一四
 にあるのといかに
 違っていること
 か! —5) ゆえにこ

六五 べければなり。五 主なおも我に向かい、御言を継ぎて曰いけるは、六
 の民は静かに流るるシロエ⁶⁾の水を棄てて、却つてラシンとロメリア
 七 の子とを選び取りたれば、七 見よ、主この故に^{ゆえ}勢^{いきおい}激しき満々たる河^{かわ}
 水^{みづ}を、彼等の上に引き入れ給わん、そは即ちアツシリア王とその一
 切の威光なり。彼はそのあらゆる小川に溢れ、すべての岸を乗越え、
 八 ユダを貫き流れ、氾濫し、漲りわたりてその頸許にまで至らん。か
 九 くてその翼を張るや、ああ、エンマヌエルよ、汝の⁸⁾ 国の面を覆うべ
 し。九 諸々の民よ、集わば集え、汝等破られん。諸々の遠き国よ、聴^き
 けかし、力を合さば合せ、汝等破られん、身に帶せば帶せ、汝等破ら
 一〇 れん。一〇 議らば議れ、空しくならん、言を出さば出せ、行わるること
 二 なからん、そは天主我等と共に在せばなり。二 実に主は我に、かく曰
 えり、即ち力ある御手もて我に、この民の道⁹⁾を歩むべからざる旨を
 二三 諭し給える時に當りて、曰わく、二三 汝等、陰謀と云うべからず、蓋し

の期間は本七・一六に暗示してあつたのよりも短かい。——6) シロエの泉はダヴィド家の祭政一致王政の象どり。——7) 好戦国アツシリアを象どるエウフラトの。8) そこにいつか生まれて暮らし給うべきエンマヌエルの。——9) 異教徒を恐れることと、アツシリア人に対するアカズの要請と

凡てこの民の語る所こそ陰謀なれ。¹⁰⁾ 汝等また彼等の恐るる所

を恐るるなかれ、戦くなかれ。¹¹⁾ ただ万軍の主を聖とすべし。

汝等之をこそ畏み、之をこそ恐れよ。¹²⁾ さらに主は汝等を聖な

らしめ給わん。されどイスラエルの二つの家¹³⁾には躓く石とな

り、突当る岩となり、イエルサレムの住民には畏となり滅亡の

因となり給うべし。¹⁴⁾ 彼等の中には、躓き倒れ、粉々に砕け、

又畏にかかりて捕わるる者多からん。¹⁵⁾ 証詞を結び括り、律法

をわが弟子等の中に封ぜよ。¹⁶⁾ 我はヤコブの家に御面を隠し

給える主を期して望み、之を鶴首して待ち奉らん。¹⁷⁾ 見よ、我

と主が我に授け給えるわが子等¹⁸⁾とは、シオンの山に住み給う

万軍の主より賜わりたる、イスラエルの前兆なり、奇蹟なり。

彼等たとい汝等に向かいて、呪文を吟く巫女及び陰陽師に尋

ねよと云うとも、民は己が天主に尋ねべきにあらずや、いかで

¹⁰⁾ ヤーヴェに依然忠誠を
守り、アツシリアと結ん

だ同盟を不義と攻撃する

人々を、民衆は裏切者と

よんだ。¹¹⁾ ユダ、サマ

リア両王国。¹²⁾ 路二・

三四。羅九・三二。彼前

二・六。¹³⁾ いつもわが

予言を守れというイザヤ

のすすめ。¹⁴⁾ これはイ

ザヤ即ち「ヤーヴェの救

い」と、その男の子「残

りは立ち帰る」と、「速

かに物を奪い取れ、疾く

掠めよ」との三人で、天

主の御計画の生き証人で

ある。

二〇 活ける者の為に死せる者に尋ねべけんや。15) 二〇 寧ろ律法
 と証詞とに赴くべし。彼等もしこの言の如く語らずば、
 二 曙の光にあわじ。16) 三 彼等は国中を渡り歩き、倒れて
 飢え、その飢うるや、怒りて己が王己が天主を呪わん。
 三 上を望み、三 地を眺めん、視よ、患難と暗黒と、混乱
 と窮乏と、濃霧の追迫とあるのみ、しかも彼等はそ
 の窮地より遁れ出ることを能わざるなり。

15) 皮肉な言い方。——16) 曙光がやが
 てすつかり明かるくなるという希
 望を与えるように、予言者の言葉
 の通りに行動しさえすれば、より
 よき時代の来る希望がもてるのに
 残念にもそうでない。

第九章

メシアの御国における歓喜——イスラエルがその罪ゆえに蒙る天罰

一 曩にはザブロン¹⁾の地ネフタリの地軽んぜられしが、末
 の日には¹⁾ 異邦人のガリレア、ヨルダンの彼方なる湖
 辺²⁾の道、重んぜられたり。³⁾ 二 暗黒を歩める民は大なる
 光を見、死の蔭の地に住める人々、彼等には光出でたり。⁴⁾

第九章 1) 前記(本二・二)の如

くメシアの時代。——2) ゲネザレト

湖畔。——3) マテオ四・一五。

4) 前記(本八・二〇)はメシアの活動によつて生ずる光明、または

三 汝は国民を増し給いしが、歡喜をば大ならしめ給わざりき。⁵⁾
 されど彼等は收穫の時に喜ぶ人々の如く、勝利者が敵の物を取りて鹵獲品を分つ時に雀躍する如く、汝の御前にて喜ぶに至らん。^四これ、その負える軛と、その肩の咎と、その搾取者の笏とが、マデイアンの目⁶⁾における如く、汝の折り給う所となれるによりてなり。^五実に暴力もて騷擾の中に掠奪りし物と、血に塗れし衣とは、焚かれて火の燃料となるべし。^六それ、一人の嬰兒我等の為に生れ、一人の子我等に与えられたり。⁷⁾その肩の上には主權⁸⁾置かれたり。その名は、奇しき者、智謀の士、大能の天主、来世の父、平和の君⁹⁾と称えられん。^七その主權は益々伸張して、平和は終なかるべし。彼はダヴィドの玉座に坐し、その王国を治め給わん、そは、今より後永久に正と義とを以て之を堅く且強くし給わんためなり。万軍の主の熱心

メシアそのもの（約一・九。八・一二など）を暗示していた。――⁵⁾ヘブルオ語ケリ、すなわち彼に。ウルガタでは前の時代とメシアの時代との対照が強調されている。――⁶⁾ゲデオンの時代（士七章）。⁷⁾童貞女から生まれ、天主御父から与えられた。⁸⁾君主のしるし、王のマント。――⁹⁾この大王に付けられた別名はただの人間にはふさわない。

八 これをなしとげ給うべし。八 主一言¹⁰⁾をヤコブに遣り給いしに、そはイスラエ
 ルの上に降り立ちたり。九 エフライムの民は全て、サマリアの住民と共に、
 知るべし、彼等は心の高慢尊大を以て云う、一〇 煉瓦崩れたり、されど我等四
 角の石もて建て直さん。無花果樹伐られたり、されど我等杉木をその代りと
 せん、と。二 故に主はラシンの敵¹¹⁾を挙げて之を抑えしめ、之に仇なす者等
 をして喊声をあげつつ馳向わしめ給わん、二三 即ちシリア人は東よりし、フィ
 リスト人は西よりし、大口開きてイスラエルを呑むべし。然りながら、御憤
 怒未だ去りやらず、その御手はなお伸べ給えるままなり。二三 しかも民は己を
 打ち給う者の御許に歸り来らず、万軍の主を求め奉らざるなり。二四 されば主
 も、一日の中に、イスラエルより頭と尾と、屈する者と抑うる者とを、失せ
 しめ給わん。二五 長寿にして尊ぶべき者、是、頭なり、虚偽を云う預言者、是、
 尾なり。二六 またこの民を福なりと云う人々は迷わす者にして、福なりと云
 わるる人々は滅亡に陥るべし。二七 この故に主は彼等の若者等を喜び給わず、

10) 一予言
 ここから
 新しい文
 段が始ま
 る。
 11) アツシ
 リア人。
 12) 犬は媚
 びる時に
 尾をふる
 が、その
 ように彼
 らは嘘を
 言つて媚
 びようと
 する。

一八 その孤児と寡婦とを¹³⁾ 憐み給わじ、そは何人も皆偽善者にして悪しく、
 いずれの口も悉く愚なる事を語ればなり。然りながら御義怒いまだ去
 りやらず、その御手はなお伸べ給えるままなり。一八 実に不敬は火の如
 く燃え上れり、やがて藁と茨とを呑み、森の繁みに燃え付きて、¹⁴⁾ そ
 は高く立上る煙に包まるべし。一九 万軍の主の御義怒によりて、地は乱
 れたり。民は火の燃料となり、何人もその兄弟を容赦することなから
 ん。二〇 人右に向かいても飢え、左に食いても飽かずして、各自その
 腕¹⁵⁾の肉を貪り食うべし。マナツセはエフライムを、エフライムはマ
 ナツセを貪り食い、且彼等相携えてユダに敵わん。¹⁶⁾ 三 然りながら、
 御義怒いまだ去りやらず、その御手はなお伸べ給えるままなり。¹⁷⁾

第 十 章

アツシリアの来襲とその滅亡との予言

一 禍なるかな、不義なる法を立て、録すに当りて、不正を録し、
 二 裁判の時に貧しき者

13) かつてはあれほど熱心に庇護し給うたのに。——14) 茨は庶民。森の繁みは指導者たち。本一〇・一七、三四参照。——15) 腕は生まれつき助けとなるもの。——16) 即ち骨肉の争い。
 17) 三度目の反復。
 一二、一七両節参照。

を虐げ、わが民の中なる賤しき者の訴訟に非道を行い、寡婦を己が餌食となし、孤児の物を奪わんとする者。三御訪れ、すなわち災厄の遠くより¹⁾来る日、汝等何をなさんとするや。誰の許に逃れ行きて助力を仰がんとするや。また何処に汝等の光榮を遺して、^四桎梏の下に屈み、²⁾殺されたる者等と共に仕るることを免れんとするや。然りながら、御義怒いまだ去りやらず、その御手はなお伸べ給えるままなり。³⁾禍なるかな、アッスルよ。彼はわが怒の笞なり杖なり。わが憤りはその手にあり。六我は彼を不忠なる国民の許に遣し、彼にわが怒れる民を攻め、物を掠め財を奪い、彼等を衢の泥の如くに蹂躪らしむることを命ぜん。^七されど彼はかく思わず、⁴⁾その心かく考えじ。ただその志すところは蹂躪にあり、少からぬ国々の民を滅ぼすことにあらん。八実に彼は云わん、九わが諸侯はすべて王にあらずや。カラノはカルカミスの如く、エマトはアルファドの如くならずや。サマリアはダマスコの如くならずや。^{一〇}偶像の国々が、わが手の得る所

第十章 1) 遠

方のアッシリ

アから。

2) 捕虜として

3) 本九・二一

とその註参照

4) かれは自分

を天主の復讐

に使われるも

のと思わずに

ただ自分の名

誉や利益のこ

とばかり考え

ている。

二

となりし如く、イエルサレムとサマリアとの偶像もまた然ならん。⁶⁾ 二我、サマリアとその偶像とに對してなし

二三

たる如く、またイエルサレムとその偶像⁷⁾とに對しても然なざるべけんや、と。三さればかくなるべし、主が

二四

シオンの山とイエルサレムにおいてその御業を悉くなしとげ給いたらん時、我アッシリア王の尊大なる心の果と、その眼の驕慢とを懲らしめん。⁸⁾ 三それ、彼は云え

二五

り、「我はわが手の力によりてなし、わが智慧によりて曉れり。我は諸々の民の国境を取去り、その諸侯の財を奪い、高位に坐せる者を引下したることさながら英雄の如くなりき。^{一四} わが手巢をとる如く諸々の民の力を獲、

我遺し置かれる卵⁹⁾を集むる如く、地を余すなく取り集めたり。しかも羽毛を動かす者も¹⁰⁾ 口を開きて呟く者

5) カルカミス(今のカルケミシユ)

はメソポタミア北部エウフラト河の右側にあつた。カラノは、アレツポの北方にあり、今日テル・エルフアドと言われているアルファドの附近にあつた北シリアの町クラニであるらしい。エマトはオロンテス河畔の今日のハマである。

6) 一国の民に勝つのは、その神々に勝つことと考えていた。――7) かれはイスラエルの天主を偶像の神々と同一視して、それと同じく滅ぼすと約束したことにより、自ら天罰を招いた。――8) 本節の「我」は天主の御一人称。――王下一九・三五。本三七・二六。――9) 母鳥に。10) 鳥の巢の喩のつづき。母鳥は自分の雛を取り去られるのに少しも

一五 もあらざりしなり。」と。一五 斧おのあに之これをもて伐きる者ものに對し、自ら誇ほこるべけんや。また鋸のこぎりいかで之これを引ひく者ものに對し、高たかぶるべけんや。恰あたかも答しもとが之これを挙あぐる者ものに抗さかいて自らあがり、木きに過すぎざる杖つえが己おのれを誇ほこる如ごとし。一六 この故ゆえに支配しはい者しゃにて在ましま万軍ばんぐんの主しゅは、その肥こえたる者ものに羸瘦るいそうを遣おくり給たまうべく、その光榮さかえの下したには¹¹⁾焰ほのお発はつして、火ひの燃もゆる如ごとくなるべし。一七 しかしてイスラエルの光ひかりは火ひとなり、その聖せいなる者ものは焰ほのおとなりて、その茨いばらと薊あざみと¹²⁾は一日いちにちの中うちに焼やき尽つくされ、一八 その森もりとその美うるわしき果樹園かじゅえんとの榮さかえは、靈れいより肉にくに至いたるまで滅ほろび失うせ、¹³⁾ 彼は恐怖おそれのあまり逃にげ去さらん。一九 またその森もりの樹木きぎの残のこれるものはいと少すくなくして数かずうるを得うべく、童子わらべと雖いえどもそを録かきしるすを得うべし。二〇 その日ひにはかくなるべし、イスラエルの残のこれる者もの¹⁴⁾と、ヤコブの家いえの遁のがれたる者ものとは、最早もはや己おのれを打うちし者ものに依頼よりたのまず、主しゅに在ましまイスラエルの聖せいなる者ものに、赤誠せきせいもて依頼よりたのむに至いたらん。二一 その残のこれる者ものは大能だいのうの天主てんしゅの御許みもとに立たち歸かえるべし。わが云いうは、ヤコブの残のこれる者ものなり。二二 イスラエルよ、それ

抵抗しない。
¹¹⁾ 彼の軍勢の中には。
¹²⁾ アツシリア人は天主に對すれば茨のしげみのようなもの。——¹³⁾ 森や果樹園はアツシリアの兵力の象徴。ごく少数の戦士しか助からない。——¹⁴⁾ 本六一三など参照。

二三 汝の民は浜の真砂の如くならんも、立歸るべきは、ただその残れる
 者の一部のみ。定められたる滅尽は正義によりてなしとげらるべ
 し。¹⁵⁾ 三三 実にこの滅尽、この決定は、主万軍の天主、国内到る所に
 之を行い給わん。^{三四} この故に、主万軍の天主はかく云い給う、シオ
 ンに住めるわが民よ、アッスルを恐るるなかれ、彼はエジプトの例
 の如く、笞もて汝を打ち、その杖を挙げて汝に敵わんも、^{三五} そはた
 だ少時の間にして、やがてわが憤りはやみ、わが怒りは彼等の罪惡
 に向うべければなり。^{三六} 万軍の主は曾てオレブの岩の辺にてマデイ
 アンを撃ち給いし如く、¹⁶⁾ 彼に対して鞭を揮い給わん、昔海に向か
 いて御杖をあげ給いしが、そのエジプトの例の如く之を挙げ給わ
 ん。¹⁷⁾ ^{三七} その日にはかくなるべし、彼の重荷汝の肩より、彼の軛、
 汝の頸より、取除かれ、その軛は油によりて腐るべし。¹⁸⁾ ^{三八} 彼はア
 ヤトに來り、マグロンを通り、マクマスにその荷を置かん。¹⁹⁾ ^{三九} 彼は

15) 本一一・一一。羅
 九・二七。——¹⁶⁾ 士七
 ・二五。——¹⁷⁾ 出一四
 ・一六参照。ウルガ
 タは in via Aegypti.
 18) エダを牝牛と考
 えている。それが誰も
 その力に抵抗できな
 いほど強大となり肥
 満するに至るので、
 軛がはじけてしま
 う
 19) これらの所はみな
 或は近く或は遠く、
 イエルサレム市の周
 辺にある。敵軍が次
 第に都に近づいてく
 るのである。

三〇 等は馳せ来れり、「ガバは我等の宿营地なり、」ラマは愕きたり、
 サウルのガバートは逃げ去れり。三〇ガリムの娘よ、声をあげよ。
 三二 ライサよ、憐なるアナトトよ、意を留めよ。三二メデメナは移り行
 きたり、ガビムの住民よ、心を励ませ。三三なおそのノベに足を留
 むべきはただ一日のみ。彼娘シオンの山、イエルサレムの丘に向
 三三 かいてその手を振らん。三三視よ、支配者にて在す万軍の主は、恐
 怖もて土器²⁰⁾を碎き給うべし。丈高き者は切り詰められ、傲る者
 三四 は辱しめられん。三四また森の繁みは鉄もて伐りひらかれ、リバノ
 ン²¹⁾はその高く聳ゆるものと共に倒さるべし。²²⁾

第十一章

アツシリアの捕囚よりの帰還とメシアの精神的王国とについての予言

一 さて、イエッセの根より一つの小枝出で、その根より一つの花
 二 生ぜん。一ニしかしてその上には主の霊鎮まり給うべし、是すなわ

20) 落とせば割れる土器
 またはゲデオンの勝利
 を暗示する。—21) リバ
 ノンは即ちその巨大
 な杉の森。またもや戦
 士を森に譬えてある。
 22) この予言の成就是、
 本三七・三三—三七參
 照。

第十一章 一)ダヴィド

王家は、切り倒された

三 ち、上智と聰明との靈、賢慮と剛毅との靈、知識と孝愛との靈なり。^三 彼は主を敬畏する精神²⁾に充滿ち、目に見る所によりて裁かず、耳に聞く所によりて是非せず、^四 貧しき者を正義もて裁き、地の柔和なる者の為に公平もて是非し、その口の杖³⁾もて地を打ち、その唇の氣息もて不敬なる者を殺さん。⁴⁾ ^五 正義はその腰の帶となり、忠誠はその腹の帶となるべし。⁵⁾ ^六 狼は小羊と共に棲み、^七 豹は仔山羊と共に臥し、^八 犢と獅子と羊と相共に宿り、^九 小さき童是等を導かん。⁶⁾ ^七 犢と熊と打連れて草を喰み、その仔等は共に憩い、獅子は牛の如く藁を食い、^八 乳兒は蝮の穴のほとりにて遊び戯れ、乳離れしたる兒は毒蛇の洞にその手を差入るべし。^九 すべてわが聖なる山の上に、^{一〇} 彼等害をなすことなく殺すことなからん。⁷⁾ ^{一〇} そは、

木のように、即ちひどくおちぶれた状態になつた時、一つの小枝を出す、それは花を咲かせ、実を結ぶ。この小枝とはメシアで、その結ぶ実とはメシアの平和の御国——徒一三・二三。——²⁾ 七つの数は彼が悟性と意志とのあらゆる賜物を有することを意味する。——³⁾ 罰を宣する判決。——⁴⁾ 撒後二・八。⁵⁾ イスラエル人に対するアツシリ
 ア人の不義と、天主に対するイスラエルの不忠とに反して。——⁶⁾ 小兒でもこれらの獸を牧することができる。——⁷⁾ 猛獸がおとなしくなる喩は、メシアによつて人の心が全く変わることを意味する。

一〇 海底を覆う水の如く、主の知識地に満渡ればなり。一〇その日にはイ
 エッセの根起ちて民の旗印となり、⁸⁾ 異邦人等も之に祈願うべく、
 二 その墓所⁹⁾は光榮に満たさるべし。¹⁰⁾ 二またその日にはかくなるべ
 し、主再び御手を伸べて、アツシリア人の許、エジプト、フェトロ
 ス、エチオピア、エラム、センナール、エマトに、更に海の島々に、
 三 なお存えてあるべき御民の残部を、取り集め給わん。 二三即ち国々
 の民の中に旗印を立て、イスラエルの落人を集え、ユダの散り行き
 三 者等を地の四極より集め給うべし。 二三なお、エフライムの嫉妬は
 除かれ、ユダの敵は亡びん、エフライムはユダを妬むことなく、ユ
 一四 ダはエフライムと戦うことなからん。 一四彼等は海の辺なるフィリス
 ト人の肩¹¹⁾に飛び行き、相携えて東の子等を掠むべし。エドムとモ
 アブとは彼等の手の指令に服し、アンモンの裔等も帰順するに至ら
 一五 ん。 一五主はエジプトの舌なす海¹²⁾を涸らし、河¹³⁾に向かい御手をあ

8) 将兵が軍旗の周囲に集うように、万国の民がメシアのまわりに集まる。 — 9) ヘブレオ語本「その憩いの所」。即ち鎮まるところ、即ちシオン。ヒエロニモは憩いを死をさすと思ひ、墓所と訳した。 — 10) 羅一五・一二。 — 11) ユダの山々を離れるにつれて、土地は次第に低くなり、ついは地中海の水準に至る。 — 12) 紅海。 13) エウフラト河。

一六
げて御息吹の力を用い、沓を穿きたるまま渡らしめんために、
之を打ちて七つの小川に分ち給うべし。一六かくてアツシリア人
の許なるわが民の残れる者には、道あらん、そはイスラエルに、
エジプトの地より上り来りし日にありしが如し。14)

第十二章

讃歌

一 その目には汝云うべし、1) 主よ、我汝を讃称え奉らん、そは
汝我に對して怒り給いしかど、その御怒今や去りて、汝我を慰め
給いたればなり。二 視よ、天主はわが救済者なり。我信頼して
行い、恐るることなからん、主はわが力としわが讃え奉る所に
して、わが為に救拯となり給えるが故なり。2) 三 汝等喜びて救済
者の泉より水を汲まん。3) 四 その日には汝等云うべし、汝等主を
讃称えよ、その御名を呼べ、諸民の間にその御業を知らしめ

14) エジプト脱出の時の奇蹟の如き有様が新たに起こるであらう。

第十二章 1) イスラエル人はエジプトでの奴隸の境涯から救われて後、殊に紅海を渡つて後、感謝の歌を口にしたように、アツシリアの捕囚から帰国した後にもそうするだらう。――2) 出一五・二。詩一一七・一四。――3) 約七・三七以下参照。

五 よ、その御名の偉大なることを憶えよ、と。
 六 汝等主に向かいて歌え、それは偉大なる事をなし給いたればなり。
 七 之を遍く地に告げよ。
 八 シオンに住める人々よ、喜び躍りて讃め称え奉れ、それはイスラエルの聖なる者、
 九 汝の中に在して偉大なればなり。

第十三章

バビロンの荒廢に関する予言

一 アモスの子イザヤが見たるバビロンに對する重荷。
 二 汝等暗き山に旗印を立て、
 三 声を高くし、手を挙げて、諸侯を門に入らしめよ。

四 我はわが聖別したる者等に命じ、怒りもてわが勇士、わが光榮に喜び躍る者等を召びたり。
 五 山々に群衆の声す、数多の民の如し。
 六 王等及び国々の民の群の轟く声す。
 七 万軍の主、軍隊に命を下し給えるなり。
 八 そは遠き国より、天の涯より来り、主その御忿怒を發する為の器と共に、全地を滅ぼさんとし給うなり。
 九 汝等嘆き叫べ、主の日近ければなり。
 一〇 そは主よりの荒廢の如く来るべし。
 一一 この故にすべての手に

第十三章 一―三

章からイザヤの予言の第二部（一三―二七章）が始まる。重荷とは禍を告げる天主の御言葉の意味する。
 二) 夜討ちの印に。
 三) 天罰を行ふために召された人々。

一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八
くべし。一五見出されたらん者はいずれも皆殺され、来合わせたらん者	むる者なからん。七) 各人その民の許に立帰り、何人も己が国に逃げ行	しめん。一四彼等は逃ぐる鹿の如く、羊の如くなるべし、されど之を集	激しき御怒りの日ゆえに、天を揺がし、地を動かしてその位置を狂わ	抑止え、権勢ある者の不遜を挫がん。二三男は黄金よりも、人は純金よ	りも貴く ⁶⁾ なるべし。二三その上我は万軍の主の御憤りゆえに、その	の悪を罰し、不敬なる輩をその不義ゆえに責め、不忠なる者の傲慢を	たず、日は昇りても暗く、月もその光を輝かすことなからん。五) 一我世
その罪人等を滅ぼし去るべし。一〇時に天の星辰とその輝きとは光を放	たず、日は昇りても暗く、月もその光を輝かすことなからん。五) 一我世	の悪を罰し、不敬なる輩をその不義ゆえに責め、不忠なる者の傲慢を	抑止え、権勢ある者の不遜を挫がん。二三男は黄金よりも、人は純金よ	りも貴く ⁶⁾ なるべし。二三その上我は万軍の主の御憤りゆえに、その	激しき御怒りの日ゆえに、天を揺がし、地を動かしてその位置を狂わ	しめん。一四彼等は逃ぐる鹿の如く、羊の如くなるべし、されど之を集	むる者なからん。七) 各人その民の許に立帰り、何人も己が国に逃げ行

4) その衝動で顔が紅潮するだろう。
 5) 主のこの特殊な天罰の日の特徴も世界公審判の記述にある特徴と同じである。一結三二・七。耳二・一〇以下。マテオ二四・二九。可一三・二四。路二一・二五。一六生きている者が貴金属ほど稀有になる。
 7) だれも彼らをまとめて統べる者がなくなる。

一六 は悉く劍に仆れん。一六 彼等の嬰兒等はその眼前にて打碎かれ、その家々は掠められ、その妻等は辱しめらるべし。一七 視よ、我はメデア人を起たしめて彼等に抗らしめん、かの者等は白銀をも求めず、黄金をも欲まず、一八 矢もて幼兒を殺し、乳兒の母をも憐まず、その眼に子等を容赦せざるべし。一九 かくて王国の中にて栄華を極め、カルデア人の誇りとしてその名高きかのバビロンは、主の覆滅し給いしソドマ、ゴモラの如くならん。二〇 そこには末長く人の住むことなく、千代八千代まで家の建つことなからん、アラビア人も彼処には天幕を張らず、牧者等も彼処には憩わざるべし。二二 ただ野獸彼処に息い、悪龍その家に満ち、駝鳥彼処に棲い、毛深きもの¹⁰⁾ 彼処に躍らん。二三 また彼処にては、梟その建物の中にて、怪鳥¹¹⁾ 歡樂の宮にて、互に応えん。

第十四章

バビロン王滅亡の歌

一 その時¹⁾は近くして、將に來らんとす。その日は遠からじ。蓋し主ヤコブ

8) 詩一三

六・九。

9) 創一九

・二四。

10) 野獸の化物。

11) 女面の怪鳥。へ

ブレオ語

「狼と野

犬」。

1) バビロ

八 七 六 五 四 三 二
 を憐み、なおもイスラエルの中より選びて、之をその地に落着かし
 め給わん。異邦人等また之に加わりて、ヤコブの家に附くべし。²⁾
 二 諸民彼等³⁾ を迎えて、その処に導き入らん。イスラエルの家彼
 等⁴⁾ を召抱え、主の地において僕婢となし、曾て己を捕虜となし
 たる者を捕虜となし、己の搾取者等に従わしむべし。⁵⁾ またその日
 にはかくなるべし、天主汝の労苦汝の患難を去り、汝が曩に服した
 る辛き奴隸の役を免じて、汝に安息を与え給わん時 汝、バビロ
 ン王を咎むるこの歌を用いて云わん、搾取する者いかにかなれる、
 課税いかにしてか熄みたる。主は不敬なる者の杖と、治むる者の
 笞とを折り給い、憤りては諸民を打ちて癒すこと能わざる傷を負
 わせし者、激しく怒りては国々の民を征服え、酷やかに責め苦しめ
 し者を挫き給えり。地は普く静まりて安らぎ、喜びて声をあげた
 り。八 樅樹も、リバノンの杉も、汝に就きて悦べり、曰く、汝の眠

ンに禍の下る日。
 2) イスラエルが新た
 に選まれ、バビロン
 の捕囚から連れ帰ら
 れるといふ考えは、
 イザヤ書でしばしば
 そうであるように、
 新約の天主の御国建
 設に移つて行く。
 3) イスラエル人。
 4) 異邦人。――5) これ
 はチロの勅令の出た
 時に成就されたが完
 全に実現されるのは
 キリスト教の時代に
 なつて、異教徒が真
 の信仰に改宗する時

九 りしより以来、我等を伐らんとて上り来る者なし、と。⁶⁾ 地下なる冥府も
 汝の来るを迎えんとて騒ぎ、汝の為に巨人等を起たしめたり。地の諸侯み
 な、国々の民の諸侯みな、その玉座より起上れり。¹⁰⁾ 彼等は挙りて応え、
 汝に云わん、汝もまた我等の如く傷つきたり、汝も我等に似たる者となれ
 り、と。¹¹⁾ 汝の誇りは冥府に引き落されたり、汝の屍は倒れたり。蠹魚
 汝の下に褥たり、蛆汝の衾たるべし。¹²⁾ 朝に昇りし明星よ、汝はいかに
 して天より落ちたるか。国々の民を傷つけし者よ、汝はいかにして地に倒
 れたるか。¹³⁾ 汝は心の中に云えり、我は天に昇り、わが玉座を天主の星よ
 りも高くし、北の方なる契約の山に坐し、¹⁴⁾ 雲の高き上に昇り、至高者
 に等しくならん、と。¹⁵⁾ 然りながら汝は冥府に引き落されて、坑の深き所
 に至るべし。¹⁶⁾ 汝を見んとする者は、汝の方に身を傾けて、汝を眺めん、
 是果して地を騒がしたる人、国々を震撼したる者なりや、¹⁷⁾ 世を荒野と化
 し、その諸邑を毀ち、獄屋を繋がれし者の為に開かざりし者なりや、と。

⁶⁾ アツシリア人がこれらの木を荒らすこととが、もはやなくなつたから。¹⁷⁾ 但三一五参照。
 バビロニア人の信ずる所によれば、神々の居所は北のはずれの神々の集う山の上であつた。

二六	二五	二四	二三	二三	二二	二〇	一九八
等 ^ら より除 ^{のぞ} かれ、彼の重荷 ^{おもに} は彼等 ^{かれら} の肩 ^{かた} より取り去 ^と らるべし。二六 是 ^{これ} は我 ^{われ} が全地 ^{ぜんち}	て ⁹⁾ アツシリア人 ^{びと} を打破 ^{うちやぶ} り、わが山々 ^{やまやま} にて之 ^{これ} を蹂躪 ^{ふみにじ} らん。かくて彼の軀 ^{くびき} は彼	わが思 ^{おも} いたる如 ^{ごと} くなり、わが志 ^{こころざ} したる如 ^{ごと} く、二五 事 ^{こと} 起 ^{おこ} らん。即 ^{すなわ} ち我 ^{われ} はわが地 ^ち に	もて之 ^{これ} を掃 ^{はら} わん、と万軍 ^{ばんぐん} の主 ^{しゅ} 云 ^い 給 ^{たま} う。二四 万軍 ^{ばんぐん} の主 ^{しゅ} 誓 ^{ちか} いて曰 ^{のたま} いけるは、必 ^{かなら} ず	と主 ^{しゅ} 云 ^い 給 ^{たま} う。二三 我 ^{われ} また之 ^{これ} を蝟 ^{はりねずみ} の所 ^{もの} 有 ^あ となし、水 ^{みづ} 沼 ^{ぬま} となし、なほ滅亡 ^{ほろび} の筈 ^{はず}	給 ^{たま} う。しかして我 ^{われ} バビロン ^{バビロン} の名 ^な とその遺 ^{のこ} れる者 ^{もの} 、その胤 ^{たね} 、その裔 ^{すえ} を亡 ^{ほろ} ぼさん、	に都市 ^{まち} を満 ^み たすことなかるべし。二三 我 ^{われ} 起 ^た ちて彼等 ^{かれら} を討 ^う たん、と万軍 ^{ばんぐん} の主 ^{しゅ} 云 ^い	一八 国々 ^{くにくに} の王等 ^{おうたち} はみな悉 ^{ことごと} く栄 ^{はまれ} 誉 ^{うち} の裡 ^{うち} にその廟 ^{びやう} に眠 ^{ねむ} る。一九 されど汝 ^{なんじ} は用 ^{よう} なき切株 ^{きりかぶ}

8) バビロンの王はいやらし
い死骸となつて、
他の死骸の山の下
積みになつてい
る
9) 天主の特別の領分たるパ
レスチナの地。
10) イスラエル人。

二七 に対して廻らしたる計画なり、是は万国の民の上に差伸べたる
 手なり。二七 実に万軍の主かく定め給えり、されば誰か之を動か
 すことを得ん。その御手既に伸べられたり、されば誰か之を翻
 二八 すことを得ん。二八 アカズ王の死せる年¹¹⁾にこの重荷至れり。¹²⁾
 二九 ファリステア全土よ、汝を打ちし杖¹³⁾折れたればとて悦ぶな
 かれ。蓋は蛇の根より毒蛇出で、その裔は鳥を吞むべければな
 三〇 り。¹⁴⁾ 三〇 貧しき者の初子は養われ、貧しき者は安らかに眠らん。
 されど我饑饉もて汝の根を枯らし、汝の遺れる者を滅ぼすべし。
 三一 門よ、泣き喚け、城市よ、叫べ、ファイリステア全土は打伏せ
 られたり。蓋は煙北より来るべく、¹⁵⁾ 其の進撃の軍隊より遁れ
 得る者なければなり。三二 さてその国民の使者等に何と答えん
 か。¹⁶⁾ 主シオンの基を定め給えり、さればその民の中なる貧し
 き者、彼に希望を置くべし、とこそ。

11) 西紀前七二六年。
 12) 本一三・一参照。
 13) ダヴィド家の王笏。
 14) 毒蛇はエゼキアをさす
 王下一八・八参照。本節
 がアツシリア軍をさすと
 解釈している人もある。
 15) アツスル、センナケリ
 ブ。アツスルが火を放ち
 つつ、即ちいわば煙をな
 して、押しよせて来るだ
 ろう。——16) ファリスト人
 がイエルサレムへ、共同
 の敵防衛の同盟締結を提
 議するため、至急派遣す
 る使者たち。

第十五章

モアブの荒廢に関する予言

一 モアブ¹⁾ に対する重荷²⁾。アル・モアブ³⁾ は夜に荒らされて黙したり、モアブの石垣は夜に荒らされて黙したり。二 家⁴⁾ とデイボンとは高き処に上れり、ナボの為に嘆かんとてなり。モアブはメダバの為に泣き叫べり。彼等の頭は悉く禿となり、その鬚はすべて剃り落さるべし。三 彼等は粗麻布に帯してその街衢にあり、その屋根⁶⁾の上、その広場の中にて皆泣き叫び、涙流れ降らん。四 ヘセボンとエレアレとは叫ぶべし、その声はヤサにまで聞ゆるなり。モアブの戦士之が為に泣き叫び、その靈魂已が為に泣き叫ばん。五 わが心モアブに向かいて叫ぶべし、

第十五章

1) 死海の東及び南にあるモアブは、ダヴィドに屈服したが、イスラエル国が分裂した時、朝貢を拒否し、ナブコドノソルの援軍となつてユデア征服を共に行なつた。2) 本一三・一に同じ。3) アル・モアブは、アルノ河畔にある。4) モアブの王家。5) 耶四八・三七。結七・一八。1頭の毛とひげとを剃るのは、哀悼のしるし。6) 近東では昔から、この頃のコンクリート建てビルのように、屋根が平ら。7) イザヤは人情から同情する。

六 その門⁸⁾は三歳の牝牛⁹⁾、セゴルにまで及ばん。蓋し人々泣きつつルイトの坂を登り、オルナイムの路にて滅亡を嘆く叫びをあぐべし。実にネムリムの水¹⁰⁾は荒地とならん、そは草枯れ、芽萎れ、緑きもの全く滅びたればなり。彼等の天罰はその業の大なるに相当すべし、人々彼等を柳の川¹¹⁾に導かん。ハそれ、叫喚はモアブの境を繞り、その嘆きはガリムにまで、¹²⁾またエリムの井戸にまで及ぶ。そはデイボンの水¹³⁾に血満ちたればなり。実に我はデイボンの上に更に多くを下し、モアブの逃亡者¹⁴⁾とこの地の遺れる者とに獅子を遣さん。

第十六章

モアブ人の天罰に対する予言

一 主よ、荒野の岩¹⁾より娘シオンの山へ、地を治むる

8) とりでのかんぬき。即ちモアブ全土はとりでに囲まれている。
 9) 三歳の牝牛のように強い。
 10) 見事な沃野。――11) 柳の川とは今日ワヂ・エル・ヘサで、モアブとエドムとの境界をなしていた。
 12) ガリムはモアブの北部、エリムは南部にあつた。――13) アルノン河。
 14) 逃亡者の一部は惨殺され、一部は野獣の餌食になるであらう。

二 者に小羊²⁾を遣^{つか}し給^{たま}え。 二さらばかくなるべし、モアブの娘^{むすめ}
 等は、逃^にげ去^さる鳥^{とり}の如^{ごと}く、巢^{すだ}立ちする雛^{ひな}の如^{ごと}く、アルノン³⁾
 の渡^{わた}場^{りば}にあらん。 三協議^{きぎょうぎ}せよ、議^ぎ会^{かい}を召^し集^{しゅう}せよ、汝^{なんじ}の影^{かげ}⁴⁾
 を正^ま午^{ひる}にも夜^{よる}の如^{ごと}くならしめ、遁^{のが}れ来^{きた}る者^{もの}を隠^{かく}し、流^さ浪^{すら}う者^{もの}
 を裏^{うら}切^ぎるなかれ。 四わが落^{おち}人^{うと}は汝^{なんじ}の許^{もと}に住^すまわん。 汝^{なんじ}、荒^あら
 す者^{もの}の面^{おもて}に立^たちて、彼^{かれ}等^らモアブを⁵⁾庇^{かば}う者^{もの}となれかし。 実^げに
 戦^{せん}塵^{じん}は收^{おさ}まり、悲^ひ慘^{さん}なる者^{もの}はなくなり、地^ちを蹂^{ふみ}躪^{にじ}れる者^{もの}は失^う
 せたり。 五かくて憐^あれみにより一つの玉^ぎ座^{よくざ}設^{もう}けられ、ダヴィド
 の幕^{まく}屋^やにて審^さ判^{はん}くに義^ぎを求^{もと}め、速^{すみ}かに正^{ただ}しきことを行^{おこ}なう者^{もの}、⁷⁾
 信^{まこと}実^{こと}もてその上^{うえ}に坐^ざせん。 六我^{われ}等^らはモアブの傲^{ごう}慢^{まん}を聞^きけり。
 その傲^{ごう}慢^{まん}なること甚^{はなは}だし。 その傲^{ごう}慢^{まん}、その僭^{せん}越^{えつ}、その憤^{いきどお}りは、
 その力^{ちから}にも過^すぎたり。 七さればモアブはモアブに向^むかいて泣^な
 き叫^{さけ}ばん、人^{ひと}挙^{こぞ}りて泣^なき叫^{さけ}ばん。 焼^やきし煉^{れん}瓦^がの塀^{へい}の上^{うえ}にて悦^{よろこ}

すなわち「セラ」。――2) 服従
 のしるしとして、小羊数頭
 または一頭の貢物。――3) こ
 の河はモアブの地のほぼ中
 央にある。――4) 影はしばし
 ば「庇護」を意味する喩。
 「夜の影」とは多大の庇護。
 5) ラテン語の「モアブ」と
 いう名詞は呼びかけでなく
 独立主格。それで意味は、
 「モアブにとりての避難所
 たり給え」。――6) シオンは滅
 亡しないだろ。――7) ここ
 ではメシアをさす。――8) 耶
 四八・二九。

八 もの ぶ者⁹⁾に、汝等^{なんじら}彼等の天罰^{てんばつ}を告げよ。ハそはへセボンの郊外^{こうがい}は荒廢^{こうはい}し、国^{くに}々^{くに}の主君等^{きみたち}サバマの葡萄酒^{ぶどうばたけ}を伐^きり荒^あらしたればなり。その枝^{えだ}はヤゼルにまで至^{いた}り、荒野^{あれの}に¹⁰⁾さまよい入りたり。その嫩枝^{わかえだ}の遺^{のこ}れるものは海^{うみ}を渡^{わた}れり。九 これ 是によりて我^{われ}はヤゼルの泣^なくに合^あせて、サバマの葡萄酒^{ぶどうばたけ}を悼^{いた}み嘆^{なげ}か
ん。へセボンとエレアレよ、我^{われ}わが涙^{なみだ}もて汝^{なんじ}を浸^{ひた}さん。そは蹂躪^{ふみにじるもの}者の声^{こゑ}、¹¹⁾
汝^{なんじ}の摘^つむ葡萄^{ぶどう}、汝^{なんじ}の收穫^{とりのいれ}の上に襲^{おそ}いかかりたればなり。一〇 たの かくて樂^{たの}しみも
喜^{よろこ}びも沃野^{よくや}より取去^{とりさ}られ、最早^{もはや}葡萄酒^{ぶどうばたけ}には雀躍^{こおどり}も歡聲^{よろこびのこゑ}もあらざるべし。
酒搾場^{しほりば}にて葡萄^{ぶどう}を踏^ふみ慣^なれし者^{もの}も、また踏^ふむことなからん。その踏^ふむ者等^{ものども}
二 こゑ の声^{こゑ}は、我^{われ}之^{これ}を奪^{うば}えり。二 これ 是に由^よりてわが肚^{はら}はモアブに向^むかいて小琴^{おごと}の如^{ごと}
く鳴^なり、わが腸^{はらわた}も焼^やきし煉瓦^{れんが}の塼^{へい}¹²⁾に向^むかいて然^{しか}り。一三 また かくなるべし、
モアブはその高き処^{たかところ}¹³⁾にて倦^うみたりと見^みゆる時^{とき}、その聖所^{せいじよ}に入りて願^{ねが}わ
ん、されど何事^{なにこと}も叶^{かな}わざるべし。一三 これ 是は主^{しゅ}が曾^{かつ}てモアブに語^{かた}り給^{たま}ひし御言^{みことば}
なり。一四 いま されど今^{いま}は主語^{しゆかた}りて曰^{のたま}えらく、民多^{たみおほ}きにも拘^かわらず、モアブの榮華^{えいが}

9) 即ち塼が堅固だから大丈夫と妄信してゐる者。ヘブレオ語本「キルハレセト」。一〇 東の方へ。一一) その地を荒らした敵の野蠻な叫び。一二) ヘブレオ語本「キルハレセト」。一三) 偶像の神々、わけてもカモスを祀つた所。

は、雇用人の年期¹⁴⁾の如く、三年にして取り去られ、¹⁵⁾遺るべき者は少くして力弱く、また大となることなからん。

第十七章

ダマスコとサマリアとに下る天罰と、アツシリア人の敗北とに関する予言

一 ダマスコに對する重荷¹⁾。視よ、ダマスコは城市として存せざるに至り、荒れ果てて石の堆とならん。ニアロエルの諸市は人去りて群る家畜のものとなり、彼等そこに休むべけれど、愕かす者あらじ。²⁾ 天祐³⁾はエフライムを、主権はダマスコを離れ、シリアの残れる者はイスラエルの子等の榮華⁴⁾の如くならん、と万軍の主云い給う。⁴⁾ その日にはなくなるべし、ヤコブの榮光薄れ、その肉の脂肪⁵⁾落つるに至るべし。⁵⁾ そは恰も收穫に遺

14) 即ち苦勞の多い悲しい年。¹⁵⁾ この予言はエゼキア統治の第三年、アツシリア人がヨルダン東方の地を荒らした時に、まず成就した。

第十七章 1) 本一三・一参照。

2) 人のいない荒野。— 3) ダマスコと北イスラエルとは同盟していた。ヘブレオ語本「エフライムのとりで」。— 4) 軍勢、人口、諸都市など、すべて一國の民の誇り得るもの。— 5) 脂肪は聖書では思い上がつた傲慢の象どり。

六 れるを集め、腕に穂を拾わんとするが如く、またラファイムの谷に穂を探すが如くならん。⁶⁾六されどその中の遺るべき者は、一房の葡萄の如く、且橄欖樹を揺動かしたる後、枝先に橄欖の二つ三つ、或はその梢にその実の四つ五つあるが如くなるべし、と主イスラエルの天主云い給う。⁷⁾その日には人その造り主に向かいて身を屈め、その眼イスラエルの聖なる者を仰ぎ望み、八己が手に成れる祭壇に向かいて身を屈むることなく、己が指の作りたる並木や社殿⁷⁾を顧みることなからん。⁹⁾その日には彼の堅き城市々々も、曾てイスラエルの子等の面前に、人々が棄てて逃げたる鋤や穀物の如く、棄てらるるに至り、汝は荒野となるべし。¹⁰⁾そは汝己が救主なる天主を忘れ、己が力ある援助者を思い出でざりしに由りてなり。この故に汝久しきに耐うる植物を植え、異なれる種を播くべし。⁸⁾二そは汝の植えたる日に野葡萄たらん。また汝

⁶⁾取入れをすませ、落穂をひろい集めたあとには、ほとんど残つていない。ラファイムの谷はイエルサレムとベトレヘムとの間にある⁷⁾ヘブレオ語本では、社殿および並木の代りに「アシエラおよび目の柱」とある。アシエラの像と日の神パールに献げられたしるしとをさす。¹⁰⁾お前が長持ちする草木を植えても、一向お前の役に立たぬであらう。

二三 二
 の種は早く花を開くと雖も、収穫の日には刈るべきもの
 なく、汝の悲しみ大なるべし。一、禍なるかな、鳴り轟く
 大海の如き、多くの民の大群。9) その諸隊の雄叫は大水
 の音の如し。二、三国々の民は溢るる水の轟音の如く響動め
 かん。されど主之を攻めて、遠く奔らしめ給うべし。彼
 等は風に吹かるる山々の埃の如く、疾風の前に渦巻く塵
 の如く、運び去られん。一、日暮時至らば、視よ、怖じ惑う
 ことあるべし。朝には、彼等既にあらじ。是、我等を荒
 らしたる者等の分なり、我等を掠めたる者等の運命なり。

第十八章

イスラエルに空しき希望を抱かしめたるエチオピア人に来る禍―彼等の将来の改心

一 禍なるかな、エチオピアの河の彼方なる、鼓翼の地。¹⁾
 二 是は水²⁾に葦舟を浮べ、使者を乗せて、海路より遣す。

9) 以下の予言はイスラエルを虐げ
 る者どもとシリア即ちアツシリア
 とに関するもので、これは西紀前
 七〇一年ペストでアツシリア軍が
 全滅した時成就した。王下一九・
 三五以下参照。

第十八章 1) エチオピアを羽ばた
 きの地と言うのは、そこから蝗の
 大群が飛び立つから。―2) ナイル

「汝等急ぎの使等よ、分裂したる国民、その上の者また他にあらざる
 恐るべき民、³⁾ 待望みてしかも蹂躪られたる国民、河川の貫き流るる
 地におる者の許に行け。⁴⁾ ^三すべて世界に住み、地に居る者等よ、山々
 に旗の揚げられん時、汝等之を見、喇叭の音を聞くべし。^四 それ、主
 は我にかく曰えり。我は正午の光明らかなる如く、また収穫の日に露
 の雲ある如く、わが処に静まり居て見守らん。^五 そは収穫の前に悉く
 花を開きたり、実之に生ずべしと雖も、熟すること全からじ。その枝
 は鎌もて刈られ、残れるは切り取られて棄てらるべし。^六 かくて是等
 はすべて山の鳥や地の獸に与えられ、鳥はその上に留りて夏を送り、
 地の獸は皆その上にて冬を過さん。⁵⁾ ^七 その時分裂したる民、その上の
 者また他にあらざる恐るべき民、待ちに待ちてしかも蹂躪られたる国
 民、河川の貫き流るる地におる者より、万軍の主の御許、万軍の主の
 御名の処、シオンの山に、礼物を持来るべし。⁶⁾

河とその運河。

³⁾ ヘブレオ語本

「その在りてより

この方恐るべき

民」。⁴⁾ エチオピ

アは、西紀前八世

紀の末頃エジプト

全土を支配してい

た。シヤバカ王は

その甥タラカを将

として、ユダ救援

に軍勢を派遣し、

センナケリブと戦

わせた。⁵⁾ この

予言の成就につい

ては、本三七・三

六参照。⁶⁾ アツ

シリアの敗北を目

撃したエチオピア国民は天主に礼物を献げた。

第十九章

エジプト人に下る天罰―彼等が改心後の御祝福

一	エジプトに對する重荷 ^{おもに} 。看 ^み よ、主疾 ^{しゆはや} き雲 ^{くも} に乗りて ²⁾ エジプト
二	に入り給 ^{たま} わん。エジプトの偶像 ^{ぐうざう} はその御面前 ^{みまへ} に動搖 ^{どうよう} し、エジプト
三	の心 ^{こころ} はその中 ^{なか} にて潰 ^{つぶ} ゆべし。我 ^{われ} エジプト人 ^{びと} を驅 ^か りてエジプト人 ^{びと}
四	に向 ^む かわしめん、即 ^{すなわ} ち彼等 ^{かれら} 、兄弟 ^{きやうだい} は兄弟 ^{きやうだい} を、友 ^{とも} は友 ^{とも} を、城市 ^{まち} は城 ^ま
五	市 ^ち を、王 ^く 国 ^{くに} は王 ^く 国 ^{くに} を敵 ^{てき} として戦 ^{たたか} うべし。三 エジプトの意氣 ^{いき} はその
六	肚 ^{はら} の中 ^{うち} にて挫 ^{くじ} けん、我 ^{われ} その策謀 ^{はかりごと} を打破 ^{うちやぶ} らん、彼等 ^{かれら} はその偶像 ^{ぐうざう} 、及 ^{およ}
七	びその陰陽師 ^{おんようし} 、巫女 ^{みこ} 、魔術師 ^{まじゆつし} 等に問 ^と うべし。四 我 ^{われ} はエジプトを酷 ^{むと}
八	き主君 ^{きみ} の手 ^て に付 ^つ さん、強 ^{つよ} き王 ^{おう} 彼等 ^{かれら} を治 ^{おさ} むべし、と主万軍 ^{しゆばんぐん} の天主 ^{てんしゆい} 云
九	い給 ^{たま} う。3) 五 海 ^{うみ} 4) の水 ^{みづ} は干 ^ひ あがり、河 ^{かわ} もまた涸 ^{かわ} れ乾 ^{かわ} くべし。六 河川 ^{かわ}
十	は水 ^{みづ} 絶 ^た え、堤 ^{つみ} の流 ^{ながれ} はやせて涸 ^{かわ} れ、葦 ^{よし} と蘆 ^{あし} と萎 ^{しお} れ果 ^は てん。七 河床 ^{かわど} は

第十九章 1) 本一三・

一参照。―2) 審判者と

して急ぎ至り給う形容

3) サマリアが滅びた後

オゼーの同盟者たちは

ぐずぐずしている内に

サルゴンに打ち破られ

たが、エジプトもその

仲間であつた。―4) ナ

イル河をさす。その八

月から始まる氾濫がな

くなり、そのため全土

が荒地になる。

一五 酔える者の足もとを謬り、嘔吐するが如くならしめ給えり。一五 かくて
 一四 の隅石、⁸⁾ エジプトを欺きたり。一四 主はその中に眩暈の気味を混え給
 一三 がエジプトに就きて志し給えることを、告げ示せかし。一三 タニスの諸
 一三 侯は愚者になれり、メムフィス⁷⁾ の諸侯は力を失えり。彼等はその民
 一三 云わんとやする。一三 汝の智者等今何処にかある。彼等汝に、万軍の主
 一三 にしてファラオに向かい、我は智者の子なり、古の王等の子なり、と
 一三 になれり。ファラオの賢き顧問官等は愚なる策を献じたり。汝等いか
 一三 き、すべて魚捕る池⁵⁾ を作りし者も然せん。二タニス⁶⁾ の諸侯は愚者
 一〇 細糸を梳く者織る者などは、うろたえ騒ぐべし。一〇 その潤える所は乾
 九 嘆き、水の上に網を張る者は憂悶に慄れん。九 麻に加工する者、その
 八 てあらずなるべし。八 漁師もまた悲しみ、すべて河に釣針を下す者は
 八 其の源泉よりして露になり、凡て水の辺に蒔きたるものは、乾き枯れ
 八 嘆き、水の上に網を張る者は憂悶に慄れん。九 麻に加工する者、その

5) 河との連絡を絶つて、残留してゐる魚を捕る池。
 6) タニス(ソアン)は、モイゼの時代にファラオの居住した旧都。一7) エジプトにある有名な王都。一8) ヴルガタでは、この語はエジプトの同格名詞で、その大なる国力をさす。ヘブレオ語本では主格で王の似而非顧問たちを意味する。

一六 エジプトには、頭にも尾にも、⁹⁾ 屈み服う者にも統べ治むる者にも、
 なすべき業なからん。一六その日エジプトは女の如くなり、万軍の主が
 一七 その上に動かし給うべき、御手の動きによりて愕き怖るべし。一七時に
 ユダの地はエジプトの恐るる所とならん。之を心に留むる者は、いず
 れも皆、万軍の主のそれに就きて思い定め給える御計画により、恐れ
 一八 戦くべし。一八その日エジプトの地に、カナアンの語を語り¹⁰⁾ 万軍の主
 によりて誓う、五つの都市あらん。その一つは太陽の都市と称えらる
 一九 べし。一九その日エジプトの国の中には主の祭壇、その境界には主の記
 二〇 念碑あらん。二〇是はエジプトの地にて万軍の主の徴となり証となるべ
 し。蓋し彼等虐ぐる者に遇いて主に呼わらん、彼等を解放すべき救
 二 主なる防衛者を之に遣し給い、三かくて主エジプトに知られ給うに至
 らん。その日にはエジプト人等主を知り、犠牲と供物とを捧げて之を
 三 崇め、また主に誓願を立てて之を果すべし。¹¹⁾ 三主は禍もてエジプト

⁹⁾ ヘブレオ語本「棕櫚または葦」。大なる者も小なる者も、これを救うことはできない。
¹⁰⁾ 主の民の考え方を採用するといふことの、象徴的表現。――¹¹⁾ エジプトにいたエデア人移民がヤーヴェを崇めた時代、およびテバイスの聖者や聖アタナジオ、聖アウグスチノの時代を思え。

を撃ち、之を癒し給わん。かくて彼等主に立帰れば、之に御心を和げて彼等を癒し給わん。三三その日エジプトよりアッシリアに至る路ありて、アッシリア人はエジプトに、エジプト人はアッシリア人の許に往来し、エジプト人アッシリア人に仕うべし。12) 二四その日イスラエルはエジプト人、及びアッシリア人に並ぶ第三の者たり、地の只中には祝福あらん。三五それ、万軍の主之を祝して曰えり、エジプトのわが民、及びアッシリア人に対するわが手業は祝せられよかし。されどイスラエルはわが嗣業なり、と。

12) アッシリアとエジプトとは和睦し、信仰と愛とで一致するであらう。

第二十章

エジプト人及びエチオピア人の敗北

一 タルタン¹⁾のアゾトに入りし年、すなわち彼、アッシリア人の王サルゴン²⁾の遣す所となりて、アゾト³⁾と戦い之を取りし折、ニその時主

第二十章 1) 最高指揮官のアッシリアの職名。

2) サルゴンはサルマナツサル五世の後継者で西紀前七二二―七〇五年王位に在つた。

3) アゾトはフィリスト人の国の一都市。

アモスの子イザヤの手に托し語りて曰いけるは、行きて、汝の腰より粗麻衣⁴⁾を解き、汝の足よりその沓を脱れ、と。よりて彼然なし
 て、裸、素足のまま歩みぬ。⁵⁾ 主また曰いけるは、わが下僕イザヤ
 は、裸、素足のまま歩みて、三年の間エジプトの爲、エチオピアの
 爲に徴となり、前表となりしが、⁴⁾ アツシリア人の王もまたかくの
 ごとく、エジプトの捕虜と、エチオピアの流人とを、若きも老いたる
 も裸、素足となし、臀も露のまま引き行きて、エジプトを辱しめん。
 五 その時彼等は怖れて、エチオピアに希望をかけ、エジプトを誇と
 したることを恥ずべし。⁶⁾ その日この島の住民等は云わん、看よ、
 是の如きが我等の希望をかけ、遁れ行きて援助を仰ぎ、アツシリア
 人の王の面前より我等を救わんことを求めしものなりしなり。さら
 ば我等いかで免るべけんや、と。

4) 山羊の毛で織つた上衣。――5) イザヤが戦争の捕虜や奴隸のうちに、身に着ける物を腰布まで悉く取つて歩いたのは、この象徴的行動によつてエジプトの運命を予告するため。
 6) 地中海に沿うた地帯、即ちパレスチナ。

第二十一章

バビロン、エドム人及びアラビア人に対する禍の予言

一 海の荒野の重荷。¹⁾ そは旋風の南より来る
 が如く、荒野より、恐るべき地より来るべ
 し。²⁾ 惨しき啓視我に示されたり。信実なき
 者は信実なく行動い、荒らす者は荒らす。³⁾
 エラムよ、上れ、メデア人よ、囲め、我はそ
 の呻吟の声を全く止めたり。³⁾ この故に痛苦
 わが腰に満ち、分娩する女の苦患の如き苦患
 我を襲えり。我聞くや倒れ、見るや怖惑いた
 り。⁴⁾ わが心挫けぬ、暗黒我を愕かせり。わ
 が愛するバビロンは、我にとり恐ろしきもの
 となりたり。⁴⁾ 食卓の設備せよ、望樓に上り

第二十一章 1)「海の荒野」とは、バベルをさ
 す(九節参照)。それをかく呼ぶ理由は、そこ
 をエウフラト、チグリス両河が運河網のように
 縦横に通じており、天罰によつて荒野と化すか
 らである。2)「重荷」については本一三・一参
 照。3)南方のエドム、アラビア両沙漠から吹
 いて来る暴風は、バビロニアの平地で最も恐ろ
 しいものであつた。4)ヘブレオ語本「奪う者
 は奪い、荒らす者は荒らす」。バビロンが天下
 を支配した特徴は、諸国に対して信を破り、掠
 奪征服の戦争をしかけたこと。5)かつて眼の
 「愛するもの」即ち眼の「楽しみ」であつたバ
 ビロンは、今やイザヤにとつて恐ろしいものと
 なつた。

六 て、飲食する者等⁵⁾を見守れ。侯たる人々よ、起ちて楯を取
 七 れかし。六それ、主は我にかく曰えり、往きて望見の者を置
 八 き、何を見るとき之を告げしめよ、と。七彼、車及び二人の
 九 騎兵、即ち驢馬に騎れる者と駱駝に騎れる者と⁶⁾を見、瞳を
 凝らして注意深く之を打目成れり。八やがて獅子の如く叫び
 出でぬ、我昼は終日立ちて主の望樓にあり、夜はよもすがら
 立ちてわが守るべき所にあり。⁷⁾九看よ、かの人、車に乗れる
 者、二人の騎兵と共に来る。彼応えて云えらく、倒れたり、
 バビロンは倒れたり。その神々の彫像は悉く地に碎け散り
 たり。⁸⁾一〇わが打碎かれたる者等よ、⁹⁾わが打禾場の子等よ、
 我は万軍の主イスラエルの天主より聞きたる所を汝等に告げ
 たるぞ。二ドウマ¹⁰⁾に対する重荷。セイルより我に呼わる者
 あり、曰く、衛士よ、夜は何程ぞ。衛士よ、夜は何程ぞ。¹¹⁾

5) 征服される前にバベルの人々がしていたこと。
 6) ペルシヤでは驢馬と駱駝とが分捕物の運搬に使われた。――⁷⁾哈二・一。――⁸⁾耶五一・八。黙一四・八。
 9) 「打ち碎く」とはいろいろな苦しみを伴なう天罰を譬えて言つたもの。――¹⁰⁾ドウマはイスマエル族の意。けれども他の説では、「沈黙」の意に解し、一節で、「海の荒野」がバビロンを表わしたのと同様な象徴的言い方とする。――¹¹⁾夜に譬えられている災難に、早く転期が来てほしい。

二三 衛士云いけるは、朝も夜も来る。12) 汝等もし尋ねるならば尋ねよ。いざ歸り来れ。13) 一三 アラビアに對する重荷。汝等は夜に森の中にて、デダン人14) の徑にて眠らん。一四 汝等南の地に住める者よ、渴ける者を迎うるには、水を携え行け。逃げ来る者をば、糧を携えて迎えよ。一五 蓋し彼等は劍身に迫れる刃、引搾りたる弓、激しき戦闘を遁れて逃げ来りたればなり。一六 実に主は我にかく曰えり、今年、即ち雇われ人の年期の如きが過ぎなば、ケダル15) の榮華は全く取り去らるべし。一七 しかしてケダルの子等の雄々しき射手の員数の中、残れる者は少からん、と。是、主イスラエルの天主の曰える所なり。

第二十二章

イエルサレムに関する啓視

12) 朝と夜、即ち幸福と不幸はかわるがわる来る。——13) 「それはいつかわからないから、また尋ねてくれ」の意。他の説では、「改心せよ」。——14) 北アラビアの交易を業とする民族。ヘブレオ語本「デダンの隊商よ、汝らはアラビアの森に宿らん」。即ち曾ては勢力のあつたデダン族も辛うじて進むことが出来るような悲惨な境遇に陥らねばならぬ15) ケダルは死海の東、デダン族の近所にいた民族。

一 啓視の谷¹⁾に對する重荷。汝^{なんじ}に何事^{なにこと}がありて、みな屋根^{やね}に上^{のぼ}るや。二 汝^{なんじ}、喧噪^{けんそう}に満ちて賑^{にぎわ}う邑^{まち}、歡樂^{かんらく}の都^{みやこ}よ、汝^{なんじ}の殺^{ころ}されし者は、劍^{つるぎ}もて殺^{ころ}されたるにもあらず、また戰鬪^{たたかい}の間に死^{あいたし}したるにもあらず、三 汝^{なんじ}の諸侯^{しよこう}はみな一齊^{せい}に逃^にげたれど、嚴^{きび}しく縛^{いまし}められ、見出^{みいだ}されし者は悉^{ものことごと}く共に繫^{つな}がれたり。人々^{ひとびと}は遠^{とお}く逃^にげ去^さりぬ。四 この故^{ゆえ}に我^{われ}は云^いいたり、汝等^{なんじら}わが許^{もと}より退^{しりぞ}き去^され。我^{われ}太^{いた}く泣^なかん。わが民^{たみ}の娘^{むすめ}の荒^あらされたるに就^つきて、我^{われ}を慰^{なぐさ}めんと努^{つと}むるなかれ。五 蓋^そは主^{しゅ}万軍^{ばんぐん}の天主^{てんしゆ}、啓視^{みしらせ}の谷^{たに}に殺戮^{さつりく}、蹂躪^{じゆうりく}、啼泣^{ていきゆう}の日^ひを遣^{つかわ}して、石垣^{いしがき}を穿^{うが}ち、山々^{やまやま}三)の上^{うへ}にその威^いを現^{あらわ}し給^{たま}えばなり。六 エラムは箴^{えびら}を、騎馬^{きば}の人^{ひと}の車^{くるま}を取り、楯^{たて}を壁^{かべ}より外^はしたり。七 汝^{なんじ}の選^よりすぐりたる谷^{たに}々^{だに}には戰車^{せんしや}充^み満^みちん、騎兵^{きへ}等^{たち}は門^{もん}に座^ざを占^しむべし。八 ユダの覆^{おおい}は除^{のぞ}かれん、汝^{なんじ}その日^ひには、森^{もり}の家^{いえ}五)の武具^{ぶぐ}を見^みるべし。

第二十二章 1)「啓視の谷」

とはイエルサレム。イザヤが以下の啓視で同市将来の成行を見たのでそう称するのである。——2)近東諸国の家は街路に面する窓がないので、騒ぎや危険の懼れがある時には、様子を見に平たい屋根の上へ駆けあがるのである。——3)ヘブレオ語本「垣はくずれ、救いを呼ぶ声山々に聞こゆ」。即ち聖所の山を意味する。4)平生は楯を壁にかけておいた。エラム人はバビロニア軍の援隊。——5)「森の家」とは立派な宮殿で(王上七・二)、武器を蓄えておく

九 汝等はまた、ダヴィドの城市の破損を、その数多きを見ん。汝等は下の池の水を集め、一〇 イエルサレムの家々を数え、家を毀して石垣を堅固にし、二 二つの石垣の間に一つの貯水池を作りて、古き池の水を導き入れたり。されど汝等は之を造り給える者を仰ぎ見たることなく、遠き昔より之を設え給える者を顧みたることなきなり。一三 その日には主万軍の天主、泣き悲しみ、剃髪し、喪服を着ることを命じ給わん。一四 然るに見よ、汝等のなす所は却つて、飲ぶ楽しみ、犢を屠り、牡羊を絞殺し、肉を食し酒を飲むが如きことのみ。曰く「我等いざ飲食せん、そは明日にも死ぬべければなり。」と。一五 二時に万軍の主の御声わが耳に響けり、実にこの不義は汝等の死するまで赦されざるべし、と主万軍の天主云い給う。一六 主万軍の天主はかく云い給う、行け、汝入りて幕屋に住める者、聖殿の司ソブナの許に至り、⁸⁾ 之に云うべし、汝は此処にて何をなすや、また何の資格を以て此処に居るや。そは、汝己が為此処に墓を掘り、高き処にて心をこめて記念碑を彫り、己が為岩に住処

のに用いた(王上一〇・一七)。
 6) 王下二〇・二〇。
 代下三二・三〇。
 7) 智二・六。哥前一五・三二。
 8) 聖殿の司ソブナは、イエルサレムの有力人物。

一七 を設けたればなり。一七看よ、主は牡鶏の持ち去らるる如く、汝を持ち去
 一八 らしめ給わん、衣服の如く、汝を持ち上げ給わん。一八汝に患難の冠をか
 むらしめ、広く大なる地に汝を毬の如く投げ入れ給わん。汝の主の家の
 名折よ、汝は其処にて死すべく、汝の栄の車⁹⁾もまた其処にあるべし。
 一九 我は汝をその地位より逐い、その職より黜^{しりぞ}けん。二〇またその日にはか
 くならん、我ヘルキアの子にしてわが下僕なるエリアキム¹⁰⁾を召すこと
 二 あるべし。二 我は之に汝の衣服を着せ、之に汝の帯を堅く締めさせ、そ
 の手に汝の権力を与えん。かくて彼イエルサレムの住民と、ユダの家と
 三 に、父の如くなるべし。三 我なおダヴィドの家の鍵¹¹⁾をその肩に授け
 ん。彼開かんに、閉鎖す者なく、彼閉鎖さんに、開く者なからん。¹²⁾
 三三 我は堅固なる処に彼を杭の如く打ち込まん。¹³⁾さらば彼はその父の家
 二四 にとりて光栄の座となるべし。二四 人々は彼の上にその父の家のすべての
 栄をかけん、諸種の類の器具、あらゆる小さき器具、酒杯などの容器よ

9) かれの贅沢な戦車は、かれを捕虜とする人々に、奪い取られるであらう。
 10) エリアキムについて、本三六・三。三七・二。王下一八・一八を参照。
 11) 管理の象徴。
 12) 百一二・一四。
 13) 堅固な所に打ち込んだ幕屋の杭は、幕屋全体を支え保つ。

二五
り一切の樂器に至るまで、悉く然せん。五万軍の主は云
い給う、その日¹⁴⁾堅固なる処に打ち込まれてありし杭は
引き抜かれ、折られて落つべく、その上にかかれるもの
も失せ去るべし、是、主の語り給う所なり。

第二十三章

チロの破滅—その七十年後の復興

一 チロに対する重荷¹⁾。海の舟よ、泣き叫べ、そはその
常に出で来りし家、荒れ果てたればなり。是はケティム
より彼等に知らされたり。²⁾ 汝等島に住む者よ、³⁾ 黙せ
かし、シドンの商人等は海を渡りて、汝に満ちたり。
三 ナイルの種は大いなる水の上を運ばれ来り、河の収穫
物⁴⁾はその収益となれり。かくてそは諸国の民の市場と
なれり。四 シドンよ、赤面せよ、夫れ、海は、海の塞は、

14) 本章の結びたる本節は、再びソ
ブナの失脚を説く。他の説ではこ
れらの語を、やはり一時国を支配
したが、親戚に謀叛され倒された
エリアキムに関するものとする。

第二十三章 1) 本一三・一の註参
照。—2) チロから帰国した船乗た
ちは、その首都の滅亡についてケ
ティム(キプロス)の地の住民か
ら聞いた。—3) 旧い都市は依然大
陸に残っていたが、新しい町は海
岸からいくらか離れた島の上に移
された。—4) エジプトの穀物。

語りて云えり、我は孕みたることなく、産みたることなく、また若者を養いしこともなく、処女を育て上げしこともなし、と。五この事のエジプトに聞えん時は、人々チロのことを聞くに及びて、悲しむべし。六海を渡れ、泣き叫べ、汝等島に住む民よ。七是は昔よりその古きを誇りし汝等の城市にあらずや。その足は遠く之を異郷に運べり。ハチロは嘗て天下に冠たり、その商人は侯、その貿易者は地の貴人なりしに、之に対してかかる事を図りたるは誰ぞや。九一切の栄華の誇を挫き、地の栄誉ある者等を悉く恥辱に陥いれんとて、万軍の主こそかくは図らい給いしなれ。一〇海の娘よ、⁵⁾河の如く汝の地を通り過ぎよ。汝には最早帯あらざるなり。⁶⁾二主は海に向かいて御手を差伸べ、国々を動揺せしめ給えり。主は命じてカナアン⁷⁾をせめ、以てその強き者等を滅ぼさんとし給えり。三その曰えらく、凌辱を受けたる処女⁸⁾シドン⁹⁾の娘よ、汝は最早累ねて栄華を誇ることあらじ。起ちてケティムに渡れ、彼処にてもなお汝に安息なかるべし。一三カルデア人の国を見よ、往時にはか

5) ヘブレオ語本「タルシスの娘」。
6) 元の都市によつて制限されることがない。
7) フェニキア。
8) 征服されたことを、汚された乙女に譬えたもの。

一四 かる民あらざりき。アッシリア人之が基を定めたり。⁹⁾ 彼等はそ
の勇士等を捕虜として引き、その家を覆滅し、之を廢墟となせり。
一四 海の舟よ、泣き叫べ、そは汝等の塞、荒れ果てたればなり。

一五 その日にはかくなるべし、ああチロよ、一人の王の日数程なる
七十年の間、汝忘れらるるに至らん。¹⁰⁾ されど七十年の後、チロ
には娼婦の歌の如くなるべし。^{一六} 小琴を取れ、城市をめぐれ、忘
れられたる娼婦よ、巧みに唱え、多くの歌を唱え、これ汝の思い
出されんためなり。^{一七} さて七十年の後、主チロを顧み、再び之に
所得を与え給うべし。かくてチロは復もや地の面にある世のすべ
ての国々と盛んに交際せん。^{一八} その商売とその所得とは主への
聖なるものとなり、蓄えらるることなく、積まるることなかるべ
し。その商売は主の御前に住む人々の有となり、彼等之によりて
飽くまで食い、老いるまで衣るべければなり。¹¹⁾

⁹⁾ 一層不面目なことに
は、チロは有名なアツ
シリアにではなく、も
と遊牧の民であつたカ
ルデア人に負けるであ
ろう。¹⁰⁾ カルデアの
支配する期間。¹¹⁾ チ
ロは商売の儲けを、主
を崇めるしるしとして
司祭たちに手渡すであ
ろう。イザヤは異教を
奉ずるチロが、真の神
の信仰に帰依するだろ
うと言っているのでは
ある。

第二十四章

世のすべての罪人に下る天罰―選ばれたる者は喜びて主を讃美せん

一 視よ、¹⁾ 主は地を荒廃せしめて裸となし、その面を打ちてそこに住む
民を散らし給わん。²⁾ 三 地は荒れに荒れて、ことごとく掠め去られん。実にこの言は
者も買う者と、借る者も貸す者と、負債ある者も催促する者と、同じか
るべし。³⁾ 四 地は泣き悲しみて衰え弱れり。世は衰え、地の民
主の宣える所なり。⁴⁾ 五 地はその民に汚染されたり。そは彼等掟に背き、法
の貴きも弱れり。⁵⁾ 六 この故に呪咀は地を呑み、
を交え、永久の契約⁶⁾を破りたればなり。⁷⁾ 七 収穫の葡萄は泣き悲しみ、葡萄
その住民等は罪に耽らん。またそれに由りて之を耕す者は狂うに至らん。
かくて遺るべきはただ少数の人のみ。⁸⁾ 八 鼓の喜悅はやみ、樂しめ
樹は弱り、心樂しかりし人々も皆嘆息せり。⁹⁾ 九 人々は最早歌いつ
る者の声音も静まり、小琴の妙なる音も黙したり。

第二十四章

1) 本章ではイザヤの先見が更に
広くなつて、個
々の天罰から総
体の天罰に及ん
でいる。―2) 何
四・九。―3) シ
ナイ山の特殊な
契約ではなく、
天主が創造によ
るすべての人と
永久に結び給う
た契約。

一〇 つ葡萄酒を飲むことなからん。飲料は之を飲む者に苦かるべし。一〇虚栄の
 都市⁴⁾は破壊されたり、家はみな閉鎖されて、入る者なし。二巷には葡萄
 酒を求むる叫声あらん。楽しみは悉く失せ、地の喜びは過ぎ去りたり。
 一三 邑には荒墟残れり、災厄その門を圧倒すべし。⁵⁾ 一三夫れ、地の中、民の
 なかにて、かくの如くならん、即ち僅かに残れる橄欖の果の、橄欖の樹よ
 一四 り揺り落さるるが如く、また收穫の終りし時の葡萄の如くならん。一四是等
 の者⁶⁾は声をあげて讃むべし、主の御光栄を頌し給う時、海より⁷⁾ 飲び叫
 一五 ぶべし。一五この故に汝等御啓視に対して⁸⁾ 主を、海の島々にて⁹⁾ 主イスラ
 一六 エルの天主の御名を、頌栄やせかし。一六我等は地の果より、讚美を、義し
 一七 き者¹⁰⁾の光栄を聞けり。時に我云えらく、我この胸一つに秘めおかん、我
 この胸一つに秘めおかん。我は禍なるかな。邪曲をなす者等は邪曲をなせ
 一七 り。掟を破る者の邪曲もて邪曲をなせり。一七地の住民たる者よ、恐怖と陷
 一八 穽と係蹄と汝に臨めり。一八しかしてかくなるべし、即ち恐怖の声を遁るる

4) 滅び去る運命の都市。
 5) ヘブレオ語本「門は打ち砕かれて、破片の山となれり」。
 6) 選まれた人々。
 7) どんな遠隔の地からでも
 8) ヘブレオ語本「東にて」。
 9) 即ち「西にて」。
 10) 天主

者^{もの}は陷^お穽^なに陷^{おち}り、陷^お穽^なを脱^ぬ出^ける者^{もの}は係^わ蹄^なにかか^かるに至^{いた}らん。11) そ
 は高^{たか}き処^{ところ}の水^{すい}門^{もん}既^{すで}に開^{ひら}け、地^ちの基^{もと}動^{どう}揺^{よう}すべ^べけれ^なり。12) 地^ちは
 裂^さけに裂^さけん、地^ちは碎^{くだ}けに碎^{くだ}けん、地^ちは揺^{ゆる}ぎに揺^{ゆる}がん、二〇 地^ちは醉^よ
 える者^{もの}の如^{ごと}くよ^よろめ^めきによ^よろめ^めきて、幕^{まく}屋^やは一^よ夜^やのそ^それ^れの如^{ごと}く取^{とり}
 除^のけら^らるべ^べし。そ^その不^ふ義^ぎ之^{これ}が上^うに重^{おも}くか^かかるによ^よりて、そ^そは潰^{つぶ}え
 倒^{たお}れ、累^{かさ}ねて起^たつこ^ことな^なから^らん。二 しか^してか^かく^くなるべ^べし、そ^その
 日^ひには主^{しゅ}、高^{たか}き処^{ところ}にては天^{てん}軍^{ぐん}13) を、地^ち上^{じやう}にては地^ちの諸^{しよ}王^{わう}を糺^{ただ}し給^{たま}
 うこ^ことあ^あるべ^べし。三 彼^{かれ}等^らは一^{ひと}束^{たば}に束^{つか}ねて穴^{あな}に入^いれら^らる^る如^{ごと}く集^{あつ}め
 られ、彼^{かれ}処^こなる牢^{いと}獄^やに閉^と込^こめられ、日^ひを^へ経^へること久^{ひさ}しう^うして御^ご来^{らい}
 臨^{りん}を仰^{おほ}がん。三 さて万^{ばん}軍^{ぐん}の主^{しゅ}がシオ^しン^んの山^{やま}14)、イエルサ^いレ^るム^むにあ
 りて統^{しる}治^{しめ}し、そ^その長^{ちやう}老^{らう}等^らの眼^め前^{まえ}にて15) 御^み光^{さか}榮^えを顯^{あら}わ^わし給^{たま}はん時^{とき}は、
 月^{つき}も面^{おもて}を赧^{あか}ら^らめ、日^ひも恥^はじ入^いるべ^べし。

11) この喩には獵人が獸
 を取る種々の方法が用
 いてある。——12) 耶四八
 ・四四。——13) 天軍とは
 異教徒が神々として崇
 める諸星。——14) 天国。
 15) 選ばれた人々が全部
 集まつてゐる前で。默
 四・四参照。

第二十五章

救われた者の感謝の歌

一 主よ、汝はわが天主なり。我汝を崇め汝の御名を讃え奉らん。そは汝、
奇しき事、往古の¹⁾ 変らぬ²⁾ 御計画を成し給いたればなり。アーメン。
二 それ、汝は城市³⁾ を石の堆と、堅固なる邑を廢墟と、他国人⁴⁾ の家と
なして、またその城市となることなく、永久に再建せらるることなから
しめ給えり。三 この故に強き民は汝を讃え、力ある国人の城市は汝を畏
れ奉らん。四 そは汝、貧しき者の力、乏しき者の患難の時の力、旋風を
避くる遁れ場、炎暑を凌ぐ涼蔭となり給いたればなり。実に権勢ある者
の忿怒は、壁を打つ旋風の如し。五 汝は旱魃の炎熱と等しく、他国人⁵⁾
の喧騒を抑え、蒸すばかりなる雲の下⁶⁾ の暑さもてするが如く、権力ある
者の若枝を枯らし給うべし。六 万軍の主この山⁶⁾ においてすべての民に
肥えたるものの饗応を、葡萄酒、隨に満ちし肥えたるもの、滓渣なき葡

第二十五章 1) 永
遠の。——2) 御心
の変らぬ天主が
実行し給うた。
3) 世の終りの審
判の時の、天主
に逆らう人々の
都。——4) 信仰や
行為で、天主の
御国に属せぬ者
5) 二節の註四と
同様。——6) 本二
四・二三参照。

七	葡萄酒の饗応をなし給わん。またこの山において、すべての民に繋
八	けられたりし絆 ⁷⁾ の面と、諸々の国人の上に張りめぐらし給える網
八	とを、断ち切り給うべし。八彼は永久に死を滅し去り給わん。しか
九	して主なる天主何れの面よりも涙を拭い取り、御民の恥辱を全地よ
九	り雪ぎ給うべし。是主の宣える所なり。九かくてその日には人々云
一〇	わん、視よ、是こそは我等の天主なれ。我等之を待望みたれば、彼
一〇	我等を救い給わん。是こそは主なれ。我等之を待ち焦れたれば、そ
一〇	の救拯を喜び樂しまん、と。一〇そは主の御手この山に休らい、モア
二	ブ ⁸⁾ 恰も藁が車 ⁹⁾ に轢き潰さるる如く、彼の下に蹂躪らるべければ
二	なり。二彼はその下にて己が手を、さながら游泳者の泳がんとて差
二	伸ぶる如くに差伸べん。されど主は御手もて打ちてその誇りを挫き
二	給うべし。二三汝 ¹⁰⁾ の高き石垣ある砦は落ち、崩され、地に倒されて
二	塵に塗れん。

7) 絆と網とは、諸国人を襲う恐怖と悲しみとを譬えたもの。
 8) モアブはイスラエルに烈しい敵意を持つていたので、天主に敵対するすべての国の代表者。――9) 打穀車。――10) モアブに対するイザヤの呼びかけ。

第二十六章

救われたる者の感謝の歌

一 その日にはユダ¹⁾の地にてこの歌唱^{うたうた}わるべし。シオンは我等^{われら}の力^{ちから}とする邑^{まち}、救主^{すくいぬし}ここに置^おかれて、石垣^{いしがき}となり外牆^{そとがき}となり給^{たま}わん。二 汝等^{なんじら}門^{もん}を開^{ひら}きて、真理^{しんり}を守る義^{ただ}しき国民^{くにたみ}を入^いらしめよかし。三 旧^{ふる}き誤謬^{あやまり}²⁾は過去^{すきさ}りたり。汝^{なんじ}は平安^{へいあん}を、我等^{われら}汝^{なんじ}に依頼^{よりたの}めるに由^よりて平安^{へいあん}を、保^{たも}ち給^{たま}わん。四 汝等^{なんじら}は世々^{よよ}終^{おわり}なく主^{しゅ}に、恒久^{とこしなえ}に強^{つよ}き天主^{てんしゅ}なる主^{しゅ}に、依頼^{よりたの}みたり。五 そは彼高^{かれたか}きに住^すむ者を屈^{かが}ましめ、聳^{そび}え立つ城市^{まち}³⁾を打伏^{うちふ}せ、之^{これ}を地^ちに打伏^{うちふ}せ倒^{たお}し、塵^{ちり}に塗^{まみ}れしめ給^{たま}うべければなり。六 そは足^{あし}の、貧^{まさ}しき者の足^{あし}乏^{とぼ}しき者の歩^{あゆ}みの、踏^ふむ所^{ところ}とならん。七 直^{なお}き者の径^{こみち}は義^{ただ}し、義^{ただ}しき者の歩^{あゆ}むべき細路^{ほそみち}は直^{なお}し。八 主^{しゅ}よ、我等^{われら}は汝^{なんじ}の御審判^{おんさばき}の道^{みち}に立^たちて、汝^{なんじ}を待ち侘^わびたり。汝^{なんじ}の御名^{おみな}と汝^{なんじ}の記念^{おもいで}とは、靈魂^{たましい}の憬^{あこが}れ慕^{した}う所^{ところ}⁹⁾。九 わが靈魂^{たましい}は夜^{よる}⁴⁾に汝^{なんじ}を憬^{あこが}れ慕^{した}えり、然^{しか}のみならず朝^{あさ}まだき

第二十六章 1) 本

二五・一二のモア

ブが天主に敵対す

る諸国の代表であ

るように、このユ

ダは天主の御国の

代表。――2) 世間の

力を頼みとする迷

妄。――3) 天主に逆

らう国の首都。

4) 夜には意識せず

に、昼には意識し

て、しかもその初

めから。

一〇 より亦、我目覚めてわが胸の内なる靈に汝を仰がん。汝地にて御審判を行い給わん時には、世界に住む民正義を学び知るべし。一。我等不敬なる者を憐ま
 二 ンも、彼正義を学ばざるべし。彼は聖者等の地にて不義を行いたれば、主の御栄光を見ることなからん。二主よ、願わくは、汝の御手挙げがれども彼等の
 三 之を見ざらんことを。御民を妬む者はこれを見れば怖じ惑い、火汝の敵を焼
 三 尽せかし。三主よ、汝我等に平安を賜わん。蓋し我等に対する出来事はすべ
 二三 て汝が我等の爲になし給えるなり。三主よ我等の天主よ。汝にあらざる他の
 一四 主等も曾て我等を支配したることあり、されど我等はただ汝によりて汝の御
 一五 名を心に留めんのみ。一四死者は生きざるべし、巨人等⁶⁾は蘇らざるべし。こ
 一六 の故に汝彼等を訪れ滅ぼし、その記念をさえ全く消し去り給えり。一五主よ、
 一七 汝はこの国民を恵み給えり、この国民を恵み給えり。汝は崇められ給えるに
 一六 あらずや。汝は地の境界を悉く遠ざけ給えり。一六主よ、彼等は困窮の時に汝
 一七 を探ね求めたり。呻吟する患難の時に汝の御教を得たり。一七主よ、我等は汝

5) ヘブレ
 オ語本
 「なんじ
 の御手高
 く挙げが
 れども、か
 れら顧み
 ず」。
 6) 今は冥
 府で影の
 ように生
 きている
 もと勢力
 のあつた
 人々。

の御面前に、^あたかも^はらめる女の産期に近づきて、陣痛に苦しみ叫ぶが如くなりき。一八我等は孕みて陣痛にあいしが如くなりしかど、生みたるは風のみ。我等は地にて益ある事をなさざりしなり。是に由りて地に住む者⁷⁾倒れざりき。一九汝の死者⁸⁾は生き、わが殺されたる者は蘇らん。汝等塵の中に住める者よ、目覚めて讚め頌えかし、汝の露は光の露⁹⁾にして、巨人等の国は汝之を滅亡に陥いるべければなり。二〇わが民よ、行きて汝の房に入り、汝のうしろの戸を鎖して¹⁰⁾身を隠し、憤怒の過ぎ去るまで稍少時の間潜みおれ。二一見よ、主蓋しその処を出でて、地に住む民の彼に対する不義を罰し給わん。地はその血汐を露出し、最早その殺されたる者を覆い隠すことあらざるべし。¹²⁾

7) カナアン人。——8) 汝に仕えて死んだ人々。
9) 露は爽かで枯草をも蘇らす。天主も同様死者に生命を与え給う。——10) マテオ六・六参照。——11) 苦しみはすべて一時的で、忍耐していれば克服できるといふ慰めになる思想
12) かれらに加えられた非道の埋合せに。創四・一〇など、黙六・九など、参照。これはまず、世の終りの審判に先立ち死者が復活する時に起る。

第二十七章

天主の民を虐ぐる者に下る天罰

一 その日には、主堅く大にして強き御劍もて、かの強き蛇なる巨蛇、曲れる蛇なる巨蛇を懲らし、海に居る怪物¹⁾を殺し給わん。二 その日には澄める葡萄酒の葡萄酒の為に歌あるべし。三 我は之を守る主なり。我時ならず之に灌がん。その害あるることなからん為に、我は夜も昼も之を守る。四 我には憤怒あらず。誰か我を戦闘の時に茨薊となすべけんや。我豈進みて之をせめんや、之を悉く焼き尽さんや。五 寧ろそはわが力に縋り、我と和睦するに至らんか。我と和睦するに至らんか。六 何者ヤコブに攻めかかるとも、イスラエルは花さき芽ぐむべし。彼等は其の種もて世界の面を満たさん。七 主は彼を打ちし者を打ち給いし如く彼を打ち給えりや。或は彼、主が彼を殺しし者を殺

第二十七章 1) これらの動物は天主に敵対する三國の喩である。強き蛇である巨蛇は、チグリス河の貫流するアツシリアを譬えたもの。バビロニアは国の中をエウフラト河が幾度も曲りくねつて流れているので、曲れる蛇の巨蛇で表わしてある。また海中の怪物はエジプトをさす。――2) これは諸国民の祝福となるべきイスラエルの使命をさす。

八 し給いし如く、殺されたりや。³⁾ハその棄てらるべき時には、汝量に相当する量を以て之を裁き給うべし。主御義怒の日には御心を酷くして計画をめぐらし給わん。⁹⁾されば是によりてヤコブの家の不義は赦さるべし。即ちその結果は、⁴⁾これが祭壇の石を悉く碎けて灰となりし石の如くになし、神木も社も最早立ちてあらざらん時、その罪の除かるべきこと、是のみ。¹⁰⁾蓋し堅固なる城市は荒れ果て、美しきは棄て去られて荒野の如くにならん。犢其処にて草を喰み、其処に臥し、その高き処を喰い荒すべし。¹¹⁾その收穫物は枯れて蹂躪られ、女等来りて之に教えん。⁵⁾そは賢き民にあらざればなり。この故に之を造りし者は憐み給わず、之を形作りし者は容赦し給わざるべし。¹²⁾しかしてかくなるべし。その日には、主かの流の河床よりエジプトの小川に至るまでを打ち給うことあらん。⁶⁾かくてイスラエルの子等よ、汝等一人一人集めらるるに至るべし。¹³⁾またかくなるべし、その日には大なる

3) 天主は選民を懲らし給うが(本五・二五参照)絶滅するほどではない
4) 終局の目的。
5) 嘆きの歌を歌つたり教えたりするために雇われる泣き女と解すべきである。¹⁾打つとは收穫物の穂を打ち落とすことで、善人を悪人から分けることの喩。

る喇叭ラッパを吹鳴ふきならさるることあらん。しかして流離さすらいたる者等ものどもアツ
シリア人びとの地ちより来きたり、またエジプトの地ちに追おい払はらわれたる者等ものども
も来きたりて、イエルサレムにある聖せいなる山やまにて主しゅを拝はいすべし。

第二十八章

イスラエル人が蒙る天罰とその目的

一 禍わざわいなるかな、驕慢きやうまんの冠かんむり、エフライムの酩酊者等めいていしやら、肥えたる
谷たにの頂いただきにありて、葡萄酒ぶどうしゆによるめける者の歡喜よろこびの榮さかえなる、や
がて凋しほむ花はな。二 見みよ、主しゅは力ちからありて強つよく、雹ひようの暴風あらしの如ごとく、破壊やぶ
す旋風つむじかぜの如ごとく、溢あふれて広ひろき地ちに押寄おしよする大水おほみづの勢いきおい激いげしきが如ごとく。
三 エフライムの酩酊者等めいていしやらの驕慢きやうまんの冠かんむりは足あしもて蹂躪ふみにじらるべし。
四 また肥えたる谷たにの頂上いただきにある者の歡喜よろこびの榮さかえなる、やがて凋しほみゆ
く花はなは、秋熟あきじゆくするに先立さきだちて早はやく生なりたる実みの如ごとくならん。人見ひとみ
て之これを認みとむる時ときは、手てに取とるや否貪いなむさばり食くうなり。2) 五 その日ひには万ばん

7) 本二四・二三の如く
イスラエル人の集合の
場所。

第二十八章 1) サマリ
アは、直径八キロ以上
の摺鉢形の谷から聳え
立つ高さ三百四十メー
トルの丘の上にある。
この谷は非常に肥えて
いて、葡萄畑が沢山あ
る。1) 特に人のほし
がる早なりの無花果は
六月の末に熟する。

軍の主、御民の遺れる者の為に、^六 米の冠となり、^七 歡喜の花飾となり給わ
 ん。^八 しかして審判の座に就く者には審判の靈となり、^九 戦争より門に歸り
 来る者には力となり給うべし。^{一〇} ^{一一} されど是等の者も亦、葡萄酒によりて知
 覚を失い、^{一二} 酩酊してよろめきたり。^{一三} 司祭も預言者も酔い痴れ、酒に吞まれ、
 酩酊してよろめき、^{一四} 洞見する者に心附かず、正義を知らざりき。^{一五} ^{一六} 実に食
 卓はみな、^{一七} 嘔吐と汚穢とに満たされて、^{一八} 最早余地すらあらずなれり。^{一九} ^{二〇} 彼
 は誰に知識を教えんとするか。^{二一} 誰にその聞ける所を曉らしめんとするか。
 乳離れしたる者等、^{二二} 乳房より引離されたる者等に対してか。^{二三} ^{二四} それ、諭し
 て再諭せ、^{二五} 諭して再諭せ、^{二六} 待ちて更に待て、^{二七} 待ちて更に待て、^{二八} 此処にて少
 しく、^{二九} 彼処にて少しくせよ。^{三〇} ^{三一} 蓋し主は御唇の御言と異なる言語とを以
 て、^{三二} この民に語り給わん。^{三三} ^{三四} 二 ^{三五} その之に曰いけるは、^{三六} 是わが安息なり。^{三七} 疲
 れたる者を回復せしめよ、^{三八} 是わが回復なり、と。^{三九} ^{四〇} されど彼等は聴かんとも
 せざりき。^{四一} ^{四二} されば彼等に主の御言あらん、^{四三} 諭して再諭せ、^{四四} 諭して再諭せ、

3) 五、六、兩節の成就是、アツシリアの圧迫を堂々と脱れたこと。
 しかしこれはただ、メシアの王国で完成することの前提に過ぎない
 4) 民とはセンナケリブ治下のアツシリア国民。一 哥前一四・二一。

一四 待ちて更に待て、待ちて更に待て、此処にて少しく、彼処にて少しくせよ。さらば彼等行きて後方に倒れ、砕かれ、毘にかかりて捕わるべし。⁵⁾ 一四この故に主の御言を聴け、汝等嘲る人々、イエルサレムにあるわが民を治むる者等よ。一五夫れ汝等は云えり、我等は死と盟約を交し、冥府と契約を結びたり。⁶⁾ 溢るる災禍過ぎゆかん時も、我等を襲うことなからん、そは我等虚偽⁷⁾に己が希望を置き、虚偽に護られたればなり、と。一六この故に主なる天主かく曰う、見よ、我シオンの基に一つの石を置かん、そは試験に耐えたる石貴き隅石⁸⁾にして、基の基たるものなり。信ずる者は慌つべからず。⁹⁾ 一七我は義を分銅となし、正を尺度となさん。かくて虚偽の希望は雹の倒す所となり、その保護は水の押し流す所となるべし。一八また汝等の死との盟約は破れ、汝等の冥府との契約は

5) 不平を鳴らした罰として
 6) あらゆる禍不幸に全く安全であることを表わす。かれらはエジプトと盟約を結んでいたので、アツシリアを防いで貰えると思つていた。――⁷⁾ある人々はこれがかれらの頼みにしている神々の偶像と解している。
 8) 隅石とはメシアによつて完成せらるべき救霊のための天主の御摂理。(マテオ二一・四二。羅九・三三。弗二・二〇―二二。彼前二・四―八)。――⁹⁾敵を避けて逃げる必要はない。

続かざらん。溢るる災禍過ぎ行かん時、汝等之に蹂躪らるべし。

一九 すべてその過ぎ行かん時は、汝等を運び去らん、実にそは朝未明にも、昼にも夜にも¹⁰⁾過ぎ行くべし。汝等をして己が聴く所を曉らしむべきはただ悩みのみ。二〇 それ、然る時は臥床狭まりて、一人は落つべく、袈短かくして兩人を蔽うに足らざるべし¹¹⁾ 三 実に主は敗れの山¹²⁾におけるが如く起ち、ガバオンにある谷¹³⁾におけるが如く怒り、かくてその御業をなし給わん、奇しき御業なり、その御業を行い給わん、その御業は人にとりて驚くべし。二三 されば今、嘲ることなかれ、然らずば汝等の繩目緊くならん。実に我は地にあまねく行わるべき殲滅、斬り払いの事を、主万軍の天主より聞きたるなり。二四 汝等耳を聳ててわが声を聴け、注意してわが言を聴け。二五 種を播かんとて耕す者、豈終日耕すのみならんや。その地を掘り返して馬鋤もて掻き均すのみならんや。三五 その面を平坦にしたる時は、

10) 絶えず筈の下に喘ぐであろう。——11) エデア人たちが「どうにも仕方がない」と思うことを表わすために広く使われた諺
12) ヘブレオ語「バルフェラジム」で、フイリスト人が天主の御助けを得たダヴィドに打ち負かされた(敗れた)所。母下五・二(参照)。
13) 太陽の奇跡はガバオン附近で起こつた(書一〇・一一)。

二六 蒔羅を播き、^{ひめういきよう} 姫茴香の種を散らし、^{こむぎ} 小麦や^{おおむぎ} 大麦や^{きび} 黍を列べ植え、またその
 二七 端に^{はし} 矢筈^{やはせんどう} 豌豆を植えざらんや。^{しゅかれ} 主彼に分別を授け給わん、その^{てんしゅ} 天主
 二八 彼に教え給わん。^そ 失れ、蒔羅は脱穀機もてひくべからず、^{ひめういきよう} 姫茴香は棒もて
 二九 穀車の輪廻りて之が上を過るべからず。蒔羅は杖もて、^{ひめういきよう} 姫茴香は棒もて
 打つべし。^{こむぎ} 小麦¹⁴⁾ は細かに碎くべし。但し麦打する者いつまで
 も之を打つべからず。また脱穀車の輪之を害うべからず、^{ひめういきよう} 蹄之を碎くべ
 からず。^{しゅばんぐん} 是もまた主万軍の天主より、^{おんはかりごと} 御計画を驚くべきものとなし、
 正義を^{はつよう} 発揚せん為に、^い 出でたるなり。¹⁵⁾

第二十九章

イエルサレムが頑冥に由りて蒙る重き天罰

一 禍なるかな、^{ありエルよ} アリエルよ、^{ダヴィド} ダヴィドが^{おとし} 陥いれたる^{まち} 城市アリエルよ。
 二 年は年に加わり、^{もろもろ} 諸々の祝祭は廻り来りて過ぎ去れり。^{われ} 我はアリエル
 に^{ぼうへき} 防壁を繞らさん。そは^{かな} 悲しみ^{なげ} 嘆きて、わが^{ため} 為にアリエルの^{ごと} 如くなるべ

14) 原語 panis
「パン」。—15) 農

夫が働く時のよ
うに、天主も目
的に従つて事を
運び給う。御懲
らしめもただ御
民を善くしよう
との思召から。

第二十九章 1) ア
リエルとは、^ル 炉
の義。イエルサ
レムがそう称せ

三 し。2) 三 時に我汝の周囲に円えんの如ごとく陣じんを繞めぐらし、汝なんじに對たいして堤つみを築きき、
 汝なんじを圍かこみ攻せむるに壘とりでを設もうげん。四 汝なんじは打うち伏ふせられて、地ちより語かたるべし。
 汝なんじの言ことばは土つちの中なかより聞きこえ、汝なんじの聲こえは巫女みこの如ごとく地ちより出いで、汝なんじの言ことばは
 土つちの中なかより叫ささやかん。五 汝なんじを風靡ふうびせる者ものの群むれは細こまかき塵ちりの如ごとく、汝なんじに對たい
 して暴力ぼうりよくを揮ふるいたる者ものの群むれは飛散とびちる灰はいの如ごとくなるべし。六 しかも思おもわ
 ざる間ひまに俄にわかにかくならん。万軍ばんぐんの主しゅより、雷いかづち、地震じしん、旋風つむじかぜと疾風はやてとの
 大おおなる音おと、及び焼やき尽つくす火ひの焰ほのおもて罰ばつせらるべし。七 またアリエルと
 戦たたかいたる諸国しよこくの民たみの群むれと、すべて之これを敵てきとして軍いくさをなし、圍かこみ攻せめ、
 暴力ぼうりよくを揮ふるいたる者もの等どもとは、夜よるに見みる夢ゆめの如ごとくならん。八 飢うえたる者もの、
 夢ゆめに食しょくするも、醒さむる時ときはその心空こころむなしく、また渴かわける者もの夢ゆめに飲のむも、
 醒さめての後のちはなお渴かわき疲つかれしままにて、その心空こころむなしきが、シオンの山やま
 に敵はむかい戦たたかいたるすべての国民くんにたみもまたかくの如ごとくなるべし。九 驚おどろき呆あきれ
 よ。揺ゆめきよろぼえ。酔よえよ、されど葡萄酒ぶどうしゆに由よらずして。よろめけ、

られるのは、そこに燔祭壇があつたから。他の説では獅子の義であると
 いう。これは、イ
 エルサレムを首都
 とするユダの象徴
 が獅子であるから
 2) どれほど危険に
 瀕しても、イエ
 サレムはいつまで
 も天主の中心アリ
 エルとして残り、
 主はこれの滅びる
 ことをお許しにな
 らぬであらう。

一〇 されど酔よに由よらずして。一。そは主しゅ汝等なんじらに熟睡じゆくすいの靈れいを注そぎ入いれ、汝等なんじらの眼めを
 閉とじ、御啓視みしらせを見る汝等なんじらの預言者よげんしゃ諸侯しよかうの面おもてを覆おほい給たまうべければなり。³⁾
 二 二されば一切さいの御啓視みしらせは汝等なんじらにとりて封ふうぜられたる書ふみの如ごとくなり、人々文
 字じを知しれる者ものに之これを渡わたして、之これを読よめ、と云いわんに、我能われあたわず、盖そは封ふうぜ
 二 られたれば、と答こたえん。三 又文字もじを知らぬ者ものに書ふみを渡わたして、読よめ、と云
 一三 わんに、我文字われもじを知らず、と答こたえん。一三 主曰しゅのたまいけるは、この民たみはその口くちも
 一四 て近ちかづき、その唇くちびるもて我われを崇あがむれども、その心こころは我われを離はなれ、人ひとの誠命いまめと教おし
 訓えとによりて我われを畏おそるのみなれば、一四 故ゆえに見みよ、我累われかさねてこの民たみを大おほい
 して驚おどろくべき奇蹟ふしぎに呆あきれしめん。実けに智慧ちえはその智ち者しゃより失うせ、洞察力さとりは
 一五 その聰明者さときものに秘ひめらるべし。⁴⁾ 一五 禍わざわいなるかな、汝等心なんじらこころを深ふかく秘ひめて、己おのが
 策謀はかりごとを主しゅに隠かくさんとする者もの。かかる者ものの業わざは暗黒くらやみの中うちにあり、彼等かれらは云
 一六 う、誰たれか我等われらを見る、誰たれか我等われらを知る、と。一六 汝等なんじらのこの思念おもひは邪曲よこしまなり。
 怡あだかも粘土ねぼつちが陶器師やきものしを悪あしく思おもひ、造つくられたるものが之これを造つくりし者ものに、汝我なんじわれ

3) 彼らがあま
 りに罪を犯し
 たので、天主
 は彼らの心を
 予言者達の勧
 めに感じぬよ
 うにし給うた
 4) 哥前一・一
 九。阿八。
 5) エジプトと
 の秘密協定を
 さすのである
 う。

一七 を造りしにあらず、と云い、形造られたるものが之を形造りし者に、汝に
 悟りなし、と云いたらんが如し。 一七 今少時にして、短き期を経なば、リ
 一八 バノンは変じて美田となり、美田は森と見做されざらんや。 一八 その日に
 一九 は聾者この書の言を聞き、盲者暗く隴なる中より見るに至るべし。 一九 柔和
 なる者は主によりて益々楽しみを加え、貧しき人々はイスラエルの聖なる
 二〇 者によりて喜び躍らん。 二〇 そは力優れる者は失せ、嘲る者は尽き、不義
 二一 の為に夜を明かしし者は皆断たるべければなり。 二一 人々をして言の罪を犯
 二二 さしめ、門にて訴うる者を陥いれ、空しく義を離れたる者も亦然り。 二二 こ
 の故にアブラハムを贖い給いし主はヤコブの家にかく曰う、ヤコブは今や
 二三 滅ぶることなく、その顔今や赧むことなからん。 二三 却つて彼わが手の作な
 るその子等がその中にてわが名を聖とするを見ん時は、彼等ヤコブの聖な
 二四 る者を聖となし、イスラエルの天主を誉め称うべし。 二四 しかして心迷える
 者は了悟を知り、呟ける者は律法を学ぶに至らん。

6) 全く変ること
 とを言いあら
 わす諺のよう
 なもの。
 7) 本五・一九
 など参照。
 8) 今でもまだ
 予言者の警告
 に背く人々。

第三十章

民、エジプトを頼めるに由りて咎めらる

一 禍^{わざわい}なるかな、不忠^{ふちゆう}なる¹⁾子等^{こら}、と主^{しゅ}云^い給^{たま}う、汝等^{なんじら}は計^{はかり}画^{こと}を行^{おこな}わんとして我^{われ}に依^よらず、企^{たくら}図^みを始^はめんとしてわが精^{せい}神^{しん}によらず、かくては益^{ます}々^{ます}罪^{つみ}に罪^{つみ}を加^{くわ}うべし。^二汝等^{なんじら}は歩^{あゆ}みてエジプトに下^{くだ}り行^ゆけども、わが口^{くち}²⁾には問^とうことをせざりき。即^{すなわ}ちフアラオの力^{ちから}添^そえを望^{のぞ}み、エジプトの蔭^{かげ}を頼^{たの}めるなり。^三されど汝等^{なんじら}にとりてフアラオの力^{ちから}は恥^は辱^じとなり、エジプトの蔭^{かげ}を頼^{たの}むは名^な折^{おれ}とならん。^四夫^それ、汝^{なんじ}の諸^{しよ}侯^{こう}はタニス³⁾にあり、汝^{なんじ}の使^し者^{しや}等^{たち}はハネス⁴⁾にまで至^{いた}れり。^五彼等^{かれら}は皆^{みな}已^{おのれ}を益^{えき}する能^{あた}わざる民^{たみ}ゆえに恥^は辱^じを得^えたり。その民^{たみ}は助^{たす}けにならず、何^{なん}の益^{えき}にもならず、ただ恥^は辱^じとなり、侮^{あなど}辱^どの因^{もと}となりしのみ。^六南^{みなみ}の畜^{けもの}獸⁵⁾に對^{たい}する重^{おも}荷^に。牝^め獅^じ子^し、牡^お獅^じ子^し、蝮^{まむし}及^{およ}び

第三十章 1) 下記の計画とは、異教徒と結ぶことを禁じ給うた天主に対する反逆 2) 予言者は「天主の御口」のようなもの。 3) ナイル河口附近にある大都市。 4) 中部エジプト、ナイル河中の島にあり、ギリシヤ人はヘラクレオポリスと称していた。 5) 隊商。一説ではこの語をば、エジプトを象徴する河馬を意味する単数のベヘモトと解する。百四〇・一五参照。

七 飛ぶ蛇の出る艱難と恐怖との地に入りて、人々はその財貨を駄獣の肩に載せ、
 その宝物を駱駝の瘤にかけて、己を益する能わざる民の許に搬ぶ。蓋しエジ
 プト助くとも空しく徒勞なるべし。故に我之に就きて叫び云えらく、そはただ
 八 傲慢のみ、黙し居れ、と。ハされば今、入りて彼等の為に黄楊板の上に書き、
 九 注意して書に記し、後日の為にそを永久の証となすべし。実に是は義怒を招
 一〇 く民、偽る子等、天主の律法を聴くを欲まざる子等なり。一〇 彼等を見る者に云
 う、見るなかれ、と。また視守る者に云う、我等の為に直き事を観るなかれ、
 二 我等に快き事を語れ、我等の為に誤謬を觀よ。二 我より道を取去り、我より徑
 二 二 を離せ。イスラエルの聖なる者は我等の面前より失せよかし、と。三 この故に
 三 三 イスラエルの聖なる者はかく云い給う、汝等この言を斥け、奸計と騒乱とを頼
 三 三 みて、之に依りたれば、三 この不義は汝等に取りて、高き石垣の壞れて崩るる
 四 四 を免かれざる所の如くならん。その崩壊は思わざる間に、俄に来るべし。四 そ
 四 四 の碎かるるは陶器師の甕が烈しく打碎かれ、その破片の中に、炉より火を移し

6) ヘブ
 レオ語
 本「坐
 し居
 る」。
 すなわ
 ち助け
 るべき
 時にも
 なにも
 しない

一五 て運び、井戸より水を汲むべき程の一片すら見当らざる如くならん。一五
 れ主なる天主、イスラエルの聖なる者はかく云い給う、汝等もし立歸りて
 静かにせば救われん。沈黙と希望とを汝等の力とすべし⁷⁾と。然るに汝
 等は之を欲まずして、一六云えらく、否、却つて我等馬の許に逃げ去らん、⁸⁾
 と。故に汝等逃げ去らん。また我等速きに乘らん、と。故に汝等を追う者
 は更に速かるべし。一七一人を恐れて千人逃げ去り、五人を恐れて汝等逃げ
 去り、終には汝等の遺る者、恰も山の頂にある船の檣の如く、また丘の上
 にある旗印の如くなるに至らん。一八この故に⁹⁾主汝等を憐まんとして待ち、
 是に由り汝等を容赦さんとして起ち給うべし。是、主は義の天主に在せばな
 り。福なるかな、凡て彼を待望む者。一九実にシオンの民はイエルサレムに
 住わん。汝泣きに泣くことなかるべし。彼必ず汝を憐み給わん。汝の叫ぶ
 声を、聞くより早く、汝に応え給うべし。二〇主は汝等に乏しき糧と足らわ
 るぬ水と¹⁰⁾を与え給わん。最早汝に教うる者¹¹⁾を汝の許より逃げ去らしめ給

7) その計画を
 取りやめて、
 静かにして天
 の御助けを待
 つ。――8) エジ
 プトの騎兵を
 頼みとする。
 9) 甚だしい悲
 慘の故に。
 10) ヘブレオ語
 本「悲しみの
 パンとなやみ
 の水と」。
 11) 集合名詞で
 予言者をさす

二 二 わじ。汝の眼汝を諭す者を見るべし。 三 汝の耳は背後より戒むる者の言を聞
 二 かん、¹²⁾ 曰く、是こそ道なれ。汝等之を歩みて、右にも左にも離るべからず、
 三 三 汝はその彫める像に白銀を貼りたると、その鑄造したる像に黄金を被せ
 三 たるを汚らわしとして、之を月経の女の穢れの如く投げ棄て、之に「出で行
 三 け」と云わん。 三 汝地の何処に種を播くとも、汝の種には雨を与えられ、糧
 二 となるその地の産物は甚だ豊かにして滋養に富むべし。その日汝の所有地にて
 二 四 は、小羊思いのままに草を喰まん。 二 四 また地を耕す汝の牛と仔驢馬とは、打禾
 二 五 場にて箕もて篩いたる如きものを混合せたる飼料を喰うべし。 二 五 多くの人の殺
 二 六 さるる日¹³⁾ 塔の倒れん時には、いづれの高き山の上、いづれの聳ゆる丘の上に
 二 六 も、流るる水の川あらん。 二 六 しかして主御民の傷を巻き、その痛む打処を癒し
 二 七 給わん日には、月の光日の光の如くなり、日の光七日の光の如く七倍となるべ
 二 七 し。 二 七 見よ、主の御名は遠方より来る。その御忿怒は燃えて抗り難く、御唇
 二 八 には憤り満ち、御舌は焼尽す火の如し。 二 八 御氣息は溢れ漲りて頸の半にまで及

12) 羊の群のうしろに
 ついてゆく羊飼に譬えてある。
 13) 天主の敵がみな滅びる日

ぶ激流の如くにして、諸国の民を余すなく亡ぼし、且民等の頸に
 かかれる迷妄の轡¹⁴⁾の如くならん。二九汝等には聖なる祭の夜¹⁵⁾の
 如く歌あるべく、また主の山に入りイスラエルの強き者の御許に
 至らんとて笛吹きながら行く人の如く心の歡喜あるべし。三〇主は
 御声の威嚴を聞かしめ、激しき御怒の脅威と、焼尽す火の焰とを
 以て、御腕の恐るべきを示し、旋風と石なす雹とによりて打碎き
 給わん。三一実にアツシリア人は主の御声のままに、咎もて打たれ、
 恐れ戦くべし。三二この咎の下るは確く定まりたることにして、鼓
 を打ち小琴を弾く間に、¹⁶⁾主之を彼の上に加え給わん。かくて主
 特別の戦争において彼等を打破り給うべし。三三夫れ、人身御供の
 処¹⁷⁾は昨日より設けられたり、王によりて¹⁸⁾設けられ、深く且広
 し。その養料は火と夥しき薪とにして、主の御氣息は、硫黄の流
 の如く之を燃やさん。

14) ゆきたくない所へゆ
かされるから。 — 15) 天

主がイスラエル人をし
 てエジプトの羈絆を脱
 せしめ給うた、あの過
 越しの夜。 — 16) 敵に打
 撃が下る度に、主の御
 民は喜んで祝うだるう
 17) 原語トフエト。ヒン
 ノンの谷のなかにある
 場所で、モロクに人身
 御供を献げたので有名
 18) ヘブレオ語本「王の
 ために」。この王は一
 説ではアツシリアの大
 王、また一説では偶像
 神モロクをさすと。

第三十一章

エジプトを頼みて天主を忘るる愚かさ

一 禍なるかな、援助を請わんとてエジプトに下り、馬に希望をかけ、多ければとて戦車を、力甚だ優れたればとて騎兵を、恃みとし、イスラエルの聖なる者を頼まず、主を求めざりし者。二されど叡智ある者は、禍を下して、御言を取消し給わざりき。彼は悪しき者の家に対し、不義を行ふ者の援助に対し起ち給わん。三エジプトは人にして天主にあらず、彼等の馬は肉にして霊にあらず。主その御手を傾け給わば、助くる者潰え、援助を蒙る者倒れ、皆諸共に滅び去るべし。四夫れ、主我にかく云い給う。獅子や仔獅子がその獲物を抑えて咆え、羊飼等数多之に向い行く時も、その人々の声に恐れず、その数多きに隠せざる如く、万軍の主もまた下りて、シオンの山の上、その丘の上にて戦い給わん。五万軍の主はイエルサレムを、飛ぶ鳥と等しく護り給うべし。護りて自由ならしめ、過越して救い給うべし。六イスラエルの子等よ、汝等遠く離れ去りたれば、立歸れ。七蓋しその日には人汝等の手の作りて以て罪を犯したるその銀の偶像と金の偶像

八 とを投げ棄てん。八時にアツシリア人は、人間のものならぬ劍に倒るべし、人間のものならぬ劍彼を呑むべし。彼は逃げ去らん、されど劍ゆえにあらず。その若者等は貢を納むる者とならん。¹⁾ 九その力²⁾は恐怖に由りて失せ、その諸侯は戦きて逃げ去るべし。主は然曰えり、その火はシオンにあり、その³⁾はイエルサレムにあり。

第三十二章

善政の御約束

一 見よ、一人の王正義を以て統治し、¹⁾ 諸侯義を以て罕らん。二 人は、風を避けて隠れ、暴風を避けて身を潜めたる者の如く、早魃の時の水の流、また荒地に屹立つ岩のかげの如くなるべし。三 見る人々の眼は霞まず、²⁾ 聞く人々の耳は意を注めて聴かん。四 愚なる者の心は知識

第三十一章 1) 本三七・三六。王下一九・三五。代下三二・二一。
2) ヘブレオ語本「その岩」即ちその王。3) 聖殿の燔祭壇の上の爐やかまど。

第三十二章 1) ユデア人が偶像礼拝をやめ、アツシリアの羈絆を脱した後の嬉しい有様。2) 天主が予言者達に啓示を賜う。

五 悟り、吃る者の舌は速く且明瞭に語るべし。五 最早智慧なき者³⁾ 侯と称ばるることなく、欺く者大人物と称ばるることなからん。六 蓋し愚なる者は愚なることを語り、その心は偽善を行い、主に向かいてさえ欺かんとして語り、飢えたる者の霊を空しからしめ、渴ける者より飲料を奪い去るなど、不義をなさんとするなり。七 欺く者の用器は最悪しかり。即ち彼は、貧しき者が義を語る時にも、虚偽の言もて柔和なる者を亡ぼさんと策謀をめぐらしたり。八 然れども侯は侯に応わしきことを考え、諸長の上に立つべし。九 富める女等よ、起ちてわが声を聴け、憂なき娘等よ、わが言を耳に留めよ。一〇 実に一年あまりの日を経て後、汝等憂なき者等もうろたえ騒がん。蓋は葡萄の收穫終りて、最早摘集むること来らざるべければなり。四 二 富める女等よ、驚き呆れよ、憂なき者等よ、うろたえ騒げ。汝等美服を脱ぎ、羞らいて己が腰に帯せよ。二三 好もしき田園の為に、実り豊かなる葡萄畑の為に、汝等の胸を打て。二三 茨と薊とわが民の地に生え出でん、まして雀躍したる市の欣喜の家々はみないかにぞや。一四 実に

3) 道德の点で最も愚者である罪人の減少は家政を司どる婦人には特に悲しいことである

一五 かの家は棄てられたり、かの邑の賑わいは過去れ
 り。洞⁵⁾の上には永久に闇と晦冥と臨めり。こは
 野驢馬の喜悦、羊群の牧場となり、一五終には高
 処より我等の上に靈の注がることあらん。6) か
 くて荒野は美田となり。美田は森と見做さるるに
 至るべし。一六荒野には義住まい、美田には正坐せ
 一七 ん。一七正義の作す所は平和、正義の結ぶ果は恒
 一八 久の静穏と安寧となるべし。一八わが民は平和の美
 しきが中に、安心の幕屋の内に、裕なる休憩の内
 一九 に坐せん。一九されど森⁸⁾の倒るる時には雹ふり
 二〇 て、都市は崩るべし。9) 二〇汝等諸々の水の辺に¹⁰⁾
 種まき、其処に牛や驢馬の脚を入らしむる¹¹⁾者は
 福なるかな。

5) もとの立派な邸宅が洞になつてゐる廢
 墟。一6) この天から注がれるのは、メシ
 ア時代に特有なこととして方々に述べて
 ある。結三六・二五。三五・二九。耳二・
 二八参照。一7) どこでも正義が行われる
 である。一8) 森は天主の敵の象徴。本
 一〇・一八一・一九、三三―三四参照。
 9) 当時の大都市ニニヴエとバビロン。本
 一四・二一以下参照。一10) 豊かな水に潤
 う地に。一11) 近東では飼料を節約するた
 めに、通例、草を喰う家畜の足にかせを
 はめておく。ここは、家畜に思ふ存分喰
 わせることができるほど、草が沢山ある
 との意。

第三十三章

アツシリアに対する禍の予言

一 禍なるかな¹⁾ 汝掠奪する者^{もの}。汝自身もまた掠奪せられざらんや。汝軽蔑する者^{もの}。汝自身もまた軽蔑せられざらんや。汝は掠奪を終えなん時^{とき}、掠奪せらるべく、倦みて軽蔑することをやめん時^{とき}、軽蔑せらるべし。二 主よ、我等を憐み給え、実に我等は汝を待ち望み奉れり。朝には²⁾ 我等の片腕³⁾ となり。患難の時^{とき}には我等の救拯となり給え。三 天使⁴⁾ の声に民⁵⁾ 逃げ走り、汝起上り給いしに由りて諸々の国人四散したり。四 汝等の掠奪物は蝗の集めらるる如くに集められ、濠にその満ちたる時の如くならん。五 主は偉大にて在す。高き処に⁷⁾ 住み給えばなり。彼はシオンに公平と正義とを満たし給えり。六 汝の御代⁸⁾ には忠節ある

第三十三章 1) これは天主の御国の敵アツシリアに対する呼びかけ。—2) ヘブレオ語本「朝ごとに」即ち毎日。—3) 譬喩で、我らの助けの意。—4) アツシリア人を罰するよう天主から命ぜられた天使。ヘブレオ語本「汝の声のなり轟く時」。—5) アツシリアの編成した軍隊を構成している人々。—6) それほど夥しい分捕物をそれほど容易に集める7) 天主に逆らう人々の攻撃の手の届かない所に。—8) 天主がユダのために定め給うた時。

七 べし、救済の資財なる智慧と知識とあるべし。主を畏ること、是の
 宝なり。七 見よ、見る者は外にて叫び、和睦の使者等は太く泣かん。9)
 八 八道荒れ果てて、徑進る者も絶え、人々契約を破りたれば、10) 主都市を
 九 亡ぼし、人々を顧みずなり給えり。地は哭きて悴れ、リバノンは辱し
 められて穢れ、11) サロンは荒野の如くなり、バサンとカルメルとは震動
 一〇 けり。一〇 我今ぞ起きん、と主云い給う、我今ぞ立ち上らん、今ぞ躬を起
 二 さん。二 汝等は焰を孕み、刈株を産み、汝等の息吹は火の如く汝等を吞
 三 み尽すべし。三 民は燃えたる後の灰の如くならん、茨の束の如く火に焼
 四 かれん。三 汝等遠方にある者よ、わがなしたる事を聞け、汝等近処にあ
 五 る者よ、わが力を知れ。一四 シオンにある罪人等は恐れたり、戦慄は偽善
 者等を襲えり。汝等の中誰か焼き尽す火と共に住むことを得んや。汝等
 一五 の中誰か恒久の焰と共に住むべけんや。一五 正義を踏みて歩み眞実を語る
 者、虐げて貪ることを棄て、すべての賄賂より手を退く者、耳塞ぎて血

9) エゼキアがセ
 ンナケリブの許
 に遣わした使者
 が満腔の悲しみ
 を抱いて帰る。
 10) エゼキアがセ
 ンナケリブと盟
 約を結んでいた
 にもかかわらず
 アッシリアの軍
 隊はユダに侵入
 した。一1)そこ
 の杉が敵に伐り
 倒される。

一六 を流すを聞かず、目を閉じて悪事を見ざる者。¹²⁾ 一六 かかる者は高処
 に住み、高き岩その砦となるべし。彼にはパン与えられ、その水は
 尽くることなし。一七 彼の眼は王の美麗なるを見、国を果までも眺め
 一八 ん。¹³⁾ 一八 汝の心は恐ろしき事を思い廻らすべし。識者は何処にあり
 や。律法の言を考量る者は何処にありや。小さき子等を教うる者
 一九 は何処にありや。¹⁴⁾ 一九 汝は恥知らぬ民を見ることなからん。そは解
 し難き言語の民にして汝はその舌の滔々と語る所を曉り得ず。彼等
 二〇 には智慧なるものつゆほどもなし。二〇 我等の祭典の町シオンを見
 よ、汝の眼は富裕なる住居イエルサレム、決して移さるることなき
 幕屋を見ん。その杭は永久に抜かれず、その縄は一条も断たれざる
 二一 べし。二一 夫れ、我等の主がその偉大を示し給うは、ただ彼処におい
 てのみ。そは大きな広き流の河川¹⁵⁾ ある処にして、漕ぐ舟之を過ら
 二二 ず大なる軍艦も之を通ることなからん。二二 蓋し主は我等の審判者、

12) 詩一四・二など参
 照。—13) 今はひどく
 罵られ恥ずかしめら
 れているエゼキアが
 (王下一八・一四以
 下参照) 再び栄える
 ようになる(代下三
 二・二三参照)。危
 険なくどこまでも縦
 横に旅することがで
 きる。—14) 哥前一・
 二〇。—15) 天主が大
 河の如くその都を囲
 繞して保護し、これ
 を通過できぬように
 し給う。

二三 主は我等の立法者、主は我等の王にて在す。彼こそ我等を救い給わめ。
二三 汝の纜は解けたり、¹⁶⁾ 其の力及ばじ。汝の櫓は旗を掲ぐる能わざる状態になるべし。その時には掠奪の獲物数多分配えられ、跛者さえも獲物を受けん。^{二四} また近き者、我弱れり、と云わざるべし。其処に住む民は不義を己が身より除かれん。¹⁷⁾

¹⁶⁾ 今は。――¹⁷⁾ イザヤはもう一度すべての天罰の目的、即ち罪からの救いを高唱する。

第三十四章

悪人の総審判

一 汝等異邦人よ、近よりて聴け。民等よ、意を注めよ。地と之に満てるもの、世界とすべて之より生ずるものも聴けよかし。^二 是は主の御義憤諸国の民の上に、御激怒そのすべての軍勢の上に臨みたればなり。主は彼等を屠り、之を殺戮に委ね給えり。^三 彼等の殺されたる者は投げ棄てられ、その屍よりは悪臭立ち上り、山々もその血に溶けなん。¹⁾ 四 天の万軍²⁾ は消え去り、天は巻物の如く巻かれ、³⁾ その万軍の落つること恰

第三十四章 ¹⁾ 山の基も血に浸つて溶けて崩れるだらう。²⁾ 星。³⁾ 昔の書物は巻物で、それを棒を芯にして巻きつけておいた。

五 も葡萄や無花果の樹より葉の落つる如くなるべし。五 夫れ、わが劍は天
 にて酔いたり。視よ、そはイドウメアの上に、またわが殺さんとする
 民⁴⁾の上に、制裁のため下らん。六 主の劍は血に充滿ち、小羊と牡山羊
 との血に、脂肪の乗れる牡羊の血に、肥え太りたり。実に主の犠祭はボ
 スラ⁵⁾にあり、大殺戮はエドムの地にあり。七 野牛⁶⁾はこれらと共に、
 牡牛は力強きものと共に下らん。彼等の地は血に、彼等の土は肥えたる
 ものの脂肪に飽くべし。八 そは主の復讐の日、シオンのために審判くべ
 き報復の年なり。九 その流は瀝青に、その土は硫黄に変らん、その地は
 燃ゆる瀝青⁷⁾となるべし。一〇 しかして夜も昼も消ゆることなく、その煙
 は恒に立上らん。そは荒れ果てたるまま代々より代々に及び、世々の世
 世までそこを通る者なかるべし。二 ペリカンと⁸⁾と之を領し、朱鷺と
 鴉とそこに住まわん。主之を無に歸さんとしてその上に準繩を張り、⁸⁾ 荒廢
 に委ねんとて測錘を垂れ給うべし。一二 その貴族等はそこに居らずなり、

4) イドウメア即ちエドムの民を犠牲の畜の群と考えている。
 5) ボスラは死海の東南にあつてエドム人の首都であつた。
 6) 野生の猛牛。
 7) ソドマとゴモラとの例の如く
 8) 地面を極めて正確に平にするために。ヘブレオ語本「トフーとボフー」。

一三

ひとびとおうよもと人々王を呼び求めん。その諸侯は皆失せ去るべし。一三その家には茨と蕁麻と、

一四

その城砦には薊生い茂り、かくて龍の臥処、駝鳥の牧場とならん。一四悪霊怪物

相あい、毛深きもの互に啼き交すべし。魔女そこに臥して己が安息を得たり。九

一五

一五そこには狽穴を有してその仔等を養い、周囲を掘りその陰にて是等を育く

一六

めり。そこには又、鳶互に相集えり。一六汝等勉め励みて主の書の中を探りつつ

読め。是等の物の中一つだに缺くることなく、互に他を求めたることなし。そ

はわが口より出しことは、主の命じ給いし所にして、その霊之を集めたればな

一七

り。一七主は御自ら彼等の為にその分を与え、御手ずから準繩もて彼等に分ち給

えり。彼等は永久に之を領し、千代万代までそこに住まわん。

第三十五章

イスラエルの敵より救わるべきことーメシアによる救いの讃歌

一荒れ果てて道なき地¹⁾は楽しまん、沙漠は喜び躍りて、百合の如く花を開か

ん。二そは芽ぐみに芽ぐみ、声をあげて喜び讃えん。リバノンの榮は之に与え

九) 本一
三・二
一とそ
の註参
照。

第三十
五章
1) 「荒

られたり。カルメルとサロンと²⁾の美、これらは主の御光栄、我等の天主の美を見るべし。^三汝等萎えたる手を強くし、弱れる膝を固くせよ。^四心隠したる者に云え、勇気を振り起せ、恐るるなかれ。

視よ、汝等の天主は報復の仇討を行い給わん。天主御自ら来りて、汝等を救い給わん。^五その時盲者の眼はあき、聾者の耳は開くべし。^六その時跛者は鹿の如く跳躍り、啞者の舌は解けん、そは荒野

に水迸り出で、沙漠に流生じたればなり。^七不毛の地たりし処は池となり、乾ける処は水の源泉となるべし。旧龍の住みたりし巢

窟には芦と葦青々と生い茂らん。^八彼処には径と道とありて、聖なる道と称えらるべし。穢れたる者は之を通らじ。是汝等の為の直き

路にして、愚なる者と雖も之によらば迷うことなからん。^九彼処には獅子も居らじ。悪しき獣も之を上らずして、彼処には姿を見せ

じ。ただ救わるべき者のみ之を歩まん。^{一〇}主に贖われし者等帰り、

れ果てて道なき」とは、イスラエルの宗教も政治も圧迫を蒙つてゐる状態。²⁾パレスチナ中豊穰と美とで最も名高い地域。本三三・九参照。³⁾肉体の弱点は、直接の原因によるものでも、道德上の原因即ち罪によるものでも、なくなる

讚め頌えつつシオンに来るべし。⁴⁾ その頭には恒久の歡樂あらん。彼等は歡喜と悅樂とを得て、悲哀と嘆息とは逃げ去るべし。

第三十六章

センナケリブのユデア侵入

一 さてエゼキア王の十四年のことなりしが、アッシリア人の王センナケリブ上り来り、ユデアの諸々の堅き城市を襲いて之を取りぬ。¹⁾ ニアッシリア人の王はラブサケス²⁾をラキスよりエルサレムに遣し、多くの者をその手に附けて³⁾エゼキアの許に赴かしめたり。時に彼晒し野の道の辺なる上の池の水道の辺に立てり。^三折しもヘルキアの子にして家を掌るエリアキム、書記官ソブナ、及びアサフの子なる史官ヨアへ、出でて彼の許に至りぬ。

⁴⁾ まずバビロンの捕囚から帰ること、次に聖会に入ること、最後に天国にのぼることをさす。

第三十六章 1) 王下一八・一三以下参照。——2) ラブサケスは人名でなく職名。——3) 大軍をひきいさせ

四 ラブサケス彼等に云いけるは、エゼキアに云え、アッシリア人の王なる大王はかく曰う、汝等が恃みとするこの信賴は何ぞや。五 また汝はいかなる策謀や力を以て、叛かんとするか。六 誰を恃みてか我を離れたるぞ。七 視よ、汝はかの折れたる葦の杖、エジプトに依頼む。是は人もし倚り縋らば、その手に入りて之を刺貫かん。エジプトの王ファラオの凡て之を恃む者におけるも亦かくの如し。八 汝もし、我等は主我等の天主を恃む、と云わば、是、エゼキアがその高き処と祭壇とを取除き、九 ユダとイエルサレムとに、汝等この祭壇の前にて礼拝すべし、と云いたる、かの者に非ずや。一〇 されば今、わが君アッシリア人の王に身を委ねよ。さらば我汝に馬二千頭を与えん。されど汝は之に乗る者を己が方にて調うることを能わざるべし。一 然らば汝、いかにしてわが君の最小さき臣僕の中なる、一箇処の判官の面をすら仰ぐに堪えんや。されど汝エジプトを頼み、その戦車と騎兵とを恃むならば、二 今我がこの地に上り来て、之を滅ぼさんとせること、豈主に依るにあらざらんや。主は我に曰えり、かの地に攻

4) エデ
ア人が
エジプ
トと同
盟しよ
うと企
てたこ
と。
5) ラブ
サケス
は異邦
人の見
方では
非ずる

二 め^{のぼ}上りて之^{これ}を滅^{ほろ}ぼせ、と。6) 二時^{とき}にエリアキム、ソブナ、及びヨアへ、ラ ブサケスに云^いいけるは、汝^{なんじ}の下僕^{しもべら}等^ら7) にシリア語^ごもて語り給^{たま}え。蓋^そは我等^{われら} 之^{これ}を解^{かい}すればなり。石垣^{いしがき}の上に居^おる民^{たみ}の耳傾^{みみかたむ}くる処^{ところ}にて、我等^{われら}にユデア語^ご もて語り給^{たま}うなかれ、と。三 ラブサケス彼等^{かれら}に云^いいけるは、わが君^{きみ}がすべ て是等^{これら}の言^{こと}を語^{かた}らしめんとて我^{われ}を遣^{つか}し給^{たま}えるは、ただ汝^{なんじ}の君^{きみ}と汝^{なんじ}との為^{ため}の みならんや。寧^{むし}ろ石垣^{いしがき}の上に坐^ざせる人々^{ひとびと}の為^{ため}にして、彼等^{かれら}をして汝等^{なんじら}と共^{とも} に己^{おの}が糞^{ふん}を喰^{くら}い、己^{おの}が尿^{によう}8) を飲^のましめんとてには非^{あら}ずや。三 しかしてラブ サケス立^たちて大^{おお}声^{こゑ}に、ユデア語^ごもて叫^{さけ}びて云^いいけるは、アツシリア人^{びと}の王^{おう} なる、大王^{だいう}の御言^{みことば}を聴^きけ。一四 王^{おう}はかく云^いい給^{たま}う。汝等^{なんじら}エゼキアに唆^{そその}かさる ることなかれ。そは彼汝等^{かれなんじら}を救^{すく}い出^{いだ}すこと能^{あた}わざるべければなり。一五 また 汝等^{なんじら}エゼキアによりて主^{しゆ}を恃^{たの}むなかれ、彼^{かれ}は云^いう、主^{しゆ}必^{かな}らず我^{われ}等^{われら}を救^{すく}い給^{たま}わ ん、この城市^{まち}をアツシリア人^{びと}の王^{おう}の手^てに渡^{わた}すべからず、と。一六 エゼキアに 聴^きくなかれ、夫^それ、アツシリア人^{びと}の王^{おう}はかく曰^{のたま}えり、我^{われ}と福利^{ふくり}を共^{とも}にし、	6) ラブサケス は、天主の御 命令だからユ ダを攻めるの だ、と主張す る。——7) 自分 たちをさす。 当時慣用の丁 寧な言い方。 8) 原文 <i>urii</i> <i>nam pedum</i> <i>snorum</i> 即ち 「その足の尿」
---	--

出でてわが許に來り、汝等各人その葡萄樹より、各人その無花果樹より食
 し、汝等各人その非戸水を飲め。一七 終に我來りて⁹⁾ 汝等を伴い、汝等の国
 に似たる国、穀物と葡萄酒との国、パンと葡萄畑との国に至らん。一八 また
 汝等エゼキアに惑わさるなかれ、彼は云わん、主我等を救い給わん、と。
 されど諸国の神々の中、誰かその国をアッシリア人の王の手より救いたる
 者ありや。一九 エマトの神、及びアルファドの神は何処にかある。セファル
 ヴアイム¹⁰⁾ の神は何処にかある。彼等はわが手よりサマリアを救いたり
 や。二〇 是等の国のすべての神々の中に、誰がその国をわが手より救い出し
 たりや。されば主もわが手よりイエルサレムを救い出すことあらんや、
 と。二一 三されど人々は黙して、一言だも彼に答えざりき。蓋は王命じて、
 之に答うるなかれ、と云いたりしを以てなり。二三 茲において、ヘルキアの
 子にして家を掌るエリアキム、書記官ソブナ、及びアサフの子なる史官ヨ
 アヘ、エゼキアの許に入り、衣服を裂きてラブサケスの言を彼に告げたり。

9) エジプト遠征を終えた後
 10) エウフラト河の左岸バビロンの上手にあるシブフォラ。一〇六
 ブサケスは天主も一国の神に過ぎぬと考えていたので他の神々同様これを征服することができると思っていた。

第三十七章

エゼキアの祈り—アツシリア軍の全滅

一 エゼキア王^{おうこれ}之^きを聞^きくや、己^{おの}が衣服^{ころも}を裂^さき、粗麻布^{あらぬの}を身^みに纏^{まと}い、主^{しゅ}の家^{いえ}に入りぬ。¹⁾二 しかして粗麻布^{あらぬの}を着^きたる、家の宰^{つかさ}エリアキム、書記^{しよき}官^{かん}ソブナ、及び司祭^{およしさい}中の長老等^{ちやうらう}を、アモスの子預言者^{こよげんしや}イザヤの許^{もと}に遣^{つかわ}したり。^三彼等^{かれら}之^{これ}に云^いいけるは、エゼキアはかく云^いう、今日^{きよう}は患難^{かんなん}と懲戒^{ちやうがい}の日^ひ、冒瀆^{ぼうとく}の日^ひなり。そは子等^{こらうま}生れ出^いでんとしつつあるに、分娩^{ぶんべん}する力^{ちから}なければなり。^四願^{ねが}わくは主^{しゅ}汝^{なんじ}の天主^{てんしゅ}、ラブサケスの言^{ことば}を聴^きき給^{たま}わんことを。²⁾ 彼^{かれ}はその君^{きみ}たるアツシリア人^{びと}の王^{おう}が、活^いける天主^{てんしゅ}を誘^{そし}り、言^{ことば}もて辱^{はづか}しめん為^{ため}に遣^{つかわ}したる者^{もの}にして、主^{しゅ}汝^{なんじ}の天主^{てんしゅ}はそを聞^きき給^{たま}えり。されば汝^{なんじ}、なお残^{のこ}れる者^{もの}の為^{ため}に祈^{いのり}禱^{ささ}げ給^{たま}え、と。^五エゼキア王^{おう}の臣僕等^{けらいたち}、かくの如^{ごと}くイザヤの許^{もと}に至^{いた}れり。^六時にイザヤ彼等^{かれら}に云^いいけるは、汝等^{なんじら}の主君^{きみ}にかく云^いうべし。主^{しゅ}はかく云^いい給^{たま}う、汝^{なんじ}が聞^ききし、アツシリア人^{びと}の王^{おう}の臣僕等^{けらいたち}が我^{われ}を冒瀆^{ぼうとく}したる言^{ことば}を恐^{おそ}るるなかれ。^七見^みよ、我^{われ}は彼^{かれ}に一^{ひとつ}の靈^{れい}³⁾を

第三十

七章

1) 王下

一九・

一以下

2) 審判

者及び

報復者

として

3) 畏怖

の精神

八 与えん。彼は知らせを聞きて、己が国に帰るべし。更に我は彼をその国におい
 て劍に殪れしめん、と。ハかくてラブサケスは歸りて、アッシリア人の王がロ
 ブナと戦いおるに会えり。蓋し彼はそのラキスを出発しことを聞きいたりし
 なり。九 時に彼、エチオピアの王タラカに就きて、見よ、彼汝と戦わんとて出
 で来れり。〃と人の云うを聞きしが、彼之を聞くや、使者等をエゼキアの許に
 遣さんとして云いけるは、一〇 汝等、ユダの王エゼキアにかく云うべし、曰く、
 汝、イエルサレムはアッシリア人の王の手に渡らざるべし、と云いて、汝の恃
 む神に欺かるるなかれ。二 見よ、汝はアッシリア人の王等が諸国に対してなし
 たる所、即ち之を滅ぼしたることを悉く聞けり。さらば汝豈救わるるを得ん
 や。二三 諸国民の神々がわが父祖の滅ぼしたるもの、即ちゴザム、ハラム、レセ
 フ、及びタラツサルにありしエデンの裔等を救いしことありや。二四 エマトの王
 アルファドの王、セファルヴァイム市、アナ及びアヴァの王、何処にかある、
 と。4) 一四 エゼキア乃ち使者等の手より書簡を取りて之を読むや、主の家を上り

4) 王下
 一八・
 三四・
 一九・
 一三。

一五 行けり。かくてエゼキア之を主の御前に拈げたり。一五さてエゼキア主に祈りて云いける
 一六 は、一六万軍の主、イスラエルの天主、智天使の上に坐し給う者よ、汝独り地のすべての
 一七 国の天主にて在す。汝は天地を造り給えり。一七主よ、御耳を傾けて聴召し給え。主よ、
 御眼を開きて照覽し給え。センナケリブが活ける天主を冒瀆せんとて云い寄したるすべ
 一八 ての言を聴召し給え。一八実にも、主よ、アツシリア人の王等は国々とその諸州とを荒ら
 一九 し、一九その神々を火中に投じたり。もとより是等は神にあらずして、木石より人の手に
 二〇 て作りしものなれば、彼等之を粉碎したるなり。二〇されば今、主我等の天主よ、我等を
 二一 彼の手より救い、地のあらゆる国に、汝独り主にて在すことを知らしめ給え、と。三時
 二三 にアモスの子イザヤ、エゼキアの許に人を遣して云わしめけるは、主イスラエルの天主
 はかく云い給う、汝がアツシリア人の王センナケリブに関して願いたる事に対し、三主
 の彼に就きて曰える御言は、次の如し。処女なる娘シオンは汝を蔑み、汝を嗤いたり。
 二三 娘イエルサレムは汝の後にて頭を振りたり。三汝は誰を詰りしや、誰を罵りしや。誰に
 向かいて汝の声をあげ、汝の高慢の眼を挙げしや。イスラエルの聖なる者に向かいてな

二四 り。二四 汝はその僕等の手によりて主を請りて云えらく、我は衆くのわ
が戦車を率いて山々の高処に、リパノンの頂に上れり、我はその高き
杉樹と、その選抜の樅樹とを伐り倒し、その頂の高き処に、そのカル
メル（二五）の森に入らん。我は掘りて水を飲み、堤ある河をば悉くわが足
の裏もて涸らしたり。二六 汝はわが往時になしし所を聞かざりしか。⁵⁾
我は昔日より之を企て、今之を成就げたり。かくて相闘う丘と堅固な
る城市城市との根絶成就せり。二七 その住民等は手弱かりき。彼等は戦
きて怖惑いたり。彼等は畑の乾草、牧場の芝生、成長せざる内に枯る
る屋根の草の如くなれり。二八 汝の住まいと汝の出入⁶⁾と汝の我に對す
る激怒とは、我之を知る。二九 汝の我に對して狂える時、汝の傲慢は上
りてわが耳に入れり。されば我汝の鼻に環を付け、汝の唇の間に
轡を嵌めて、⁷⁾ 汝の通り来りし道より汝を引戻さん。三〇 また汝には之
を以て徴とせん。今年（三〇）は自然に生ずる物を食し、⁸⁾ 二年目には果を

5) 生ずる一切の出
来事は天主によつ
て永遠に定められ
ている。汝は天主
の御手の中にある
一つの道具に過ぎ
ない。——6) 汝のす
べての行動。詩一
二〇・八参照。
7) 思い上がったア
ツシリア人を、鼻
環やくつわで制御
する家畜のよう
にする。——8) 昨秋は
戦争のせいで播き
つけが出来なかつ
たから。

食^{しょく}せよ。されど三年^{ねんめ}目には播^まきて刈^かり、また葡萄^{ぶどう}畑^{はたけ}に植^うえてそ
 の実^みを食^{しょく}せよ。三二 ユダの家^{いえ}の救^{すく}わるべき者^{もの}、残^{のこ}れる者^{もの}は、下^{した}に
 根^ねを張^はり、上^{うへ}に実^みを結^{むす}ぶべし。三三 そは残^{のこ}れる者^{もの}はイエルサレム
 より、救^{すく}拯^{せい}はシオンの山^{やま}より出^いずべければなり。万^{ばん}軍^{ぐん}の主^{しゅ}の熱^{ねつ}
 意^い之^{これ}をなさん。三三 この故^{ゆえ}に主^{しゅ}はアツシリア人^{びと}の王^{おう}に就^つきてかく
 云^いい給^{たま}う、彼^{かれ}はこの城市^{まち}に入^いらず、之^{これ}に矢^やを放^{はな}たず、楯^{たて}をもて
 之^{これ}を襲^{おそ}わず、濠^{ほり}を之^{これ}に繞^{めぐ}らさざるべし。三四 彼^{かれ}はその来^{きた}りし道^{みち}よ
 り歸^{かえ}り行^ゆきて、この城市^{まち}には入^いらざるべし、と主^{しゅ}は云^いい給^{たま}う。
 三五 我^{われ}はこの城市^{まち}を護^{まも}りて、わが為^{ため}に、またわが下^{しも}僕^べダヴィドの
 為^{ため}に、之^{これ}を救^{すく}わん、と。三六 然^{しか}るに主^{しゅ}の天^み使^{つかい}出^{いで}来^{きた}り、アツシリア
 人^{びと}の陣^{じん}中^{ちゆう}にて十^{じゅう}八^{はち}万^{まん}五^ご千^{せん}人^{にん}を撃^うち殺^{ころ}せり。人^{ひと}々^{びと}朝^{あした}に起^{おき}出^{いで}たるに、
 見^みよ、皆^{みな}死^{しか}屍^{ばね}とな^いり居^いたり。三六 さればアツシリア人^{びと}の王^{おう}セン
 ナケリブは出^いで去^さりて歸^{かえ}りゆき、ニニヴェに住^{とど}まれり。三八 然^{しか}る

9) 本三一・八。王下一九・
 三五。土一・二一。集四
 八・二四。喀前七・四一。
 喀後八・一九。――主の一
 天使はエジプトの初^{はつ}見^{けん}を
 撃^うち殺^{ころ}した(出一二・三
 三)。また一天使がイエ
 ルサレムに向^{むか}つて手^てを
 さし伸^のべると、ダンから
 ベルサベ―まで七万人が
 ペストで死^しんだ(母下二
 四・一五、一六)。セン
 ナケリブがイエルサレム
 のそばにいた夜にも同様
 に、その部下の將^{しやう}兵^{へい}が突
 発^{はつ}した疫^{えき}病^{びやう}で全^{ぜん}滅^{めつ}した。

に彼かれがその神かみネスロクみやの宮みやにて礼拝れいはいしおりし時とき、その子等こどもなるアドラメレクとサラサルつるぎもつ劍つるぎを以て之これを討うち取り、アララトちの地にに逃にげ入りぬ。その子こアサルハツドンすなわ乃かれち彼かれに代かわりて王おうとなれり。

第三十八章

エゼキアの病氣と全快

一 その頃ころエゼキアや病やみて死しに瀕ひんしたるに、預言者よげんしやアモスの子こイザヤ、彼かれの許もとに
入いり来きたりて之これに云いいけるは、主しゅかく云いい給たまう、汝なんじの家いえのことことを処し理りせよ、そは
汝なんじ死しして生いきざるべければなりと。二 エゼキア乃すなわちその面かおを壁かべに向むけ、主しゅに祈いの
りて、三 云いいけるは、主しゅよ、請こい願ねがわくは、我われがいかいかに誠せい実じつに、心こころを尽つくして汝なんじ
の御前みまへに歩あゆみ、汝なんじの御眼おんめに善ぜんなる事ことをなしたるかかを憶おもい給たまえ、と。かくてエゼ
キア大おおいに泣なき悲かなしみぬ。四 時に主しゅの御言みことばイザヤに下くだれり、曰いわく、五 往ゆきてエ
ゼキアに云いえ、汝なんじの父ちちダヴィドの天主てんしゅたる主しゅはかく云いい給たまう、我われは汝なんじの祈いのり禱を
聴きき、汝なんじの涙なみだを視みたり。見みよ、我われ汝なんじの寿命よくいに十五年ねんを加くわえん。六 また汝なんじとこの

第三十

八章

一王下

二〇・

一以下

代下三

二・二

四。

七 城市とをアッシリア人の王の手より救い出し、且之を守らん、と。七 さて主
 がその曰えるこの言をなし給うべき徴として、主より汝に賜わるは、次の如
 くなるべし。八 見よ、我アカズの日時計において、既に過ぎ下りし目盛の日
 影を、日と共に、十条後に戻らしめん、と。然るに日はその過ぎ下りし目盛
 を十条後退きたり。九 ユダの王エゼキアが病みてその病気の癒えたる時に
 一〇 録したるもの。一〇 我は云えり、我はわが寿命半にして、冥府の門に赴かざ
 二 るべからず、と。我はわがために残りの年を求めたり。二 我云えらく、我は
 三 生者の国にて主なる天主を見奉ることなくして、最早人をも安息²⁾の裡に住
 三 む者をも見ることなからん。三 わが代は去れり、そは牧者の天幕の如く³⁾卷
 かれて我より取られたり。わが生命は織匠に剪らるるが如くに断たれ、未だ
 四 始めしばかりなるに、その断つ所となれり。汝は朝より晩に至るまでに我を
 三 果てしめ給わん。三 我は朝まで希望を抱きたり。されど彼は獅子の如くわが
 一四 骨を悉く碎き給えり。汝は朝より晩に至るまでに我を果てしめ給わん。一四 我

2)「墓の」
 一説では
 「世の」。
 3) わが生
 命は出発
 の際に卷
 かれ片付
 けられる
 テントの
 ようであ
 る。

一五 は子燕の如く啼き、鳩の如く思に沈まん。わが眼は高処を仰ぎ見て衰えた
 り。主よ、我は暴力を受く。汝われに味方し給え。一五 さりながら、かくなし
 給えるは彼御自らなれば、我何をか云うべき、また彼何とて我に味方し給う
 べき。我は汝の御前に、わが靈魂を苦しめつつ、わがすべての年を思い返さ
 ん。一六 主よ、もし人の生くことかくの如く、わが靈の生命もかかるものな
 らば、我を懲らし、⁴⁾ 我を生存えしめ給え。一七 見よ、わが最苦しき苦痛は、
 一八 平安となれり。汝はまたわが靈魂を、亡ぶることなからしめんとて、救い出
 し給えり、わが罪をば悉く、汝の背後に棄て去り給えり。一八 夫れ、冥府は汝
 を讃むることなく、死は汝を頌うることなく、冢穴に下る人々は汝の誠を待
 望むことなからん。一九 唯生ける者、生ける者こそ、今日の我のなしたる如
 く、汝を讚美し奉るなれ。父は汝の信実を子等に知らしむべし。二〇 主よ、我
 を救い給え、さらば我等生くる日の限り、主の家にて我等の歌を奏で唱い
 奉らん。二一 さてイザヤは、彼を癒やさんために人々無花果の棹塊を一つ取

4) 一時的
 患難を与
 える意。
 人をより
 良くする
 ために試
 鍊を下し
 て。

三
り来りて、之を腫物の上に貼るべし、と命じたり。三
エゼキアは云えり、何を以て我が主の家に上り行くべき徴とせんか、と。5)

5) イザヤは王に、あなたは三日の内に天主に感謝のため聖殿にゆくことが出来るだろうと告げた(王下二〇・五)。

第三十九章

バビロンよりの使者―之に就きてのイザヤの預言

一 その時に当り、1) バラダンの子、バビロンの王、メロダク・バラダン、書簡と礼物とをエゼキアの許に送れり、蓋は彼その病みて癒えたる由を聞きたればなり。2) エゼキア乃ち之を悦び、香料の庫、白銀黄金、薫物及び貴き香膏、そのすべての調度庫、ならびにその宝庫にあらん限りの物を、悉く彼等に見せたり。苟しくもその家その全ての領地の中にありて、エゼキアの彼等に見せざりし物はなかりき。三 然るに預言者イザヤ、エゼキア王の許に入りて之に

第三十九章 1) キリスト紀元前七一二年。アツシリア王サルゴンの治世。―2) 王下二〇・一二。

云いけるは、この人々は何を云いしか。また何処より汝の許に來れりや、
 と。エゼキア云いけるは、彼等は遠き国より、即ちバビロンより、わが許
 に來れり、と。四イザヤまた云いけるは、彼等は汝の家にて何を見たるか
 と。エゼキア云いけるは、彼等はわが家にある物を悉く見たり。凡そわが
 宝庫たからぐらにありて、我が彼等に見せざりし物はなかりき、と。五イザヤ、エゼ
 キアに云いけるは、万軍の主の御言を聴き給え。六見よ、日來りなば、汝
 の家にある物、汝の父祖が今日まで積み蓄えたる物は悉くバビロンに持ち
 去らるべし。何物も残されじ、と主云い給う。七剩え汝より出ん、汝の儲
 くべきその子等の中にも、人々の連れ去る所となりて、バビロン王の宮殿
 に侍従じじゆうとなるべき者あらん、と。八エゼキア、イザヤに云いけるは、善
 い哉、主の語り給える御言。また云えらく、ただわが存命の間は、平和と
 眞実まこととあれかし、と。九

3) 原語

eunuchus「閹
 者」。—4) エゼ

キアは延期す
 ることによつ
 て、子孫に対
 する災難を、
 或は避けるこ
 とができるか
 と思つたので
 ある。

第四十章

バビロンの捕囚からの帰還とメシアの御代とに関する預言

一 汝等慰むる所あれ、慰むる所あれ、わが民よ、と汝等
の天主云い給う。1) ニエルサレムに對いてその心に
語り、之に呼わり云えかし、その禍は終り、その不
義は赦されたり。そは己が諸々の罪のために主の御手
より二倍2) を受けたり、と。三 荒野に呼わる者の声
す、3) 曰く、汝等主の道を備え、沙漠にて我等の天主
の徑を直くせよ、と。四 凡ての谷は埋められ、凡ての
山丘は均され、曲れるは直くせられ、峻しき処は平な
る路となりて、4) 五 主の御光栄現れ、肉みな齊しく之を
見ん。是、主の御口の語り給える所なり。六 声ありて
云う、呼われ、と。我云えらく、何と呼わるべきぞ。

第四十章

1) 本節は先ず第一に、バビロンの捕囚からの将来の帰還をさしている。しかしイザヤは同時にまたメシアの御代の有様をも予言している。――2) イスラエルは自分の罪に相当する以上の苦しみを、捕囚の間になめなければならなかつた。

3) 福音書で洗者ヨハネの活動に適用されている。マテオ三・三。可一・三。路三・四以下。約一・二三参照。

4) 先ずバビロンの捕囚からの帰還が妨げなく早くなるように。次に「メシアの救いに対する準備として、これを受ける妨げをすべて取り除いてほしい」の意。

七 曰く、肉はみな草、その栄は悉く野の花に似たり。⁵⁾ 草は枯れ、花は落
 八 ちたり。そは主の御息吹之にかかりたればなり。寔に民は草なり。⁸⁾ 草は
 九 枯れ、花は落ちたり。されど我等の主の御言は永久に存す。⁹⁾ 汝シオンに
 福音⁶⁾を宣べ伝うる者よ、高き山に上れ、汝イエルサレムに福音を宣べ伝
 うる者よ、力をこめて汝の声を挙げよ。挙げよ、恐るるなかれ。ユダの諸
 市に云え、見よ、汝等の天主ぞ、と。¹⁰⁾ 見よ、主なる天主大能を具えて来
 り給うべし。その御腕統治し給わん。見よ、その御報賞御許にあり、その
 御業御前にあり。¹¹⁾ 彼は牧者の如くその羊群を牧い、御腕に小羊を掻集
 め、抱き上げて御懷に入れ、孕める者を御自ら搬び給わん。⁷⁾ 誰か手
 の窪もて水を測り、手の平もて天を量りたりや。誰か三本の指もて地の塊
 を支え、山々を錘により、丘々を秤によりて量りたりや。¹²⁾ 誰か主の霊を
 助けたりや、また誰かその顧問となりて之に教えたりや。¹³⁾ 主誰に諮り
 給い、誰が之に教え、之に正義の徑を諭し、知識を授け、聰明の道を示し

5) 集一四・一
 八。雅一・一
 〇。彼前一・
 二四。
 6) 「福音を宣
 べ伝う」はイ
 ザヤがこの第
 二部で好んで
 用いる言い方
 7) 結三四・二
 三。三七・二
 四。約一〇・
 一一以下参照
 8) 智九・一三。
 羅一一・三四。
 哥前二・一六。

一五 たりや。一五 見よ、異邦人等は手桶の一滴の如く 秤の中の塵の如く見做され
 一六 たり。見よ、島々は細かき埃の如し。一六 リバノンは燃やすに足らず、その獸
 一七 もまた燔祭の牲とするに足らざるべし。9) 一七 万の国民も主の御前には宛らな
 一八 きが如く、彼には無にして空なる如く思われるなり。一八 然らば汝等天主を誰
 一九 にか比べたる、また之に對して如何なる像をか置かんとはする。10) 一九 像は工
 二〇 人が鑄造し、金細工師が金を被せ、銀細工師が銀箔を置きたるものにあらざ
 二一 や。二〇 かかる者は堅くして腐るまじき材を選べり。賢き工匠は肖像の動かざ
 二二 るべき立て様を求め計る。二三 汝等知らずや。汝等聞かざりしや。始より汝等
 二三 に告げられし事なかりしや。汝等地の基を了らざりしや。三 地球の上に坐し
 二四 給うは主にして、そこに住む者は蝗の如し。彼は諸天を無きが如くに展べ、
 之に住むべき幕屋の如くに張り給う。二三 彼は秘密を探る者11) を無きが如くな
 らしめ、地の裁判者を空しきが如くならしめ給う。二四 実に彼等の幹は植えら
 れたるにもあらず、播かれたるにもあらず、また地に根ざしたるにもあらず。

9) 誰も主
 に相当す
 る崇敬は
 献げること
 とが出来
 ない。
 10) 徒一七
 ・二九。
 11) 警吏を
 使つて臣
 下の心を
 探る者。
 ヘブレオ
 語本「諸
 侯」。

主しゅにこれ之を吹ふき給たまいたるに、忽たちまち枯かれたり。旋風つむじかぜ之をこれ藁わらの如ごとくに卷まきて去さるべし。二五さらば汝等なんじらわれ我を誰たれに比くらべ類たぐえたりや、と聖せいなる者もの云い給たまう。二六汝等なんじらの眼めを高たか処きに挙あげて、是等これらの物ものを創つく造りたるは誰たれなるかを見みよ。そはその軍ぐん勢せいを数かずえて引ひ出いだし、一切すべてを名指なさして召よび給たまう者ものにて在ましま。その御勢おんいきおいと御力みちからと御能おんはたらきとの偉大おおいなるに由よりて是等これらの物ものは一つだに欠かけざりき。二七ヤコブよ、汝何故なんじなにゆえに云いうや、イスラエルよ、汝何故なんじなにゆえに語かたるや、「わが道みちは主しゅに隠かくれたり、わが審判さばきはわが天主てんしゅによりて見逃みのがされたり」と。二八汝知なんじしらずや、また聞きかざりしや。主しゅは常住じようじゆうの天主てんしゅにして、地ちの極はてを創つく造り給たまいし者ものに在ましま。二九弱よわり給たまうことも勞つかれ給たまうこともあらざるべく、その智慧ちえは究きわめ難がたし。三〇倦うみたる者ものには氣力きりよくを与あたえ、勢いきおい及び力ちからなき者ものには之これを倍加ばいかし給たまう。三〇少年しょうねんも弱よわり疲つかれ、青年せいねんも衰おとろえ仆たおるることあらん。三一されど主しゅに希望のぞみをおく人々ひとびとはその力ちからを新あらたにし¹²⁾驚わしの如ごとく飛とび立たち、走はしりて疲つかれず、歩あゆみて弱よわらざるべし。

12) 一説では若わかがえることをさすと。わしはその羽毛うもが毎年毎年生え変わるから。

第四十一章

義しき者の治世—偶像の空しさ

一 島々はわが前に黙せ。国々の民¹⁾は力を更新して近づき来り、かくて語れ。我等共に寄集まりて、審判の廷に至らん。二 義人²⁾を東より起し、之を召びて已に従わしめたるは誰ぞ。彼はその眼前に国々の民を付し、王等を征服え、彼等を塵の如くその劍に、風に卷かざる藁の如くその弓に、委ね給わん。三 彼は彼等を追いて安らかに過ぎ行かん。その足の下、道も見えざるばかりなるべし。四 是等の事を行い、なしとげ、開闢より代々を呼び出したるは誰ぞや。主たる我ぞかし。我は始なり、また終なり。五 島々は見て恐れたり。地の極は驚きて近づき寄り来れり。六 人各々その近き者を助け、その兄弟に云わん、勇気を振り起せ。七 鎚もて打つ銅細工師は、その時鍛うる者を励まして云えり、接合すによし、と。しかして釘付け堅

第四十一章 1) 異教徒全体。—2) 天主の御正義を行う者。キルス。—3) ヘブレオ語本「我は始めにして、終りの世々に至るまでも然り」。本四四・六。四八・一二。默一・八、一七。二二・一三参照。
4) イザヤは偶像の神々に仕える人々が驚いて躍気となる様を皮肉に述べる。

八 くして、動かざらしめたり。ハされど汝、わが下僕イスラエル、わが選みたる
 九 ヤコブ、わが友アブラハムの裔よ、我は彼によりて地の極より汝を連れ来り、
 その遠き処より汝を呼び寄せ、さて汝に云えり、汝はわが下僕なり。我汝を選
 一〇 み、汝を棄てざりき、と。一〇我汝と共にあれば、恐るることなかれ。我汝の天
 主なれば、違ふことなかれ。我は汝を強くし、汝を助けたり。わが義人⁵⁾の右
 二 手、汝を支えたり。二見よ、汝に仇し戦う者はみな敗れて赤面せん。汝に逆ら
 三 う人々は無きが如くなりて滅び去るべし。二三汝はそを探し求むとも、汝に叛
 四 く人々を見出すことなからん。汝に仇し闘う人々は無きが如く、尽きたる如く
 五 なるべし。二三夫れ、主たる我、汝の天主、汝の手を取り、汝に曰く、恐るるな
 六 かれ、我は汝を助けたり。一四恐るるなかれ、汝蛆虫なるヤコブ、汝等イスラエ
 七 ル出の死せる者⁶⁾よ。我汝を助けたり、と主云い給う。汝の贖主はイスラエ
 八 ルの聖なる者なり。一五我は汝を、鋭き齒ある新しき穀打車の如くにしたり。汝
 九 は山を打ちて細かになし、丘を粉の如くになすべし。一六汝人々を箕もてふるわ

5) この
 義人も
 二節同
 様、や
 はりキ
 ルス。
 6) 旧約
 原典学
 者によ
 るヘブ
 レオ語
 では、
 「イス
 ラエル
 のみじ
 めなる
 者よ」。

一七 んに、風之を吹き去り、旋風之を巻き散らさん。汝乃ち主によりて喜
 び、イスラエルの聖なる者⁷⁾によりて楽しむべし。一七之しき者と貧しき者
 と水を求むるに、更にあらずして、その舌渴きに乾干びたり。主たる我、
 彼等に応えん。イスラエルの天主たる我、彼等を棄てじ。一八我は丘の傾斜
 に川を、野の只中に泉を開きて、荒野を水の溜池となし、途なき地を水の
 流となすべし。⁸⁾ 一九我は沙漠に杉樹、茨、挑金嬢、及び橄欖樹を植え、荒
 野に樅樹、榆樹、及び黄楊木を共に置かん。二〇これ、彼等が見て、主の
 御手之をなし、イスラエルの聖なる者そを創造り給えることを、齊しく知
 り、熟々考え悟るに至らんためなり。二一汝等の訴訟を持ち来れ、と主云い
 給う。汝等に云うべき事あらば、持ち来れ、とヤコブの王曰いき。二二人々
 来りて凡て起るべき事を我等に告げよ。ありし以前の事を告げよ。さらば
 我等心を留めてその最後の結果を知らん。また来るべき事を我等に示せ。
 二三この後来らんとする事を告げ知らせよ。さらば我等汝等¹⁰⁾が神々なるこ

7) イスラエルの聖なる天主へブレオ語ゴエル。一⁸⁾本三〇・二五。三五・六―七。出一七・一―七参照。
 9) 荒野の改造は、イスラエルの運命の好転する象徴。
 10) 偶像神への呼びかけ。

二四 とを知らん。汝等善事にても悪事にても、能わば之をなせ。さらば我等共に語り見るべし。二四 見よ、汝等は無より出で、汝等の事業は、なきものより生じたり。汝等を選びたる者は憎むべきものなり。二五 我は北より一人¹¹⁾を起したり。彼日出る方より来りて、わが名を呼び、陶器師の粘土を踏む如く、長等をして泥の如くならしむべし。二六 誰か始より¹²⁾告げて我等に知らしめ、昔より告げて我等に「汝は義し」と云わしめたりや。告ぐる者も、予言する者も、また汝等の言を聞く者も、一人だにあらず。二七 始なる者は¹³⁾シオンに云わん、見よ、彼等此にあり、と。我また福音を告ぐる者をイエルサレムに与えん。二八 我見しが、彼等の中に策謀をめぐらす者も、問われて一言答え得る者も、一人だになかりき。二九 見よ、彼等は皆不正にして¹⁴⁾その業は空、彼等の偶像は風にして虚しきなり。

第四十二章

メシアの使命

11) キルス。
12) この出来事の起こるすつと前から。
13) 四節参照。
14) 一節及び二一節で要求されている審判の判決。

一 見よ、わが下僕ぞ、¹⁾ 我之を支えんとす。わが選める者ぞ、
わが心之を嘉す。我わが霊を之に与えたり。彼は異邦人等に教
法を伝えん。²⁾ 彼は叫ばず、人を負せざるべく、その声外に
聞こえざるべし。³⁾ ひしげたる輩を碎かず、煙れる麻を消すこ
となく、真理によりて教法を説かん。⁴⁾ 彼は悲しまず、慌て
ず、地に教法を布くに至らん、島々³⁾ は彼の律法を待ち望むべ
し。⁵⁾ 諸天を創造りて之を展べ、地を固め之より生ずる物を安
んじ、その上なる民に氣息を、そこを歩む者に霊を与え給う主
なる天主は、かく云い給う。⁶⁾ 主たる我、正義によりて汝を召
び、汝の手を取りて汝を守り、汝を立てて民の契約となし、⁴⁾
異邦人の光となしたり、⁵⁾ 是、汝をして盲者の目を開かしめ、
囚人を牢より、暗黒に坐せる者等を獄屋より、出さしめんため
なり。⁶⁾ 我は主なり、是ぞわが名なる。⁷⁾ 我は他の者にわが誉

第四十二章 1) 天主の下
僕。これは屢々イスラエ
ルのこと。しかしここ及
び同様な他の所では、こ
の「下僕」はユデアの民
の集団と明確に区別して
使用され、メシアをさす。
マテオ一二・一八参照。
2) メシアが行うべき天主
と人との間の審判によつ
て。――3) 世界。――4) 故に
メシアは天主とユデア人
との間の仲介者である。
5) 本四九・六。路二・三
二参照。――6) マテオ一一・
二―六参照。――7) われヤ
ーヴェ「在る者」は、わ
が名を契約遂行の保証と

九 を、彫像にわが讚美を与えざるべし。九見よ、先なる事は既に至れり。新し
 一〇 き事は我また之を告ぐ、その起るに先立ちて、汝等に聞かしめん。一〇主に向か
 一 いて新しき歌を唱い、地の極よりその讚美を献げ奉れ、汝等海に下る者と之に
 二 満てる者、島々と之に住める者よ。二荒野とその諸市とは雀躍せよ。ケダル⁸⁾
 は家々に住わん。讚めよ、岩⁹⁾に住む人々。彼等は山々の頂より叫ぶべし。
 一二 彼等は主に光榮を帰し、島々にその讚美を伝えん。一三主は勇士の如く出で征
 き、戦士の如く熱心を起し、鬨をあげて呼わり、その敵に御力を示し給わん。
 一四 我は常に黙し、声を立てず忍べり。今我分擔する者の如く語わん。打散らし、
 一五 且滅ぼさん。一五我は山丘を荒らし、その草を悉く枯らし、河川を島となし、溜
 一六 水を乾し尽さん。一六我また盲者をその知らざる道に導き、彼等をしてその知ら
 ざりし径を歩ましめ、その前なる暗黒を光明にかえ、曲れるを直くせん。我彼
 一七 等の為に是等の事をなし、彼等をば棄てざりき。一七彼等は退転せり。彼等彫刻
 物を恃める者、鑄造物に「汝等是我等の神なり」と云う者は、恥の上にも恥を

する。
 8) 死海
 の東方
 9) ヘブ
 レオ語
 本「セ
 ラ」。
 エドム
 の首都

一九八

受けよかし。一八聾者よ、聴け、盲者よ、目を留めて見よ。10) 誰が盲者な

りや、わが下僕に他ならず。誰が聾者なりや、我が使者等を遣したるその

人に他ならず。誰か盲者なる、売られたる者11)に他ならず。また誰か盲者

なる、主の下僕に他ならざるなり。二〇汝は多くの事を見る。されど之を憶

えんとはせざるか。汝は耳開けたり。されど聴かんとはせざるか。二一主は

之を聖別ち、12) 律法を大ならしめ高からしむることを欲み給えり。二二然れ

ども民は奪われ、且荒されたり。その若人等は皆桎梏嵌められて、獄屋の

中に閉込められたり。彼等は奪われたるに、救わんとする者なく、掠めら

れたるに、返還せ、と云う者なし。二三汝等の中に誰か之を聴かんとする者、

将来の事に注意して耳を傾けんとする者ありや。二四ヤコブを掠奪に、イス

ラエルを荒らす者等に、付したるは誰ぞ。是、我等が罪犯したる主にあら

ずや。彼等はその道を歩むことを欲まず、その律法に聴従うことをせざり

き。二五されば主はその上に暴ぶる御義怒を注ぎ、烈しき戦争を齎し、之が

10) イスラエル
に対する言葉

天主の御業が

わからないめ

くらつんぼの

ような者であ

つてくれるな

11) 罪を消すた

めに売られて

とらわれの身

となつた者。

12) ほかの諸民

族と分かち、

天主の聖なる

者とするため

に。

周囲を燃やし給いたれど、彼知らず、之を焚き給いたれど、彼曉らざりき。

第四十三章

イスラエル人が天主の御憐みにより救わるること

一 さてヤコブよ、主、即ち汝を創造り給える者、イスラエルよ、汝を形
成り給える者、今かく云い給う。我汝を贖い、汝の名を指し汝を召したる
により、恐るるなかれ。汝はわが有なり。二 汝の水を渡らん時、我汝と共
にあるべく、河の汝を没することあらじ。汝は火の中を歩まん時も焼くる
ことなく、焔も汝を焦すことなからん。三 そは我、主にして汝の天主、イ
スラエルの聖なる者²⁾にして汝の救主なればなり。我は汝の身の代として
エジプトを与え、エチオピアとサバとを汝の代りとせり。四 汝わが眼に尊
むべき栄ある者となりてより、我汝を愛せり。されば我汝に代えて人々を、
汝の生命に代えて民を付さん。五 我汝と共にあれば、恐るることなかれ。
我汝の裔を東より導き来り、汝を西より集めん。六 我北に向かいて、引渡

第四十三章

1) 水火はこの
上ない大危険
を譬えたもの
この語でイス
ラエルが滅び
ず永続するこ
とが約束され
る。— 2) 本四
一・一六参照。

七 せ、と云い、南に向かい、留置くなかれ、と云わん。わが
 子等を遠方より、わが娘等を地の極より連れ来れ。³⁾ 凡て
 わが名を呼ぶ者は、⁴⁾ 我わが光栄の為に之を創造し、之を
 形造り、之を成したり。⁸⁾ 目はありながら盲者たり、耳は
 ありながら聾者たる民を、連れ出せ。⁹⁾ 万の国民相集い、
 諸々の族聚まりたり。汝等の中誰か之を告げ、前にありし
 事を我等に聞かすべき。彼等その証人を出して己が義しき
 を示せかし。⁵⁾ 人々は聞きて、真実なり、と云うべし。
 一〇 主は云い給う、汝等⁶⁾ はわが証人にして、わが選みたる
 下僕⁷⁾ なり。汝等知りて我を信じ、我の我なることを悟る
 を得ん。我の前に神造られざりしが、我の後にも是あらず
 るべし。二我こそは、我こそは主なれ。我のほかに救う者
 はあらず。⁸⁾ 三我は告げたり、救いたり。我聞かせたれば

³⁾ このくだりはメシアに関するものと考えられる。それはここに述べてある思想がバビロンの捕囚の終わることだけに止まらぬからで、真の神の全世界から選み給うたすべての人々が主に帰依することを意味するのである。⁴⁾ ヘブレオ語本「わが名を以て称えらるる者」。⁵⁾ 天主と偽の神々と、異邦人とイスラエル人との、是非曲直を裁く時に。⁶⁾ イスラエル。⁷⁾ 一説では「汝等」を布衍したものでイスラエルの民をさすとし、また一説ではキルスかメシアをさすとする。⁸⁾ 何一三・四。

一三 汝等の間には他の神なかりき。⁹⁾ 汝等はわが証人なり、我こそは天主
 なれ、と主云い給う。^三 我は元始より在り。誰もわが手より救い得べ
 一四 き者なし。我事を行わんに、誰か能く之を妨げんや。^{一四} 汝等の贖主、
 イスラエルの聖なる者¹⁰⁾ に在す主、かく云い給う。我は汝等の為に人
 をバビロンに遣し、門を悉く¹¹⁾ 毀ち、己が船を誇るカルデア人¹²⁾ を
 一五 亡ぼせり。我は主にして汝等の聖なる者、イスラエルの創造主にし
 一六 て汝等の王なり。^{一六} 海の中に道を、激しく流るる水の中に径を、拓
 一七 き、^{一七} 戦車と馬と、軍勢と勇士¹³⁾ とを、出征かしめ給いし主は、かく
 云い給う。彼等は諸共に眠りこけたり。再起出ることあらじ。彼等は
 一八 麻の如く摩り消されたるなり。^{一八} 以前の事を心に留むるなかれ、昔の
 一九 事を顧みるなかれ。¹⁴⁾ 見よ、我新しき事をなす。そは今起らん。汝
 等実に之を知るべし。我は荒野に道を、道なき処に河川を造らん。
 二〇 野の獣も、竜も駝鳥も、我を頌栄うべし、そは我、わが民わが選べ

9) 我のほかにイスラエルを救いたる者なし。—10) 本四一・一六、二〇。
 四三・三参照。
 11) あらゆる防禦。
 12) カルデア人はただエウフラト河ばかりでなくペルシヤ灣をも航行した
 13) 集合的にエジプト軍をさすか、またはフアラオを言う。—14) こういう昔の奇蹟も、赫々たる新奇蹟に對しては光が薄れてしまふだらう。

る者に飲ましめんとて、荒野に水を、道なき処に河川を引きたればなり。

三二 我はこの民をわが為に造れり、彼等はわが讚美をのべ伝えん。三三 ヤコブよ、

汝は我を呼び求めざりき。またイスラエルよ、汝はわが為に力を尽さざり

き。三三 汝は我に汝の燔祭の牡羊を献げず、汝の犠牲もて我を崇めざりき。我

は汝をして供物により我に事うることをなさしめず、香により汝に労をかけ

ざりき。二四 汝は金錢もてわが為に匂わしき茎を購求めず、汝の犠牲の脂肪も

て我を飽足らしめず、却つて汝の罪により我を煩わし、汝の不義により我に

労をかけたなり。二五 我こそは、わが為に¹⁵⁾ 汝の不義を抹す者なれ。

我は汝の罪を思い出でざるべし。二六 我を思い出せ。我等互に云分を討わさ

ん。汝にもし云うべき事あらば、述べよ。そは汝が己を義しとせんためな

り。二七 汝の最初の父祖¹⁶⁾ は罪を犯せり。汝に告ぐる者等¹⁷⁾ は我に背けり。

三六 されば我は聖なる長等を流し、ヤコブを殺戮に、イスラエルを讒謗に付し

たり。

15) たただ
だ憐みの

一念から

16) アダム

をさすの

であるら

一説では

アブラハ

ムかヤコ

ブをさす

と。

17) 司祭や

預言者。

第四十四章

偶像礼拝の愚かさーイスラエルが囚れより救わるべきこと

一 さて、今聴け、わが下僕ヤコブよ、わが選みたるイスラエル
 二 よ。1) 汝を造り成し給いし者、胎内よりの汝の援助者なる主はか
 く云い給う。恐るるなかれ、わが下僕ヤコブよ、わが選みたる最
 三 直き者2) よ。三 実に我は乾ける土に水を、涸れたる地に流を注が
 四 ん。汝の胤にわが霊を、汝の裔にわが祝福を注がん。四 彼等乃ち
 五 草の中にて、流るる水の辺にある柳の如くに生立つべし。五 甲は
 い 云わん、我は主の有なり、と。乙はヤコブの名を名乗らん。また
 丙はその手もて、主の属、と録し、3) イスラエルの名に擬えん。4)
 六 イスラエルの王にしてその贖主なる主、万軍の主、かく云い
 七 給う。我は始なり、我は終なり。我を除きて天主はあらず。5) 七 誰
 か我に似たる。その者は呼びて告げよかし。また我が古の民を立

第四十四章 1) 耶三〇・

一〇。四六・二七。

2) ヘブレオ語本「イエ
 シュルン」。申三三・

二六参照。即ち「善良
 にして愛しき者」。

3) 筆で書きあらわす。

4) 異教徒もイスラエル
 民族と一緒になつてそ

の宗教を奉ずるに至る
 だろう。――5) 本四一・

四。四八・一一。黙一・

八、一七。二二・一三。

八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五

ててより以来の次第を我に陳べよかし。来るべき事、即ちこの後にあるべき事を、彼等は人々に告げよかし。⁶⁾ 汝等恐るるなかれ、惑うなかれ。我はかの時より汝に聞かせ告げたり。汝等はわが証人なり。我を除きて天主ありや、我の知らざる造物主ありや。⁹⁾ 偶像の製作者は皆空無にして、その此上なく愛する物は彼等を益することなからん。彼等はその物が見ず、また了らずして、終には滅ぶるに至ることの証人なり。¹⁰⁾ 誰が神を造り、何の益もなき像を鑄造したるか。二見よ、それに関係ある者は、みな滅びん。蓋は造りし者人なればなり。彼等は皆集まりて立たん、されど恐れて共に滅ぶるに至るべし。¹¹⁾ 金工は鑪もて仕上をなせり。炭火と鎚ともて物を形造り、己が強き腕もて鍛え成せり。彼は飢えて弱り、水を飲まずして疲れ果てん。¹²⁾ 木工は墨繩を伸べ、鉋もて物を形造り、曲尺もて之を整え、文回しもて之を円くし、人の像を、宛ら家に住む眉目美き人の如く作成したり。¹³⁾ 彼は杉を伐倒し、森の樹木に混りて立てる柏や櫟を取り、松を植えたるに、雨之を育てたり。¹⁴⁾ かくてそは人々

6) 天主のほかに未来を知る者なし
7) 智一
三・一
一。
8) 家の中に安置する
ために

一六 の為に薪となれり。彼之を取り分けて、その身を煖め、また燃やしてパンを焼き、なお

その残りもて神を作りて礼拝し、彫像を拵えてその前に身を屈めたり。一六その半は火に

燃やし、その半もて肉を食し、食物を料理して飽足り、身を煖めて云えらく、ああ我は

温かなり、我は火を見たり、と。一七さてその残りを以ては己が為の神として彫像を作れ

り、しかしてその前に身を屈めて之を礼拝し、祈願して云う、汝はわが神なれば、我を

救え、と。一八かかる者等は知れることなく、悟れることなし。蓋しその眼覆われたるに

よりて、見えず、その心悟らざるなり。一九彼等はその心の中に反省ることなく、氣の付

くこともなく、また「我はその半を火に燃やし、その炭火の上にてパンを焼き、肉を炙

りて食せり。さるを我豈その残りもて偶像を作るべしやは。木の一片の前に平伏すべし

やは。」と云うほどの分別もなきなり。二〇その一部は灰なり。之を拝するは心の愚なる者

なり。かかる人は己が靈魂を救わざるべく、また「恐らくはわが右の手に虚偽あらん」

とも云わざるべし。二一ヤコブよ、イスラエルよ、汝はわが下僕なれば、是等の事を記憶

せよ。我は汝を形成したり、汝はわが下僕なり。イスラエルよ、我を忘るることなかれ。

二二	三三	二四	二五	二六	二七	二八
三三 我^{われ}は汝^{なんじ}の不義^{ふぎ}を雲^{くも}の如^{ごと}く、汝^{なんじ}の罪^{つみ}を霧^{きり}の如^{ごと}く、消^けしたり。9) 我^{われ}汝^{なんじ}を贖^{あがな}いたれば、わが許^{もと}に立^{たち}歸^{かえ}れ。三三 讚^はめよ、諸^{てん}天^{てん}よ、そは主^{しゅ}御^{おん}憐^{あわれ}憫^みを垂^たれ給^{たま}いたればなり。地^ちの極^{はて}よ、10) 歆^{よろこ}び叫^{さけ}べ。山^{やま}々^{やま}よ、森^{もり}とその中^{なか}のあらゆる木^きよ、讚^{さん}美^びの欲^こを返^{かえ}せ。そは主^{しゅ}ヤコブを贖^{あがな}い給^{たま}いたればなり。イスラエルは榮^{さかえ}を得^えん。11) 二四 汝^{なんじ}の贖^{あがな}主^{しゅ}、胎^{たい}内^{ない}よりの汝^{なんじ}の造^{つく}主^{りぬし}なる主^{しゅ}、かく云^いい給^{たま}う。我^{われ}は主^{しゅ}なり、我^{われ}は万^{ばん}物^{ぶつ}を造^{つく}り、独^{ひと}り諸^て天^{てん}を布^しき、また地^ちを押^お据^しうるにも、我^{われ}を助^{たす}くる者^{もの}なし。二五 我^{われ}は占^{うら}う者^{もの}の兆^{しるし}を効^{かい}なからしめ、神^{かみ}降^{おろ}しする者^{もの}を狂^{くる}わしめ、智^ち者^{しや}を後^{しりえ}方に退^{さが}らしめ、その智^ち慧^えを愚^{おろ}かならしむ。二六 我^{われ}はわが下^{しも}僕^べ12) の言^{こと}を立^たて貫^{つらぬ}かしめ、わが使^し者^や等^らの策^{はかり}略^{ごと}を成^{じやう}就^{じゆ}せしめ、イエルサレムに向^むかいては「汝^{なんじ}に民^{たみ}住^すむべし」と云^いい、ユダの諸^{まち}市^{まち}に向^むかいては、「汝^{なんじ}等^ら建^たてらるべし、我^{われ}はその荒^あれたる処^{ところ}を復^{ふつ}興^{こう}せん」と云^いう。二七 我^{われ}深^{ふか}き淵^{ふち}13) に向^むかいては「汝^{なんじ}乾^{かわ}け、我^{われ}汝^{なんじ}の河^{かわ}川^{かわ}を涸^からさん14) 」と云^いい、二八 キル						

9) この喩の要点は、全く消滅すること。
 10) ヘブレオ語本「地の深き処」。天及び山々に相對す。
 11) ヘブレオ語本「かれ(天主)イスラエルのうちに御榮光をあらわし給わん」。
 12) イザヤ自身かすべの預言者をさすのである。——13) エウフラト河。——14) エウフラト河の深い淵でさえバビロンの征服されるのを防ぎ得なかつた。

スに向かいては、「汝はわが牧者なり、¹⁵⁾ 汝はわが欲む所を悉く果さん」と云い、イエルサレムに向かいては、「汝建てらるべし」と云い、また聖殿に向かいては、「汝の基据えらるべし」と云う。

第四十五章

キルスに就いての予言

一 諸国民をその面前に平伏さしめ、諸王の背を屈ましめ、扉をその前に開かしめて、この門を閉すことなからしめんために、¹⁾ 我がその右の手を取りし、注油されたる²⁾ キルスに、主かく云い給う。
 二 我は汝に先立ち行きて地の榮ある者等を打伏せ、青銅の門を破り鉄の門を折らん。^三 我また汝に、隠されたる宝と、人知れぬ所に秘められたるものとを与えん、是、汝をして我が汝の名を呼ぶ主にしてイスラエルの天主なることを知らしめん為なり。^四 我はわが下僕ヤコブとわが選びたるイスラエルとの為に、汝の名を指して汝を

¹⁵⁾ 牧者が家畜の群を連れ帰るように、かれも御民を故郷へ導くであらう。

第四十五章

¹⁾ キル

スは天主から遣されてイスラエルを救つた者として、主に注油された者、即ち神政政治の王という名誉ある称号を持つ。
²⁾ 彼が開いたものは誰にも閉じさせないし、誰も閉ずることが出来ない。

五 召べり。我汝を我に似たる者としたり。³⁾ されど汝我を知らざりき。我は主なり、他にまたなし。我を除きて天主はあらず。我汝に帯したり。されど汝我を知らざりき。六 是日出る方の人々も日の入る方の人々も、我のほかにもまたなきを知らんためなり。我こそ主なれ、他にまたあらず。我は光を拵え、闇を創造し、安寧を作り、禍を与う。我こそ主にして是等一切をなす者なれ。八 諸天よ、上より露を滴らせよ。⁴⁾ 雲は義人を雨と降らせかし。地は開けて救主を萌え出でしめよ。正義も共に生ずべし。主たる我、⁵⁾ 之を創造せり。禍なるかな、己土器の破片なるに、その製作者と諍う者。粘土豈己に形を与うる者に向かいて、汝何をか作る、また、汝の作りし物手を具えず、と云うべけんや。⁶⁾ 禍なるかな、己が父に向かいて、汝何故子を儲くるか、と云い、女に向かいて、汝何故産むや、と云う者。二 イスラエルの聖なる者にしてその作り主なる主はかく云い給う。将来の事を我に問え、またわが子等とわが手の作とに就きて我に委ねよ。

3) 汝に注油した。一節参照。

4) 告げられて
いる救いが早く
遂行される
ように！ と
いうイザヤの
祈願。――5) イ
ザヤの熱望の
叫びに対する
天主のお答。
6) 耶一八・六。
羅九・二〇。

二三 我^{われ}地^ちを造^{つく}れり、我^{われ}その上^{うへ}に人^{ひと}を創造^{そうぞう}せり。わが手^て天^{てん}を敷^しき展^のべたり、我^{われ}そ

の万^{ばん}軍^{ぐん}に命^{めい}を下^{くだ}したり、二三 我^{われ}は正義^{せいぎ}の爲^{ため}に彼^{かれ}を起^{おこ}せり。さればそのすべ

ての道^{みち}を直^{なお}くせん。彼^{かれ}はわが城^{まち}市^しを建^たて、わが捕^{とり}虜^こを釈^{とき}放^{はな}つべし、但^{ただ}しそは

身^み代^{しろ}金^{きん}の爲^{ため}ならず、また贈^{おく}物^{りもの}の爲^{ため}ならず、⁹⁾と主^{しゅ}万^{ばん}軍^{ぐん}の天^{てん}主^{しゅ}云^いひ給^{たま}う。一四 主^{しゅ}

はかく云^いひ給^{たま}う、エジ^ろプ^りトの勞^{ろう}力^{りよく}、エチ^おオ^おピ^おアの貿^{ばう}易^{えき}、及^{およ}び丈^{たけ}高^{たか}きサ^さバの人^{ひと}

々^{びと}10) は、汝^{なんじ}の許^{もと}に移^{うつ}り来^きて、汝^{なんじ}の有^{もの}とならん。彼^{かれ}等^らは汝^{なんじ}の後^{うしろ}に従^{したが}いて歩^{あゆ}み、

手^て械^{かせ}に絆^{ほだ}されて行^ゆき、汝^{なんじ}を拝^{はい}し汝^{なんじ}に祈^{いの}るべし、曰^いく、天^{てん}主^{しゅ}はただ汝^{なんじ}の中^{なか}に在^{いま}

すのみ。汝^{なんじ}の外^{ほか}に天^{てん}主^{しゅ}はあらず、と。一五 実^げに汝^{なんじ}は隠^{かく}れたる天^{てん}主^{しゅ}にて在^{まし}ま

スラ^すエ^らルの天^{てん}主^{しゅ}よ、救^{すく}主^{いぬし}よ。一六 彼^{かれ}等^らは皆^{みな}恥^は辱^じを得^えて赤^{せき}面^{めん}せん、誤^{あや}謬^{まり}を作^{つく}り出^{いだ}

せる者^{もの}は諸^{もろ}共^{とも}に狼^{ろう}狽^{はい}して立^{たち}去^されり。一七 イス^いス^すラ^らエ^えルは永^{とこ}遠^{しえ}の救^{すく}済^{さい}によりて主^{しゅ}に

救^{すく}われたり。汝^{なんじ}等^らは世^よ々^よの世^よ々^よに至^{いた}るまで、恥^は辱^じを蒙^{こう}ることなく、赤^{せき}面^{めん}する

ことなからん。一八 夫^それ、諸^{てん}天^{てん}を創^{そう}造^{ぞう}し給^{たま}ひし主^{しゅ}、地^ちに形^{かたち}を与^{あた}え之^{これ}を作^{つく}り給^{たま}ひ

しその天^{てん}主^{しゅ}、之^{これ}を形^{けい}成^{せい}し給^{たま}ひ、徒^あ勞^だには之^{これ}を創^{そう}造^{ぞう}し給^{たま}わす、人^{ひと}を住^すましめん

7) 日月星

辰。

8) キルス

9) キルス

は身の代

金を出さ

ずに、捕

囚のイス

ラエル人

を自由の

身にした

10) サバは

アフリカ

の隊商が

取引する

貨物の集

散地。

二六 二五 二四 二三 三三 三二 二〇 一九
 とて之を形造り給いしその者、かく云い給う、我は主、他にまたなし、と。
 一九 我は隠れたる処、地の暗き処¹¹⁾にて語らざりき。我はヤコブの裔に「空し
 くも我を求めよ」とは云わざりき。我は正しきを語り、直きを告ぐる主なり。
 二〇 集まり来りて、共に近づけ、汝等異邦人の中より救われたる者よ。己が彫
 刻める木を担い、¹²⁾ 救い得ざる神に祈る者等は愚なり。 二 汝等告げて、来
 りて共に相議れ。太初よりこの事を聞かせ、かの時より之を予言したるは誰
 ぞや。主たる我ならずや。我を除きてまた天主なし。正しくして救う天主は
 我の外にあらず。 三 地の諸々の極よ、我が許に立歸れ、さらば汝等救わるべ
 し。そは我天主にして、他に是あらざればなり。 二三 我は我自らによりて誓え
 り。正義の言わが口より出でて復返らざらん。 二四 それ、我に向かいてすべて
 の膝は屈み、すべての舌は誓うべし。¹³⁾ 二五 されば人は云わん、わが正義と権
 力とは主にこそあれ、と。人々その御許に来るべく、すべて彼に逆い奉る者
 は滅ぶべし。 二六 イスラエルの裔は皆主によりて義とせられ、また頌えられん。

11) 暗に異教の行事の、わけでも口寄せの公明ならざることをさす。
 12) 宗教的行列のために。
 13) 羅一四・一一。
 腓二・一〇。

第四十六章

バビロンの偶像は破毀せらるべし―救いの約束

一 ベル¹⁾は粉碎^{ふんさい}され、ナボ²⁾は蹂躪^{じゆうりん}せられたり。彼等^{かれら}の像^{ぞう}は獸^{けもの}と家畜^{かちく}とに負^おわされたり。汝等^{なんじら}の荷^には甚^{はなは}だ重^{おも}くして、疲勞^{ひろう}を資^{もたら}す。二 彼等^{かれら}は磨滅^{まめつ}し、共に破損^{はそん}して、己^{おのれ}を負^おえる者^{もの}を救^{すく}うこと能^{あた}わざりき。かくて自ら^{みづか}も亦^{また}捕^{とら}われ行くべし。三 ヤコブの家^{いえ}よ、すべてイスラエルの家^{いえ}の遺^{のこ}れる者^{もの}よ、汝等^{なんじら}はわが懷^{ふところ}に抱^{いだ}かれ、わが胎^{たい}に孕^{やど}されし者^{もの}なれば、我^{われ}に聴^きけ。四 汝等^{なんじら}の年^{とし}老^おゆるまで我^{われ}は同一^{どうい}にして、汝等^{なんじら}の髮^{かみ}白^{しろ}くなるまで、汝等^{なんじら}を負^おわん。我^{われ}造^{つく}りたれば、且^{かつ}抱^{いだ}き、且^{かつ}負^おいて、救^{すく}うべし。五 汝等^{なんじら}我^{われ}を誰^{たれ}にか擬^{なぞ}え、匹^{たぐ}儔^りえ、比^{くら}べ、等^{ひと}しとしたる。六 汝等^{なんじら}は袋^{ふくろ}より黄金^{こがね}を出^{いだ}し、秤^{はかり}にて白銀^{しろがね}を量^{はか}り、人^{ひと}々の平伏^{ひれふ}して礼拝^{れいはい}する神^{かみ}を作^{つく}らしめんとて、金細工師^{きんさいくし}を雇^{やと}う。七 彼等^{かれら}は之^{これ}を肩^{かた}に負^おいて担^{にな}い行き、その処^{ところ}に安置^{あんち}す。されどそは立^たてるまま、その処^{ところ}より動^{うご}かざるべく、且^{かつ}また人々^{ひとびと}之^{これ}に向^むかいて呼^{よほ}わる時^{とき}も、聞^きくことなく、

第四十六章

- 1) アツシリア人及びバビロニア人守護の最高神。
- 2) カルデアの国家と王室との守護神ときれていた。
- 3) 鹵獲物として。

彼等を患難より救うことなかるべし。4) 汝等之を憶いて恥じよかし。5) 邪曲をなす者等よ、心に反省るべし。 過ぎにし世々を思い出でよ。 実に我こそは天主なれ、外に天主なし、また我の如きものあらず。

一〇 我は太初より最終の事を告げ、開闢より未だ起らざる事を告げて、云えり、わが図る所は必ず成り、わが志す所は必ず行わるべし、と。

二 我は東より鳥を、遠き国よりわが意中の人を召ぶ。我かく語り

たれば、必ずならしめん。我之を創めたれば、必ず行わん。三 正義よ

り遠ざかりし、心頑固なる者等よ、我に聴け。四 我はわが正義を近か

らしめたれば、そは遠からず、わが救済は遅からじ。我はシオンに救済を、イスラエルにわが栄を与うべし。

第四十七章

バビロンの蒙る天罰

一 下り来て塵の中に坐れ、処女¹⁾なる娘バビロンよ、地上に坐れ。カ

4) 巴六・二五。

5) ヘブレオ語本

「毅然として立て

よかし」。即ち、

Confundamini で

なくて fundami-

ニである。

6) 敏捷強壯な戦士

を喩えたもの。

7) キルス。

九 も知らざるべし」と云う者よ。⁶⁾ 子なき淋しさと寡婦の境涯と是等二つの
 八 事を聴け、汝柔弱にして安らかに暮し、己が心の中に「ただ我あるのみ。
 七 汝の軛を負わせたり。⁷⁾ 汝云えらく、我恒久に女君たるべし、と。しかし
 六 るべければなり。⁶⁾ 我はわが民に対して怒り、わが嗣産を流して⁵⁾ 之を
 五 その名を万軍の主、イスラエルの聖なる者と称え給う。⁴⁾ 黙して坐れ、暗
 四 見ゆべし。我仇を報いんに、人の我に抗う者なからん。⁴⁾ 我等の贖主は
 三 を出し、脛を見せて河川を渡れ。³⁾ 汝の隠所は露れ、汝の恥すべき所は
 二 なかるべければなり。²⁾ 磨臼を取りて粉を磨け。汝のかくし所を露し、肩
 一 ルデア人の娘には玉座なし、そは汝最早女々しく気弱しと²⁾ 称はるること

で勝つばかり
 で負けたこと
 のない強国。
 2) バビロンは
 いわば「女々
 しく気弱に育
 てられた」姫
 君のようなも
 の。— 3) 奴隷
 にまで落ちぶ
 れた捕虜のよ
 う。— 4) 翁三
 ・五。— 5) その
 聖なる資格を
 当分失つたも
 のとして。
 6) 黙一八・七。

一〇 事、図りなくも一日の中に汝に來らん。汝の魔術の多きに由り、汝の呪詛師の
 太く頑固なるに由り、是等すべて汝の上に来れり。一〇。しかも汝は己が悪意に
 依頼みて云えり、我を見る者はあらず、と。汝の智慧と汝の知識とは、汝を
 欺きたり。汝は己が心の中に、「ただ我あるのみ。我を除きて他に何者もあら
 ず」と云えり。一一。禍汝の上に来らん、しかも汝その起るを知らざるべし。惨害
 汝を襲わん、しかも汝之を回復すること能わざるなり。汝の知らざる艱難俄に
 汝に臨まん、一二。汝の呪詛師等をもて、汝の若き時より携わりたる多くの魔術を
 もて、立ち向かえ。それによりて汝に何か益する所ありや、汝の力を増すこと
 を得べくんば、然せよ。一三。汝は己が策謀⁸⁾の多きによりて疲れたり。いざ天を
 相する者、星を觀ずる者、月を数うる者は、かかるものにより汝に來るべきこ
 とを告げん為に、起ちて汝を救えかし。一四。見よ、彼等は藁の如くなりて、火之
 を燃せり。その焰の勢より己が生命を免れしむること能わじ。そは身を温む
 べき炭火にもあらず、また向かいて坐るべき炉火にもあらざるなり。一五。汝が

7) 本五
 一・一
 九。
 8) 魔術
 など。

携わりたる所はすべて汝の為にかくの如くなるべし。汝の若き時より汝と取引したる者等は、いずれも皆己が道を彷徨い行きて、⁹⁾ 汝を救うべき者なし。

第四十八章

ユデア人の頑迷に対する主の譴責

一 汝等^{なんじら}是等^{これら}の事を聴^きけ、ヤコブの家^{いえ}よ。汝等^{なんじら}はイスラエルの名^なを以て称^よばれ、ユダの嫡流^{たがれ}より出^いで、主^{しゅ}の御名^{みな}によりて誓^{ちか}い、イスラエルの天主^{てんしゅ}を記憶^{きおく}す。されど真実^{まこと}によらず正義^{せいぎ}によらざるなり。二 それ、彼等^{かれら}は聖なる都^{みやこ}の民^{たみ}と自称^{みずからしやう}し、イスラエルの天主^{てんしゅ}に依^{より}頼^{たの}みたり。万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}とはその御名^{みな}なり。三 曩^{さき}の事^{こと}は、我^{われ}既に之^{これ}を告^つげたり。そはわが口^{くち}より出^いで、我^{われ}之^{これ}を聞^きかしめたり。我^{われ}俄^はに行^いいて、その事^{こと}起^{おこ}りぬ。四 実に我^{われ}は汝^{なんじ}が頑固^{くな}にして、汝^{なんじ}の頸^{うな}は鉄^{てつ}の筋金^{すじがね}、汝^{なんじ}の額^{ひたい}は青銅^{からかね}なることを知^しれり。五 我^{われ}はかの時^{とき}より汝^{なんじ}に予言^{よげん}し、その来^{きた}るに先^{さき}立ちて汝^{なんじ}に示^{しめ}したり、そは汝^{なんじ}が、

9) 危険が迫ると逃げてしまつて

第四十八章

1) 特にエジプトを脱出して聖地カナアンを領するに至つた時の事柄をさすらしい。

わが神像^{しんぞう}之^{これ}をなせり、わが彫^{きざ}みたる物^{もの}鑄^い造^なしたる物^{もの}之^{これ}を命^{めい}じたり、と言^いわざらんためなり。²⁾ 六 汝^{なんじ}の聞^ききたる所^{ところ}を、悉^{ことごと}く見^みよ。されど汝^{なんじら}等^{これ}は之^{これ}を告^つげたりや。我^{われ}は今^{いま}より新^{あた}しき事^{こと}を汝^{なんじ}に聞^きかせん、なお汝^{なんじ}の知^しらざる事^{こと}秘^ひめられてあるなり。 七 是^{これら}等^{こと}の事^{こと}の創^{そう}造^{ぞう}せられたるは只^{ただいま}今^{いま}にして往^{いにしえ}時^{とき}よりにあらず、しかして汝^{なんじ}この目^ひの前^{まえ}には之^{これ}を聞^きかざりき。そは汝^{なんじ}が、見^みよ、我^{われ}之^{これ}を知^しれり、と言^いわざらんためなり。 八 汝^{なんじ}は聞^きかずして、知^しらざりき。汝^{なんじ}の耳^{みみ}も彼^{かの}時^{とき}より開^{ひら}けいたるには非^{あら}ず。実^げに我^{われ}は汝^{なんじ}が邪^{よこしま}曲^{よこしま}に邪^{よこしま}曲^{よこしま}を累^{かさ}ぬべき事^{こと}を知^しる、されば我^{われ}汝^{なんじ}を胎^{たい}内^{ない}にある時^{とき}よりして違^{そむ}背^く者^{もの}と称^よべり。 九 我^{われ}はわが名^なの為^{ため}にわが激^{いかり}怒^どを遠^{とお}ざけ、わが讚^{さん}美^びの為^{ため}に汝^{なんじ}を手^た綱^{づな}もて制^{ひきと}止め、滅^{ほろび}亡^びに至^{いた}らしめじ。 一〇 見^みよ、我^{われ}は汝^{なんじ}を精^{せい}鍊^{れん}せり。されど銀^{ぎん}の如^{ごと}くにはあらず。我^{われ}は汝^{なんじ}を貧^{ひん}窮^{きゆう}の爐^ろにて吹^ふき分^わけたり。 二 わが為^{ため}に、わが為^{ため}にこそ、我^{われ}之^{これ}をなさめ。即^{すなわ}ち我^{われ}罵^{のの}られじとなり。 我^{われ}はわが光^{さか}榮^えを他^たの者^{もの}に与^{あた}えざるべし。³⁾ 一三 我^{われ}に聴^きけ、わが召^よぶ⁴⁾ヤ コブよ、イスラエルよ、我^{われ}はかの者^{もの}なり、我^{われ}は始^{はじめ}なり、我^{われ}は終^{おわり}なり。⁵⁾ 一三 わ

2) 天主は 前の御約 束を果た し給うた ように、 新しきそ れをも果 たし給う であらう 3) 本四二 ・八。 4) 天主の 御民とす るために 5) 本四一 ・四。四 四・六。 黙一・八、

一四 手がまた地を押据え、わが右の手は諸天を測りたり。我是を呼ばんに、そ
 は共に立つべし。一四 汝等みな、集まりて聴け、彼等の中誰か是等の事を告げ
 たりや。主は彼⁶⁾を愛し給えり、その御旨をバビロンになし給わん、その御
 腕はカルデアに下らん。一五 我こそ、我こそ語り、彼を召び、彼を来らしめた
 るなれ。その道は直くせられたり。一六 汝等わが許に近づきて之を聴け。我は
 太初より密かには語らざりき。その行われざる前の時より、我は彼処にあり
 しが、今主なる天主とその霊、我を遣し給えり。一七 汝の贖主、イスラエ
 ルの聖なる者にて在す主、かく云い給う。我は主なり、汝の天主なり、汝に
 益ある事を教え、汝をその歩む道に拠りて導く。一八 願わしきは、汝わが誠命
 に意を留め、汝の平安河の如く、汝の正義海の波の如く、一九 汝の裔は真砂の
 如く、汝の胎の生みなす者は礫の如くなり、その名わが面前より滅ぼされず、
 抹されざらんこと是なり。二〇 汝等バビロンより出で、カルデア人の許より遁
 れ来り、歡呼の声もて告げよかし。之を聞かせ、之を地の極までも伝えて云

一七。二
 二・一三。
 6) キルス
 7) イザヤ
 はここで
 自分の預
 言者であ
 ることを
 言う。

二 え、主^{しゆ}その下僕^{しもべ}ヤコブを贖^{あがな}い給^{たま}えり、と。⁸⁾ 三 その彼等^{かれら}を導^{みちび}き出^{いだ}し給^{たま}える時^{とき}、彼等^{かれら}は荒野^{あれの}にても渴^{かわ}きしことあらざりき。すなわち主^{しゆ}彼等^{かれら}の爲^{ため}に岩^{いわ}より水^{みづ}を出^{いだ}し給^{たま}えるにて、岩^{いわ}を裂^さき給^{たま}いしに、水流^{みづなが}れ出^いでたるなり。⁹⁾ 三三 不敬^{ふけい}なる者^{もの}には平安^{へいあん}なし、と主^{しゆ}云^い給^{たま}う。¹⁰⁾

8) 耶五一・六。
9) 出一七・六。民二〇・一一。――10) 本五七・二一。

第四十九章

メシアは異邦人をも救い給う

一 島々^{しまじま}よ、¹⁾ 聴^きけ、遠方^{とほく}の民^{たみ}よ、注意^{ちゆうい}を払^{はら}え。主^{しゆ}は胎内^{たいない}より我^{われ}²⁾を召^めし給^{たま}い、わが母^{はは}の懷^{ふところ}にありし時^{とき}よりわが名^なを御心^{みこころ}に留^{とど}め給^{たま}えり。³⁾
二 かくてわが口^{くち}を鋭^すき劍^{つるぎ}の如^{ごと}くにし、御手^{おんて}の蔭^{かげ}に我^{われ}を庇^{かば}い、我^{われ}を選^よりすぐりたる矢^やの如^{ごと}くにして、その簾^{えがら}に我^{われ}を隠^{かく}し給^{たま}えり。^三 しかして我^{われ}に曰^{のたま}いけるは、イスラエル^{いすらえ}よ、⁴⁾ 汝^{なんじ}はわが下僕^{しもべ}なり。実^げに我^{われ}汝^{なんじ}によりて光榮^{さかえ}を受^うけん、と。^四 我^{われ}云^いけらく、我^{われ}効^{こう}なきに勞^{ろう}し、故^{ゆえ}なく徒^{あだ}にわが力^{ちから}を費^つやしたり、と。さればわが審判^{さばき}は主^{しゆ}にぞある、

第四十九章

1) 本四

一・一参照。――2) 以

下の記事にあるこの

天主の僕とは、本四

二・一一一二にある

喩からわかる通り、

メシアである。

3) 耶一・五。加一・

一五。――4) イスラエ

五 わが事業はわが天主にぞある。⁵⁾ 我を胎内より御下僕とし
て造り、以てヤコブを御許に導き返さしめんとし給いし主、
今、云い給う。但しイスラエルは集められざるべし。⁶⁾ さ
れど我は主の御眼に榮ある者となり、わが天主はわが力と
なり給えり。^六 即ち曰えらく、汝がヤコブの族を興しイス
ラエルの残滓を立歸らしめんとて、わが為下僕となるは、
小さき事なり。見よ、我は汝を異邦人の光となしたり、さ
れば汝地の極までもわが救いとなるべし。⁷⁾ 主、イスラエ
ルの贖主、その聖なる者は、賤しめらるる者、憎まるる国
民、主君の下僕⁸⁾ に向かいてかく云い給う。王等は見、侯
等は起ちて、信実にて在すによりて主の為に、汝を選び給
える聖なる者の為に、礼拝せん。主はかく云い給う。我
は宜しと認めたる時に汝に應え、救済の日に汝を助け、汝

ルから生まれ出た者。—⁵⁾ メシ
アはその事業が一見失敗の汚辱
に塗れたように見えるだけに、
一層大なる光榮を受ける。
⁶⁾ イスラエルはバビロンから帰
つて後も、政治的に独立した民
族とはしないが。—⁷⁾ 路二・三
二でシメオンも、メシアは異邦
人を照らす光とならんと予言し
ているが、同様にこれも異教の
人々が聖教に召されるといふ予
言。—本四二・六。徒一三・四
七。—⁸⁾ これをメシアと見る人
もあればイスラエル民族と見る
人もあり、まだ救いに与つてい
ない人々と見る人もある。

九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
を守り、汝を民の契約としたり、それは汝が地を興し、荒れ果てたる嗣業を領せんため、縛められたる者に、出よ、と云い、暗黒におる者に、現れよ、と云わんためなり。かくて彼等は道にて草を喰まん、その牧場は到る処の野にあるべし。一〇 彼等は飢うることなく、渇くことなく、また炎熱も太陽も彼等を打つことなからん。それは彼等を憐み給う者、その牧者となり、泉の辺にて之に飲ましめ給うべければなり。9) 二 我はわが山をすべて道となさん、わが径は高くせらるべし。二三 見よ、この者等は遠方より来らん。また見よ、かの者等は北より、海より来り、この者等は南の国¹⁰⁾より来らん。二三 諸天よ、讃めよ、地よ、頌えよ。山々よ、讚美し歡呼せよ。それは主御民を慰め給いたればなり、彼その貧しき者を憐み給うべし。一四 然れどもシオンは云えり、主我を棄て給えり、主我を忘れ給えり、と。一五 女豈その幼児を忘れて、己が胎の子を憐まざるまでに至ることを得んや。たといその忘るることあらんとも、我の汝を忘るることばあらず。一六 見よ、我わが手の中に、汝を録したり、							

9) 黙七・

一六。

10) ヘブレ

オ語本

「シニム

の地」。

これはパ

レステナ

の東にあ

る不詳の

地。ある

人々は中

国と考え

ている。

一七 汝の石垣は常にわが眼の前にあり。一七 汝を築く者は来れり、汝を毀ち荒らす者は
 汝の許より出さるべし。一八 汝の眼をあけて見廻せ、是等の者みな集りて汝の
 許に來れり。我は活く、と主云い給う。汝はすべて是等を裝飾品の如く着け、
 花嫁の如くそを身のまわりに佩びん。一九 それ、汝の荒野、汝の見棄てし処、
 汝の廢墟となりし地は、今や住む人々によりて狭くなるべく、汝を吞みたる者は
 遠く逃げ去るべし。二〇 汝の不妊と見えし時の子等は、なお汝の耳許にて云わ
 ん、この処はわが為に狭し。わが住むべき余地を作れかし、と。二一 時に汝心
 の中にて云わん、是等の者を生みたるは誰ぞ。我は不妊にして産まず、引き行
 かれて俘われいたり。是等を育てたるは誰ぞ。我は棄てられて独り居れり。是
 等は何処にか居りし。三三 主なる天主かく云い給う、見よ、我異邦人に向かいて
 わが手を挙げ、民の為にわが旗を立てん。彼等はその腕に汝の子等を抱き、そ
 の肩に汝の娘等を負いて来るべし。三三 王等は汝の養父となり、后等は汝の乳母
 とならん。彼等は顔を地に伏せて汝を崇め、汝の足の塵を舐むべし。かくて汝

二四 は我が主に^{われしゆ}して、わが許^{もと}にては之^{これ}を待望^{まちのぞ}む人々の滅^{ほろ}びざるべきことを知る^しに至^{いた}らん。二四 豈^{あに}勇士^{ゆうし}より分捕物^{ぶんとりもの}を取返^{とりかえ}すべけんや。また剛^{ごう}の者^{もの}より捕虜^{とりこ}等を救^{すく}い出^{いだ}すことを得^えんや。二五 されど主^{しゆ}はかく云^いい給^{たま}う。実^けに、勇士^{ゆうし}よりさえ捕虜^{とりこ}等取返^{とりかえ}され、剛^{ごう}の者^{もの}よりさえ奪^{うば}われたるもの救^{すく}い出^{いだ}さるべし。しかして汝^{なんじ}を裁^{さば}きたる者^{もの}等を我^{われ}裁^{さば}き、汝^{なんじ}の子^こ等を我^{われ}救^{すく}わん。二六 我^{われ}汝^{なんじ}の敵^{てき}等にその肉^{にく}を食^{くら}わしめん。12) 彼^{かれ}等はまた新^{あたら}しき葡萄酒^{ぶどうしゆ}に酔^よう如^{ごと}く己^{おの}が血^ちに酔^ようべし。かくてすべての肉^{ひと}、我^{われ}が主^{しゆ}にして汝^{なんじ}を救^{すく}う者^{もの}、汝^{なんじ}の贖^{あがない}主^{ぬし}にしてヤコブの大能^{ちから}ある者^{もの}なることを知る^しに至^{いた}らん。

12) イスラエルの敵が内部の分裂抗争で衰え滅びてしまふようにする

第五十章

イスラエルの民の不従順—メシアの贖い

一 主^{しゆ}かく云^いい給^{たま}う、我^{われ}が与^{あた}えて汝^{なんじ}等の母^{はは}を出^{いだ}したるか^の離縁^{りえん}状^{じよう}は何^いれぞ。1) また我^{われ}が汝^{なんじ}等を売渡^{うりわた}したるわが債権^{さいけん}者^{しや}は誰^{たれ}ぞ。見^みよ、汝^{なんじ}等^らが売^うられたるは汝^{なんじ}等の不義^{ふぎ}の為^{ため}、我^{われ}が汝^{なんじ}等の母^{はは}を出^{いだ}したるは汝^{なんじ}等の罪惡^{さいあく}の為^{ため}なり。二 それ、

第五十章

1) これらの言葉をもととして天主対イス

我^{われきた}来りたれども人^{ひと}あらず、我^{われよば}呼わりたれども聴^きかんとする者^{もの}なかりき。我^{われ}の贖^{あがな}うこと能^{あた}わざるほど、わが手^て短^{みじか}く、且^{かつち}小さくなりたるか。或^{ある}は我^{われ}に救^{すく}うべき力^{ちから}あらざるか。見^みよ、我^{われ}叱^{しつた}咤^たして海^{うみ}を荒^あ野^れとなし、河^{かわ}川^わを涸^からさん。魚^{うお}は水^{みづ}なきによりて腐^{くさ}り、渴^{かわ}き死^しぬべし。²⁾ 我^{われ}は暗^{くら}黒^{やみ}を天^{てん}に着^きせ、粗^{あら}麻^ぬ布^のをその覆^{おおい}とせん。⁴⁾ 主^{しゅ}は我^{われ}に雄^{ゆう}弁^{べん}なる舌^{した}を与^{あた}え給^{たま}えり、そは我^{われ}が疲^{つか}れたる者^{もの}を言^{ことば}もて支^{ささ}うるを得^えんためなり。彼^{かれ}は朝^{あさ}な朝^{あさ}なわが耳^{みみ}を側^{そば}たしめまた側^{そば}たしめ給^{たま}う、そは我^{われ}が師^しに聞^きく如^{ごと}く之^{これ}に聞^きかんためなり。⁵⁾ 主^{しゅ}なる天^{てん}主^{しゅ}はわが耳^{みみ}を開^{ひら}き給^{たま}えり。我^{われ}また抵^{さか}わらず、後^{うしろ}にも退^{さが}らざりき。⁶⁾ 我^{われ}は鞭^{むち}打^うつ者^{もの}にわが体^{からだ}を、むしる者^{もの}にわが頬^ほを委^{ゆだ}ね、我^{われ}を罵^{のの}る者^{もの}、我^{われ}に唾^{つば}する者^{もの}にわが面^{おもて}を背^{そむ}向^むけざりき。⁷⁾ 主^{しゅ}なる天^{てん}主^{しゅ}ぞわが援^{たす}助^け者^{もの}にて在^まし。我^{われ}この故^{ゆえ}に狼^{ろう}狽^たえず、この故^{ゆえ}にわが面^{おもて}をいと固^{かた}き岩^{いわ}の如^{ごと}くになしたり、我^{われ}はわが敗^{やぶ}れざるべきを知る。⁸⁾ 我^{われ}を義^ぎとし給^{たま}う者^{もの}近^{まし}く在^ます。誰^{たれ}か我^{われ}と争^{あらそ}わんや。我^{われ}等^らいざ共^{とも}に立^たたん。わが対^{あいて}手^{たれ}は誰^{たれ}ぞ。その人^{ひと}我^{われ}に近^{ちか}づき来^{きた}れ。⁹⁾ 視^みよ、主^{しゅ}な

ラエルの関係を夫婦仲に譬える。これは本四九・一四のイスラエルの苦情に対する天主のお答この夫婦の契りを破つたのは我ではなく神々を祀つたイスラエルである。

2) 本五九・一。
3) 羅八・三三。

一〇 天主てんしゆぞわが祐助者たすけてにて在まします。我われを罪つみに定めんとする者ものは誰たれぞ。視みよ、かかる者等ものどもは皆みな衣服ころもの如ごとく破やぶれ、蟲之しみこれを喰くらわん。一〇 汝等なんじらの中主うちしゆを畏おそる者もの、その下僕しもべの聲こえを聴きく者ものは誰たれぞ。暗黒くらやみを歩あゆみて躬みに光明ひかりなき者ものは、主しゆの御名みなに希望のぞみを繫かけ、己おのが天主てんしゆに依頼よりたのめかし。二見みよ、汝等なんじらすべて火ひを燃もやし焰ほのおを帯おびたる者ものよ、汝等なんじらの火ひの光ひかりの中なか、汝等なんじらの燃もやしたる焰ほのおの中なかを歩あゆめ。わが手てによりて汝等なんじらのためにかくなしたり、汝等なんじら悲嘆かなしみの中うちに眠ねむるべし。

第五十一章

与えらるべき救い——イエルサレムの恥辱の除去

一 我われに聴きけ、義ただしきに従したがひ、主しゆを求もとむる者ものよ。
 汝等なんじらが切り出いだされたる岩いわと、汝等なんじらが掘ほり出いだされたる洞うつろなす穴あなと、
 二 汝等なんじらの父ちちアブラハムと、汝等なんじらを産うみしサラとに思おもひを致いたせ。我われは彼独かれひとりを召めして、之これを祝しゆくし、之これを殖ふや

第五十一章 一) アブラハム。——二) サラ。「希望すべくもあらざるに」(羅四・一八)、アブラハムと長い間子のなかつたサラとが、天主の御摂理によつて大民族の太祖となつた事實は、それに劣らず驚嘆すべき将来のイスラエル復興を保証する。

三 したるなり。三されば主はシオンを慰め、またその廢墟を悉く慰め、その
 荒れたる野を歡樂の所の如く、その寂しき原を主の庭の如くなし給わん。
 四 中には喜びと樂しみと、感謝と、讚美の声とあるべし。我に意を留
 めよ、わが民よ。わが眷族よ、我に聴け。そは我より律法出で、わが定
 五 め国々の民に光として臨むべければなり。わが義しき者は近づけり、わ
 が救う者は出でたり。わが腕は民を裁かん。3) 島々4) は我を待望み、わが
 六 腕に依繼るべし。汝等の眼を翹げて天を望み、俯して下なる地を瞰よ。
 それ、天は煙の如く消え、地は衣服の如く弊え、その住民等も之と同じく
 滅びん、されどわが救済は恒久に存し、わが正義は失せ去ることなかるべ
 七 し。6) 我に聴け、汝等義しきを知る者よ、その心にわが律法を奉じおるわ
 八 が民よ。7) 人々の侮辱を恐るるなかれ、その罵倒に臆するなかれ。八 実に、
 蛆、彼等を衣服の如く喰い、蠱、之を羊毛の如く蝕み尽さん。されどわが
 九 救済は恒久に、わが正義は千代に八千代に存すべきなり。九 挙げ、挙げ、

3) この裁きは即ちキルスのアツシリア人に対する勝利に對する勝利
 4) 本四一・一及び四九・一参照。――5) 腕とは天主が事を行い給う強大な御力。
 6) 詩三六・三九。――7) 一節参照。イスラエルの信心深い人々への呼びかけ。

力を着けよ、主の御腕よ。昔日における如く、古代における如く拳が れ。汝は傲れる者⁸⁾を撃ち、龍⁹⁾を傷つけたるにあらずや。○汝は海 を、深き淵の水を、乾し、海の深き処を、救われたる人々の通るべき 道となしたるにあらずや。¹⁰⁾ 二されば今、主に贖われたる人々、讃め 歌いつつシオンに帰り来らん。¹¹⁾ その頭には常世の福楽輝き、彼等歡 喜と悦樂とを獲て、悲しみと嘆きとは逃げ去るべし。二三我こそ、この 我こそ、汝等を慰むべけれ。汝何者なれば、死すべき人を恐れ、草の 如く枯るべき人の子を恐るるぞ。二三しかも汝は己が造主なる主、即ち 天を敷き展べ、地を押し据え給いし者を忘れ果て、汝を責め悩まして 將に汝を亡ぼさんとしたる者の激怒に面するを、常に終日恐れたるな り。その責め悩ましたる者の激怒今何処にありや。一四進みて解放に当 り給う者¹²⁾は速かに来り給わん。彼殺し給うとも、全滅には至らしめ 給わじ。¹³⁾ その糧は乏しきことなかるべし。一五我は主にして汝の天主、						
⁸⁾ヘブレオ語本「ラハブ」。死の天使と紅海における溺死とで、大損害を蒙つたエジプト。――⁹⁾エジプトの象徴である鱈。 ¹⁰⁾紅海通過をさす――出一四・二一。 ¹¹⁾この数行はほとんど本三五・一〇の言葉そのままの反復。――¹²⁾救主。 ¹³⁾捕虜たちを救い給うであろう。本四二・七参照。						

海を騒がせ、その涛を立たしむる者なり。万軍の主とはわが名にこそ。

一六 われ 我はわが言を汝の口に授け、わが手の蔭に汝を庇いたり。されば汝天を

植え、地を据え、シオンに向かいて、汝はわが民なり、と云うを得べし。14)

一七 起きよ、起きよ、立ち上れ、イエルサレムよ。汝は主の御手よりその御

怒の爵15)を飲み。熟睡の爵の底まで飲み。その滓渣までも飲みほ

せり。一八 その生みしすべての子等の中にも、之を支うべき者なく、その育

てしすべての子等の中にも、その手を執る者なし。一九 汝に起りたる二つの

事あり。誰か汝の為に悲しむべき。荒廃と破壊と、饑饉と剣と。誰か汝を

慰むべき。16) 二〇 汝の子等は投出されて、畏にかかれる羚羊の如く、主の御

憤り、汝の天主の御咎めに満たされてすべての街の頭に眠れり。二一 され

ば是を聴け、貧しく小さき者と、葡萄酒によらずして17) 酔いたる者よ。

二三 汝の君なる主、御民の為に戦い給うべき汝の天主、かく云い給う、見よ

我汝の手より、熟睡の爵わが義憤の爵の底深きを取り去れり。累ねて

14) 本四九・二。

15) 御怒りの杯

とは、御怒り

の天主が罪を

犯した民に飲

ませ給うひと

い辛苦艱難を

譬えたもの。

16) 本四七・九。

17) 天主の御怒

りの杯によつ

て。

二三 また汝の之を飲むことあらじ。二三却つて我汝を辱しめたる者等の手に之を置かん、彼等は曾て汝の靈魂に云えり、屈め、我等踏み通らん、と。その時汝その身を地の如く、通り行く者の道の如くになしたり。18)

18) 首を踏みつけたり人を踏んで通つたりするのは、征服のしるしであつた。

第五十二章

御民の捕囚よりの帰還

一 起きよ、起きよ、シオンよ、汝の力を着けよ。聖なる者の都イエ
ルサレムよ、汝の榮の衣服を着けよ。そは累ねてまた、割礼を受け
ざる者や汚れたる者¹⁾の汝を過ぐることなかるべければなり。二 塵
を払い、起きて坐れ、イエルサレムよ。汝の頸の絆を解け、捕われ
たる娘^三シオンよ。三 そは主かく云い給えばなり、汝等は無代にて売
られたり、されば金錢なくして贖われん、と。四 それ、主なる天主
はかく云い給う、わが民は初めエジプトに下り行きて、彼処に住い

第五十二章 1) レヴイ人に対する規定の汚れた者は犠牲に列席することなどから除外された。

五 しが、アツシリア人は全く故なきに之を虐げたり。²⁾ 主曰わく、かくわが民は故なきに引き去られしかば、我今ここに何をかなさん。主曰わく彼等の支配者等は不義を行いて、わが名は絶えず終日流されたり。³⁾ 六 この故にわが民はその日わが名を知るに至らん。実に、語りしはこの我なり、見よ、我此に在り。⁷⁾ 平安を告げ且説く者、福音を告ぐる者、救拯を説く者、⁴⁾ シオンに向かい「汝の天主統治し給わん」と云う者の足は、山々の上にありて如何ばかり美しきぞ。⁸⁾ 汝の見張の者の声す。彼等は声をあげたり、諸共に讃美せん。⁵⁾ 実に彼等主のシオンを回復し給わん時、眼と眼とを見合すべし。⁹⁾ イエルサレムの荒野よ、挙りて喜び讃えよ、そは主御民を慰め、イエルサレムを贖い給いたればなり。¹⁰⁾ 主は万の国民の眼前にその聖なる御腕を備え給えり、地の極悉く我等の天主の御救済を見ん。⁶⁾ 二 汝等退け、退け、彼処より出で来れ、汚れたるものに触るるなかれ、その中より出で来れ。汝等主の器を携うる者よ、

2) 創四六・六。
3) 羅二・二四。
4) この使者達は民の解放の成就を告げるためベビロシから来る聖パウロは羅一〇・一五で、このくだりを福音の宣布に適用している。——5) 彼らは言わば使者達の厳かな行列を遠くから見ているようなもの
6) 詩九七・三。

二三

潔くなれ。〇) 夫れ、汝等は騒ぎて出べからず、ま

た逃走りて急ぐべからず、蓋は主汝等の先頭に行き、

イスラエルの天主汝等を集め給うべければなり。8)

二三

見よ、わが下僕9)は曉る所あらん。向上し、卓越

一四

し、甚だ高きに至るべし。一四)曾て多くの者汝に驚き

たる如く、その面影は人々の間にて、その容姿は

一五

人の子等の間にて、榮えざるに至らん。10) 一五)彼は数

多の国人に淮がん、11) 王等は彼に向かいて口を閉じ

ん、12)そは彼のことを語り伝えられざりし者等は見、

聞きたることなかりし者等は眺めたればなり。13)

第五十三章

メシア受難の予言

一 我等に聞ける所し、を信じたる者は誰ぞ。主の御

イザヤ書 第五十二章 一二—第五十三章 一

7) 帰国する捕虜達は聖殿の聖具を持ち
帰つたが、これを運ぶにはレヴィ人に
対する規定の清さが必要であつた。—
哥後六・一七。—8) ヘブレオ語本「イ
スラエルの天主は汝等のしんがりとな
り給う」。—9) メシア。—10) イスラエル
民族の没落は、多くの人の驚きの的と
なつた程にひどかつたが、そのように
メシアも卑しめられ、御民の罪と同じ
く恥辱をも担い給うであらう。—11) 灌
祭は犠祭の一部。それでここでは犠牲
としてのメシア、即ちすべての民の司
祭。—12) 畏敬の印。—13) 羅一五・二一。

第五十三章 1) ヴルガタの *audiu* 「聞

腕²⁾は誰にか顯れたる。三 彼はその御前に嫩枝の如く、また乾ける地⁸⁾より露出する根の如く、生い立たん。彼には眉目のよきも、美しきもなし。我等彼を見たりしが、何の見映もなかりしかば、彼を慕うことなかりき。三 彼は蔑まれ、人々の中に最も下賤とせらるる者、悲哀の人にして、痛苦を知る者なり。その顔は覆われたるが如し。四 彼蔑まれたれば、我等之を重んぜざりき。五 実に彼は我等の病弱を負い、我等の苦しみを担えり。六 然るに我等は彼を癩病者の如く、天主に打ちひしがれたる者の如く、思いたり。五 さりながら彼は我等の不義ゆえに傷つけられ、我等の罪惡ゆえに打碎かれたるなり。我等を安からしめん為に⁷⁾懲罰は彼の上に下り、その打疵によりて我等は癒されたり。六 我等は皆羊の如くさまよいて、いずれも己が道を辿りつつ離れ行きぬ。かくて主我等一同の不義を彼に負

ける所」とは、メシアの御苦難に関する預言。
2) 天主の御業。――3) 乾ける地とは、ダヴィド家の光榮の衰えた有様。本一・一参照。――4) ヘブレオ語本「その前にては人が顔を蔽う者の如く」。
5) 可九・一一。――6) メシアが償いのために身代りとなつて苦しむことは、本章に何度も繰り返されるが、これがその最初の記述。――7) 安からしめることはメシアの救いの効果。――8) 哥前一五・三。

強き者の獲物を分ち取るべし。¹⁵⁾ それは彼己が靈魂を死に付し、最悪しき者と共に数えられて、多くの人の罪を負い、違背者の為に祈りたればなり。¹⁶⁾

第五十四章

メシアの国に関する予言

一 讃えよ、汝妊まず産まざる者よ。¹⁾ 頌歌唱いて喜び叫べ、汝分娩したることなき者よ。それは見棄てられたる者却つて一人の夫を有てる者よりも、子等多ければなり、と主云い給う。²⁾ 汝の天幕の場を広くし、汝の幕屋の皮革を拡げよ。客むべからず。汝の縄を長くし、汝の杭を堅くせよ。³⁾ 蓋は汝右にも左にも押し進みて、汝の裔は異邦人等を受け継ぎて、荒れたる諸市に住むべければなり。⁴⁾ 恐るるなかれ、そは汝狼狽して赤面することなか

¹⁵⁾ かれは苦しみによつて、戦争の大英雄の如く、すばらしい分捕物を貰うであらう。――¹⁶⁾ 可一五・二八。路二二・三七。二三・三四。

第五十四章

一) 子のない者とはシオンのこと。なぜならこの町にはイスラエル人のバビロン捕囚の間住民がいなかつたから。――²⁾ 異教の人々が「天主の御国に」入ると(二節)、イスラエルに「子どもが恵まれる」わけである。これは大昔からかれに約束されていたことであつた。――路二三・二九。加四・二七参照。

五 らん。蓋し汝は恥辱を蒙ることあらじ、そは汝、己が若き時の恥³⁾を
 忘れ、己が寡婦たりし時の侮辱⁴⁾を最早心に留めざるべければなり。
 五 それ、汝を造り給いし者汝を治め給わん、万軍の主とはその御名な
 り。汝の贖主はイスラエルの聖なる者にして、全地の天主と称えら
 六 れ給うべし。⁵⁾ 六 主は汝をば、棄てられて心に嘆かう女の如く、若き時
 より離縁せられたりし妻の如く、召び給えり、と汝の天主曰いぬ。
 七 我は少時の間汝を棄てたり。されど大なる憐憫もて汝を召集えん。
 八 義憤の時には我少時の間わが面を汝に隠したり、されど恒久の慈悲
 九 もて汝を憐めり、と汝の贖主なる主曰いぬ。九 我にとりてはこの事
 ノエの目におけるが如し。我は地上に最早ノエの洪水を来らしめじと
 誓い、かくて汝に対して怒らず、汝を責めざるべきことを誓いたるな
 一〇 り。⁶⁾ 一〇 実に山々は揺ぎ、丘々は震うことあらん、されどわが憐憫は
 汝を離れず、わが平安の契約は動かざるべし、と汝を憐み給う主曰い

3) 御民は「若き時」
 エジプトで恥かし
 い奴隷の境涯に落
 ちた。出一六・六
 ○参照。―4) この
 「やもめの時」と
 は、バビロンへの
 流寓時代。一節後
 半参照。―5) 路一
 ・三二。―6) ノエ
 との和陸の誓いの
 ような、新しい契
 約。―創九・一五。

二 ぬ。二暴風に吹き廻され、⁷⁾ 慰安なき、小さき者よ、見よ、我汝の石
 三 を排置き、青玉を汝の基となし、⁸⁾ 碧玉もて汝の砦を、彫める石も
 三 汝の門を、また好ましき石もて汝の四方の境界を作らん。⁹⁾ 三汝の子
 四 等は皆主より教わり、汝の子等の平安は大なるべし。¹⁰⁾ 汝は正義を基
 とせん。虐げより遠ざかれ、最早汝の懼ゆることあらざるべければな
 り。恐怖より遠ざかれ、最早その汝に近づくことあらざるべければな
 一五 り。一五見よ、我と共におらざりし住民⁸⁾ 来らん、前に汝にとりて他所
 一六 人たりし者汝に加わるに至らん。¹¹⁾ 一六見よ、炭火を吹きおこして己が仕
 一七 事の道具を持出す鍛冶匠を創造したるは我なり、また殺し滅ぼす者を
 創造したるも我なり。⁹⁾ 一七汝を討たんとて作られたる武器はすべて効
 なく、審判に臨みて汝に抗い争う舌はいずれも汝の罪する所となるべ
 し。是、主の下僕等の嗣ぐべき資産にして、彼等の正義¹⁰⁾ はわが許に
 あり、と主云い給う。

7) イエルサレムがカルデア人に滅ぼされる前後の大患難を譬えたもの。
 8) 真の神に帰依してイエルサレムの市民権を獲得する異教の人々。
 9) 武器を鍛える鍛冶屋も、それを携える軍人も、天主に造られた者であるから、その御力の下にあり、新しい天主の都市を害うことは出来ない
 10) 御祝福。

第五十五章

メシアを信ずる者には豊かなる恵みを与ふべし

一 汝等渴ける者よ、みな水¹⁾の所に来れ。汝等金錢なき者よ、急ぎ
 購買^{あがな}て食せよ。来れ、金錢を出さず、何の代価^{あた}も出さずして、葡萄
 酒と乳とを買え。²⁾ 二 汝等何故に糧^{かて}にもならざるものに金錢を費や
 し、満足をも与えざるものに己^{おの}が勞力を費やすや。我に聴け、聴け、
 しかして佳物^{よきもの}を食せよ、さらば汝等の靈魂はその豊^{ゆた}かなるによりて
 樂^{たの}しむことを得ん。 三 汝等の耳^{みみ}を傾けて、わが許^{もと}に來れ。聴け、さ
 らば汝等の靈魂は活^いくべし。また我汝等と恒久^{とこしえ}の契約^{けいやく}を結び、ダヴ
 イドへの恵^{めぐ}みを確^{かた}く守らん。³⁾ 四 見よ、我彼^{われかれ}を立^たてて諸民^{しよみん}の証^{あかし}とし、
 異邦人等に指導^{しどう}と教訓^{きょうくん}とを与^{あた}うる者となしたり。 五 見よ、汝は知ら
 ざる国民^{くにたみ}を召^よぶべし。汝を知らざりし国々の民は汝の許^{もと}に馳^はせ來ら
 ん、そは主汝^{しゅなんじ}の天主^{てんしゅ}の爲^{ため}、イスラエルの聖^{せい}なる者の爲^{ため}にして、主汝^{しゅなんじ}

第五十五章 1) メシ

アの救いの賜物。

2) 集五一・三三。默

二二・一七。— 3) 天

主が結ばうとし給う

永遠の契約は、ナタ

ンの予言(母下七・

一六)の実現という

ことであるが、これ

は最後にメシアによ

つて果たされる。

4) メシアの前表たる

ダヴィド。

六 六に榮あらしめ給いたればなり。六汝等見出し得る間に、主を探ね求めよ。その
 七 近く在す間に之を呼び奉れ。七不敬なる者はその道を離れ、不義なる人はその
 八 思念を棄て、⁵⁾ 主の御許に立歸れ、さらば彼之を憐み給わん。我等の天主に立
 九 歸れ。そは寛大に在して、赦免を与え給えばなり。八蓋しわが思念は汝等の思
 念にあらず、わが道は汝等の道にあらず、と主云い給う。九そは天の地より高
 一〇 きが如く、わが道も汝等の道より高く、わが思念も汝等の思念より高ければな
 二 り。一〇また雨や雪の天より降りて、再び彼処に歸らず、地に満ち、之に浸潤り
 三 て、芽生えしめ、播く者に種を、食する者に糧を与うるが如く、二わが言もま
 四 た然ありて、わが口より出で、空しくわが許に歸り来らず、凡てわが欲む所を
 五 行い、わが之を遣したる目的の事をなし遂ぐべし。三それ、汝等は悦びつつ出
 六 で、安穩に導かれん。山々丘々は汝等の前にて讃歌を唱い、田園の樹木は悉
 七 く手を拍ちはやすべし。三茨の代りに縦樹生じ、葎麻の代りに桃金娘生ぜん。
 八 かくて主は取除くべからざる永遠の徴と称えられ給うべし。

5) イザ
 ヤは心
 の入れ
 かえを
 促す。

第五十六章

メシアの御国の拡大

一 主^{しゆ}かく云^いい給^{たま}う、汝^{なんじら}等定めを守^{まも}り、正義^{せいぎ}を行^{おこな}え。そは近^{ちか}くわが救^{すくい}拯^{きた}来^{きた}り、わが正義^{せいぎ}顯^{あらわ}るべければなり。¹⁾ 安息日^{あんそくじつ}を守^{まも}りて之^{これ}を流^{なが}さず、己^{おの}が手^てを控^{ひか}えていかなる惡^{あく}をもなさざること、是^{これ}を行^{おこな}う人^{ひと}、是^{これ}を奉^{ほう}ずる人^{ひと}の子^こは福^{さいわい}なるかな。^三 主^{しゆ}に附^つく異邦人^{ことくにびとら}等は語^{かた}りて云^いうべからず、主^{しゆ}我^{われ}をその御民^{みたま}より分離^{ぶんり}し給^{たま}わん、と。また閹者^{えんじや}も云^いうべからず、見^みよ、我^{われ}は枯木^{かれき}なり、と。²⁾ 4) そは主^{しゆ}閹者^{えんじや}等にかく云^いい給^{たま}えばなり、わが安息日^{あんそくじつ}を守^{まも}り、わが欲^{のぞ}む事^{こと}を選^{えら}み、わが契^{けい}約^{やく}を固^{かた}く守^{まも}らん人々^{ひとびと}は、五^五我^{われ}わが家^{いえ}の内^{うち}、わが石垣^{いしがき}の内^{うち}において、之^{これ}に処^{ところ}と、息子^{むすこ}娘^{むすめ} ³⁾ にも優^{まさ}る名^なとを与^{あた}え、且^{かつ}亡^{ほろ}ぶることなき永^{とこ}久^{しえ}の名^なを授^{さづ}けん。^六 また異邦人^{ことくにびと}の子等^{こども}にして、主^{しゆ}に附^つき、以^{もつ}て之^{これ}に仕^{つか}えその御名^{みな}を愛^{あい}し、その下僕^{しもべ}たらんと志^{こころざ}す者^{もの}、凡^{すべ}て安息日^{あんそくじつ}を守^{まも}

第五十六章 1) 智一・

一。 — 2) メシアの御国には、アンモン人やモアブ人(申二三 四—七参照)および閹者(申二三・二)の如くイスラエルの民の社会から締め出されていたような人々も、入ることを許される。 — 3) 教父達はこの箇所を、キリスト教によつて聖化された童貞を讃美するために用いている。

七
りて之を流さず、わが契約を固く守る者は、我之をわが聖なる山
に導き、⁴⁾ わが祈の家において悦ばしめん。彼等の燔祭、彼等の犠
牲はわが祭壇の上にて我に嘉せらるべし。そはわが家は万民のため
の祈の家と称ばるべければなり。ハイスラエルの散れる者を集め給
う主なる天主曰わく、我なおも彼の群をその許に集めん。⁵⁾ 九野のす
べての獣よ、⁶⁾ 森のあらゆる獣よ、来りて貪り食え。一〇その見張の
人々⁷⁾ は皆盲者なり、悉く知るなし、吠ゆること能わざる啞の犬、
空しき事を見る者、眠りては夢を好む者なり。二しかも極めて恥知
らぬ犬にして、飽くことを知らず、牧者等さえ悟ることを知らずし
て、皆己が道をさ迷い行き、上より下に至るまで、いずれも己が利
慾に駆られたり。⁸⁾ 三曰く、「いざ、我等酒を取り来りて、飽くま
で酔わん。明日もまた今日の如くにして、更に多くを重ねん。」

4) 彼らも天主のおそ
ばに來て、天主に嘉
納される犠牲を獻げ
させて貰える。
5) その御国たる公教
会は、万国万代に拡
まる。――6) 野の獣と
はイスラエル懲罰の
道具となつた異教の
民。耶一二・九、何
一三・八参照。
7) 見張の人とは予言
者のこと。ここでは
偽予言者。――8) 耶六
・一三。八・一〇。

第五十七章

ユデア人の不忠―その偶像礼拝―謙遜なる痛悔者に対する御約束

一 義しき者亡びても、心に留むる者なく、慈悲深き人
 々は、理解する者なきによりて、取去らる。実に義し
 き者は悪意の前より取去らるるなり。平安は来れか
 し、直く歩みたる者はその臥処¹⁾に休めかし。三されど
 汝等此に近づけ、巫女の子等よ、²⁾ 蕩児と娼婦との裔
 よ。³⁾ 汝等は誰に向かいて戯れたりや、誰に向かいて
 口を開き、舌を出したりや。⁴⁾ 汝等は罪惡の子等、虚
 偽の裔にあらずや。五汝等は青葉繁れるすべての樹の
 下にある神々に慰藉を求め、溪谷の中、聳だてる岩の
 下に、小児等を牲としたる者にあらずや。⁵⁾ 六汝の分
 は溪谷の部分⁶⁾にあり、是ぞ汝の籤にて獲し物なる。

第五十七章 1) 墓穴。 2) この非難

は御民がイザヤ時代にしたようにエジプト人と盟約を結ぼうとしたことをさしているが、エジプト人は魔術に夢中になつていたからかく言う。

3) 旧約聖書では、屢々偶像礼拝を姦淫に譬えるが、ここもその通り。

4) 嘲弄のしるしに。 5) 子供を人身御供にすることは、ユダで王たちの間に、殊にヒンノムの谷で行われた。

王下二三・一〇参照。 6) 主をイスラエルの分とする代りに、彼らは石像を立て、それを自分の分として礼拝した。

汝はまた之に神酒を灌ぎ、犠牲を献げたり。我豈之に對して憤らざるべ
 けんや。七 汝は高く聳えたる山の上に汝の臥床を設置え、犠牲を献げん
 とて其処に上り行けり。八 汝はまた戸の後、柱の蔭に汝の記念物⁷⁾を置
 けり。実に汝はわが傍にありながら、⁸⁾ 身を露にして蕩児を迎え、汝の
 臥床を広くして彼等と契を結び、手を拈げて彼等の褥を好みたり。⁹⁾ 九 更
 に汝は王¹⁰⁾の為に香膏を身に塗け、己が紅白粉を多くし、汝の使者等
 を遠く遣し、冥府に及ぶばかり己を卑うせり。一〇 汝は己が道の多きによ
 りて勞れたり。されど「我憊わん」とは云わざりき。汝は己が手¹¹⁾によ
 りて生くるを得たり。されば願ひ求むることをせざりき。二 汝誰に對し
 恐れ惑いて、虚偽を云い、我を記憶に止めず、心の中に思い出でざりし
 ぞ。我黙して宛ら見ざる者の如くなるにより、汝我を忘れたり。二三 我は
 汝の義¹²⁾を告げん、汝の所行は汝を益せざるべし。二三 汝の叫ばん時、汝
 の集團汝を救えかし。されど彼等は悉く風の巻き去り、氣息の吹き去る

7) 家のなかに礼
 拝用に安置した
 偶像。——8) 聖殿
 でさえも。
 9) 即ち恥ずる所
 なく、公然と。
 10) 偶像神モロク
 もしくはアツシ
 リアかバビロン
 の王。——11) 自分
 の力。——12) イス
 ラエルには罪の
 ほかに何の義も
 ないので、皮肉
 にかく言う。

一四 所^{ところ}とならん。さりながら我^{われ}に信^{しん}頼^{らい}を置^おく者^{もの}は地^ちを嗣^つぎ、わが聖^{せい}なる山^{やま}を
 領^うくべし。一四 我^{われ}また云^いわん、道^{みち}を拓^{ひら}け、通^{つう}路^ろを備^{そな}えよ、径^{こみち}を離^{はな}れ、わが
 一五 民^{たみ}の道^{みち}より障^{さまたけ}碍^{がい}となる物^{もの}を取^{とり}除^{のぞ}け、と。13) 一五 それ、高^{たか}く崇^{とう}くして永^{とこ}遠^{しえ}に
 住^すみ給^{たま}う者^{もの}、その御^{みな}名^なを聖^{せい}と称^とえ、高^{たか}く聖^{せい}なる所^{ところ}に、また痛^{つう}悔^{かい}したる者^{もの}
 と謙^{けん}遜^{そん}なる霊^{れい}との許^{もと}に住^すみて、謙^{けん}遜^{そん}なる者^{もの}の霊^{れい}を活^いかし、痛^{つう}悔^{かい}したる者^{もの}
 一六 の心^{こころ}を活^いかさんとし給^{たま}う者^{もの}、か^かく云^いい給^{たま}う、一六 実^げに我^{われ}も絶^たえずは争^{あらそ}わ
 じ。終^{おわ}りまでは怒^{いか}らじ。そはわが面^{おもて}より霊^{れい}出^いで、我^{われ}気^{いき}息^きを作^{つく}るべければ
 一七 なり。一七 我^{われ}はその貪^{どん}慾^{よく}の不^ふ義^ぎゆえに、怒^{いか}りて之^{これ}を打^うてり、汝^{なんじ}に14) わが面^{おもて}
 一八 を隠^{かく}して憤^{いきどお}れり。さるを彼^{かれ}、迷^{まよ}いて己^{おの}が心^{こころ}の道^{みち}を行^ゆきぬ。一八 我^{われ}はその道^{みち}
 を見^み、彼^{かれ}を癒^いやして、之^{これ}を導^ひき戻^{もど}し、彼^{かれ}とその為^{ため}に嘆^{なげ}く者^{もの}等^らとに再^{ふた}び慰^{なぐさ}藉^{さめ}
 一九 を与^{あた}えたり。一九 我^{われ}は唇^{くちびる}の果^み15) たる平^{へい}安^{あん}を、遠^{とお}き者^{もの}にも近^{ちか}き者^{もの}にも16) 与^{あた}う
 二〇 る平^{へい}安^{あん}を、創^{そう}造^{ぞう}して、彼^{かれ}を癒^いやせり、と主^{しゅ}云^い給^{たま}う。二〇 されど不^ふ敬^{けい}なる者^{もの}
 は荒^あれ狂^{くる}い、静^{しず}まること能^{あた}わざる海^{うみ}の如^{ごと}くにして、その波^な涛^みは泡^{あわ}と泥^{どろ}と

13) 本六二・一〇。
 14) 人称が変つて
 いる。この「汝
 に」はヘブレオ
 語本にない。註
 釈であるう。
 15) 祈り。感謝と
 讚美との歌。
 16) 即ち異教徒に
 もユデア人にも

二 三
を打上ぐるなり。二 不敬なる者には平安なし、と主なる天主云い給う。17)

17) 本四八・二二。

第五十八章

天主は外部的断食よりも改心と隣人愛の実行とをすすめ給う

一 叫びて已むるなかれ、喇叭の如く汝の声を挙げて、わが民にその罪惡を、ヤコブの家にその罪を告げ知らせかし。二 実に彼等が日毎我を求め、わが道を知らんと欲すること、正義を行いて、己が天主の定めを棄てしことなき民の如し。彼等は正義の審判を我に請求め、天主に近づかんと欲するなり。三 我等が断食したるに汝の照覽し給わざりしは何故ぞや。我等おのが靈魂を卑うしたるに汝の知り給わざりしは何故ぞや。見よ、汝等の断食の日にこそ、汝等の本心^{ほんしん}露れ、汝等は己がすべての債務者^{さいむしや}等を強請るなれ。四 見よ、汝等は断食しながら、喧嘩口論に及び、天主を畏れず拳を以て相打つなり。汝等の叫声の高き処に聞えんために、今日までの如く断食するなかれ。五 人が一日の間己の靈魂を悩まし、また己

第五十八章

1) 心がけが正しくなくては、いづもは天主に嘉せられる(五節)この業も無価値となる。

六 ばんとするか。六寧ろわが欲む所の断食は左の如きものにあらずや。
 悪の絆を解き、^{あつぱく} 圧迫の縛めをほどき、^{しいた} 虐げられたる者を放ちて自由
 七 ならしめ、^{くびき} 轡を悉く折り捨てよ。飢えたる者に汝のパンを裂き
 与え、^{とほ} 乏しき者宿る処なき者を汝の家に入れ、^{はだか} 裸なる者を見ば之に
 八 衣せ、己が肉親の者を軽んずるなかれ。³⁾ 然する時は汝の光曙の
 九 如く見え渡り、汝の健康は速かに増進し、汝の正義は汝の面前に立
 ちて行き、主の御栄光は汝を守るべし。⁴⁾ 九その時汝呼わらん、主
 聴き給わん。汝叫ばんに、我此に在り、と云い給わん。もし汝にし
 一〇 て己が中より鎖⁵⁾ を除き、指弾⁶⁾ することや益なきを語ることをや
 め、一〇飢えたる者に汝の靈魂を注ぎ、⁷⁾ 悩める靈魂に満足を与えん
 か、汝の光暗黒の中に現れ出で、汝の暗黒は正午の如くなるべし。

2) ヘブレオ語本「葦の如く」。— 3) いか
 貧しい人でも、同じ
 血筋につながり兄弟
 の仲となることによ
 つて、愛を受ける権
 利をもつ。— 結・八・
 七、一六。マテオ二
 五・三五。— 4) 汝を
 防衛するため汝に
 付き添うであらう。
 5) 鎖は人を圧迫する
 象り。— 6) 指弾する
 のは、嘲弄の身振。
 貧しい人虐げられた
 人に対しての侮辱。
 7) 同情する。

二 主は毎も汝に憩いを与え、汝の靈魂に光輝を満たし、汝の骨を安樂ならしめ
 二三 給わん。かくて汝は灌がれし園の如く、水尽きざる泉の如くなるべし。二三 幾
 世荒れ果てたりし処は汝によりて建て直されん、汝は代々の基を起して、垣を
 一三 繕う者、徑を変じて安住の地とする者と称えらるべし。一三 汝もし安息日に汝
 の足を制止め、わが聖なる日に汝の欲む所をなさず、安息日を悦樂とし、主の
 聖なる榮あるものとして、之を崇め、且己が道を行わず、己が我意を抑えて無
 益の言を語らずば、一四 その時汝主によりて悦樂を受くるに至るべし。また我は
 汝を地の高き所よりも上にあげ、汝の父ヤコブの嗣産もて汝を養わん。九 是、
 主の御口の語り給える所なり。

第五十九章

天主より出ずる万の善を大いに防ぐる、罪の恐ろしき害—されど

天主一人の贖主を遣してその教会と永久の契約を結び給わん

一 見よ、主の御手は救い得ざるほど、短きにあらず、またその御耳は聞えざるほど、遠

8) 本六
 一・四。
 9) 暗に
 申三二
 ・一三
 をさす。

二 きにもあらず。二ただ汝等の不義が汝等と汝等の天主との仲を裂き、汝
 等の罪がその御面を覆い隠したるによりて、彼汝等に聴き給わざるな
 三 り。三蓋し汝等の手は血に、汝等の指は不義に汚れ、汝等の唇は虚偽
 四 を語り、汝等の舌は不義を吐きたり。四誰も正義を呼び求むる者なく、
 五 真実に則りて裁く²⁾者なし。ただ人々は無に等しきものを恃み、空しき
 六 事を語るのみにして、心労を孕み、不義を産めり。五³⁾ 彼等は蝮の卵⁴⁾を
 七 孵し、蜘蛛の巣を織りなしたり。その卵を食う者は死すべく、孵りたる
 八 ものは毒蛇となりて出ずべし。六⁶⁾ 彼等の織りなせるものは衣服にならず、
 九 その作れる物は以て身を覆うに足らず。彼等の業は無益の業にして、そ
 の手には不義の業あり。七⁷⁾ 彼等の足は悪に趨り、罪なき者の血を流さん
 とて急ぐ。彼等の思念は無益の思念にして、その道には荒廃と壊滅とあ
 り。八⁸⁾ 彼等は平安の道を知らず、その歩みには分別なし。彼等の径は曲
 九 れり、凡そ之を踏み行く者は平安を知らず。九⁹⁾ この故に公平⁶⁾は我等よ

第五十九章

1) 本一・一五。

2) 裁判の時そう
するものが当然で
あるように。

3 百一五・三五。

4) 悪人の考えが
蝮の卵や蜘蛛の
巣に譬えてある

(五、六、両節

参照)。—5) 箴一

・一六。羅三・

一五。—6) 御民

に天主から約束
されている救い
の状態。

一〇 り遠ざかれり、正義は我等に追いつかじ。我等光を望みしに、見よ、暗黒
 あるのみ。光輝を望みしに、暗黒の中を歩みたり。一〇我等は盲者の如く壁
 を探り、目なき者の如く探り廻り、正午にも闇の中なる如くに躓けり。我
 等は宛ら死せる者の如く暗き処におるなり。二我等は皆熊の如く咆え、憂
 に沈みて鳩の如く叫かん。正義を待望みたれど更になく、救済を待望み
 二 然れど我等を離るること遠し。二三蓋し、我等の不義は汝の御前に多く、我
 等の罪は証して我等を責めたり。そは我等の罪惡我等と共にあり、我等の
 二三 不義は我等の知れる所なればなり。二三即ち我等は主に対して罪を犯し且偽
 一四 り、離れ去りて我等の天主の背後に従い行かず、誹謗と曲事とを語り、
 虚偽の言を構えて心より吐き出せり。一四かくて分別は後に斥けられ、正義
 一五 は遠く離れて立てり、そは真理街頭に潰え、公平歩み入る能わざりしが故
 なり。一五 真理は忘れられ、惡を離れたる者は掠奪を蒙れり。主照覽し給
 一六 いしが、分別なかりしによりて、その御眼には惡しと見えたりき。一六 主人

7) 困窮に対す
 るかれらのは
 てしない怒り
 怨みの訴えは
 仔を奪われた
 熊の咆えるの
 に似ており、
 かれらの恐れ
 と憂いに満ち
 た嘆息は鳩の
 呻き声のよう
 である。
 8) かれらのお
 もな罪。
 9) 裁判や公生
 活において。

一七 い、御自らその正義によりて彼を支え給いしなり。一七 彼は正義を着けて鎧
 となし、その頭には救霊の冑を戴き、復讐の衣服を着、熱心を纏いて陣羽
 織となし給えり。10) 一八 恰も敵討に出で給う如く、その仇に対して御義憤の
 返報に、その敵に対して報復に出で給う如し。鳥々11) に対して報い給う所
 あらん。一九 西の方の人々は主の御名を、日出る方の人々はその御栄光を畏
 るるに至るべし、そは主が御息吹に激する急流の如く来り給わん時のこと
 ぞかし。二〇 彼は贖主としてシオンに、ヤコブの中の不義より立帰る者の
 許に、来り給わんと主云い給う。12) 三 我が彼等と結ぶ契約は次の如しと主
 云い給う。汝の中なるわが霊、汝の口に授けたるわが言は、汝の口より、
 また汝の裔の口より、更に汝の裔の裔の口より離れずして、13) 今より永久
 に及ぶべしと主云い給う。

10) 弗六・一七。
 撒前五・八。
 11) 異教の民。
 12) 羅一一・二
 六。一13) 即ち
 これらは皆、
 天主の御言葉
 即ち御掟を守
 るであらう。

第六十章

真の信仰の光メシアの御国に輝き出でて万国万代に及ぶべし

一 起てよ、輝け、イエルサレムよ、そは汝の光来り、主の栄光汝の上^{うへ}にさし出^いでたればなり。二 実^げにも見よ、闇^{やみ}は地^ちを、暗^{くら}さは民^{たみ}を蔽^{おほ}い隠^{かく}さん。されど主は汝の上^{うへ}に顯^{あらわ}れ出^いで給^{たま}い、その栄光^{えいこう}は汝の上^{うへ}に見^みえ渡^{わた}るべし。三 かくて異邦人等^{ことくにびとら}は汝の光^{ひかり}の中^{なか}を、王^{おう}たち^{たち}は汝のさし出^いでし光輝^{かがやき}の中^{なか}を歩^{あゆ}まん。四 汝の眼^めを翹^あげて周圉^{まわり}を見よ。是等^{これら}の者^{もの}は皆集^{みなあつ}まりて汝の許^{なんじもと}に來^{きた}れり。汝の子等^{なんじこら}は遠方^{とおく}より來^{きた}り、汝の娘等^{なんじむすめら}は諸方^{しよほう}より現^{あらわ}るべし。五 海^{うみ}の群^{むれ}、汝に歸^{なんじき}し、異邦^{ことくに}人等^{びとら}の財力^{ちから}汝に來^{きた}らんその時^{とき}、汝は見^みて満ち足^{みたり}り、汝の心^{こころ}は驚^{おどろ}きて暢^のびやかにならん。六 駱駝^{らくだ}は溢^{あふ}れて汝を覆^{かんじおほ}うばかりなるべし、そは即ちマデイアン^{すなわ}及びエファ^{およ}の駱駝^{らくだ}なり。サバ⁵⁾よりは諸人^{もろびと}の黄金^{こがね}と乳香^{にゆうこう}とを携^{たずさ}え、主^{しゆ}に讚美^{さんび}をささげんとて來^{きた}らん。七 ケダル

第六十章 一)メシアの

御出現によつて。

2)ヘブレオ語本「脇に(即ち腕に)抱かれて

來たらん」。本四九・

一八。一)島々に住ん

でいる多くの人々は。

4)マデイアンおよびエ

ファは、アラビアの西

北部、エラム灣のほと

りにいた二民族。

5)サバはアラビア南部

の黄金と乳香との豊富

な地。一)これは三博

九 是等の者は誰ぞや。九 実に島々⁹⁾は我を待望む、溟海の舟は魁なり。
 八 あらしめん。八 雲の如く、また己が窓辺⁸⁾に向う鳩の如く飛び来る、
 是等によりて我汝の子等を遠方より連れ来り、またその白銀黄金を彼
 等と共に、携え来りて、主汝の天主の御名に、イスラエルの聖なる
 一〇 者に、奉らん、そは彼汝に栄あらしめ給いたればなり。一〇 異邦人の
 子等は汝の石垣を築き、彼等の王たちは汝に仕うべし。¹⁰⁾ 蓋は我義
 憤の時には汝を打ちしが、和解の時には汝を憐みたればなり。二 汝
 の門は毎に開かれたるままにて、昼も夜も閉さるることなからん、
 かくて異邦人等の財力汝の許に齎され、その王等もまた導かれ来る
 二三 べし。¹¹⁾ 三 実に汝に仕えざる民と国とは滅び、異邦は荒れ果てて住
 三 む人なきに至らん。¹²⁾ 三 リバノンの栄えは、樅樹、黄楊樹、松樹諸

士が、ベトレヘムの
 馬屋で生まれ給うた
 メシアの御許に來た
 祝いの典礼に、聖会
 が用いている。
 7) ケダルとナバヨト
 とは、アラビアの遊
 牧民の名。——8) 鳩舎。
 9) 本五九章註一一參
 照。——10) 就中十字軍
 の時代のように。
 11) 黙二一・二五。
 12) 諸国民の真の幸福
 は、天主の御国に対
 する忠誠にかかつて
 いる。

一四 共汝^{ともなんじ}に來りて、わが聖所^{せいじよ}を飾^{かざ}るべし。我^{われ}またわが足場^{あしば}13)を莊嚴^{おごそかに}せん。一四 汝^{なんじ}を辱^{はづか}しめたる者^{もの}の子等^{こら}は身^みを屈^{かが}めて汝^{なんじ}の許^{もと}に來り、汝^{なんじ}を誹^{そし}りたる者等^{ものども}は皆^{みな}汝^{なんじ}の足跡^{あしあと}を拝^{はい}して、汝^{なんじ}を主^{しゆ}の都^{みやこ}、イスラエルの聖^{せい}なる者^{もの}のシオンと称^{とな}うべし。一五 汝^{なんじ}が棄^すてられ憎^{にく}まれ、汝^{なんじ}を通^{とお}り過^すぐる者^{もの}すらなかりしに引換^{ひきか}え、我^{われ}汝^{なんじ}を世^よ々の誇^{ほこり}、千代万代^{ちよよろよ}の喜悅^{よろこび}となさん。一六 汝^{なんじ}は異邦人等^{ことくにびとら}の乳^{ちち}を吮^すい、王^{おう}たちの乳房^{ちぶさ}に哺^{はぐ}まれ、我^{われ}が主^{しゆ}にして汝^{なんじ}を救^{すく}う者^{もの}なること、汝^{なんじ}の贖主^{あがないぬし}にし、てヤコブの強^{つよ}き者^{もの}なることを知る^しに至^{いた}るべし。一七 我^{われ}は青銅^{からかね}の代^{かわ}りに黄金^{こがね}を持^もち來^{きた}り、鉄^{くろがね}の代^{かわ}りに白銀^{しろがね}を、木^きの代^{かわ}りに青銅^{からかね}を、石^{いし}の代^{かわ}りに鉄^{くろがね}を持^もち來^{きた}り、また汝^{なんじ}の後見^{うしろみ}として平和^{へいわ}を、汝^{なんじ}の司^{つかさ}として正義^{せいぎ}を置^おかん。一八 最早^{もはやなんじ}汝^{なんじ}の地^ちには不義^{ふぎ}を聞^きくことなく、汝^{なんじ}の境^{さかい}には荒廢^{こうはい}と壞滅^{かいめつ}とを聞^きくことなく、汝^{なんじ}の石垣^{いしがき}は救拯^{すくい}の占^しむる所^{ところ}、汝^{なんじ}の門^{もん}は讚美^{さんび}の占^しむる所^{ところ}となるべし。一九 汝^{なんじ}の為^{ため}に、日^{ひる}の光^{ひかり}は最早^{もはや}目にあらず、月^{つき}の光輝^{かがやき}また汝^{なんじ}を照^てらさずして、主^{しゆなんじ}汝^{なんじ}の為^{ため}に永久^{とこしえ}の光^{ひかり}となり、汝^{なんじ}の天主^{てんしゆなんじ}汝^{なんじ}の榮^{さかえ}となり給^{たま}わん。14) 二〇 最早^{もはやなんじ}汝^{なんじ}の日^ひ15)は没^{しず}む

13) 普通は契約の櫃のこと。
 ここでは一般に、天主が特別お恵みを以て臨み給う場所のこと。
 14) これはあゝ世に托ける完成の時、欠ける所なく果たされる。―黙二一・二三。
 二二・五。
 15) メシアの御国には自然界の光源がいらない、その光

ことなく、汝の月は虧くることなかるべし。そは主汝の為に
 永久の光となり給うが故にして、汝の嘆きの日は茲に終らん。
 三しかして汝の民は皆義しく、恒久に地を嗣ぎ、わが植えた
 二る嫩枝、わが手の作として、わが榮譽となるべし。三その最
 も少き者も千となり、その微力なる者も最も強き国民となら
 ん。16) 主たる我、その時来らば17) 俄に之をなすべし。

第六十一章

メシアの任務

一 主の霊わが上に在す、1) そは主我に注油し給いしにより
 てなり。2) その我を遣し給えるは、柔和なる者に告げ、心
 の挫けたる者を癒し、捕われたる者に赦免を、3) 幽閉めら
 二れたる者に解放を説き、主の嘉し給う年と我等の天主の
 三 報復の日とを宣伝え、4) 凡て嘆ける者を慰め、5) シオンの

は主であるから。16) 聖会
 史において多くの例で実証
 されているように。17) 御
 父がその御力で定めておい
 でになる時。

第六十一章 1) 主御自らこの箇
 所を御自分をさすとしておいで
 になる。路四・一七—二二参照。
 2) 聖靈賦与の外部的しるし。
 3) 利二五・一〇参照。4) 天主
 の敵が減びてから、恵みの年が
 来る。5) マテオ五・五。

九 嘆ける者を立てて、灰の代りに冠を、⁶⁾ 嘆きの代りに喜悦の油を、⁷⁾ 憂心の代りに讚美の晴衣を、之に与えしめんとてなり。彼等は彼処にて、義に強き者、主が榮譽の為に植え給う者と称えらるべし。⁴⁾ また彼等は、世々より荒れしままなる処を建て直し、往古の廢墟を復興し、毀たれて幾代を累ねし荒れたる諸市を旧に復さん。⁸⁾ 五 他国人立ちて汝等の羊群を牧し、外国人の子等汝等の耕作者となり葡萄採集者となるべし。⁶⁾ されど汝等は主の司祭と称ばれ、汝等に対しては、我等の天主の下僕と云われん。汝等は異邦人の富力を食し、彼等の榮華を衣て誇るべし。⁷⁾ 汝等の重なる恥辱と赤面との代りに、⁹⁾ 彼等¹⁰⁾ は己が分を讚め称えん。この故に彼等はその地にて二倍¹¹⁾ を得、彼等には永久の悦樂あるべし。⁸⁾ それ、我は正義を好む主にして、燔祭の時に掠むるを憎む。我は彼等の業を真理に基づかしめ、彼等と恒久の契約を結ばん。⁹⁾ 彼等の裔は異邦人等の間にありても、彼等の子孫は諸々

⁶⁾ 服喪のしるしに頭にかけた灰の代りに冠を。――⁷⁾ 香油を注ぐことは、饗宴の前もしくはその間に行われた。
⁸⁾ 本五八・一二。
⁹⁾ ヘブレオ語本「なんじら前に受けし恥の代りに、倍する譽を受けん」。――¹⁰⁾ 二人称から三人称に変わるいずれにしてもイステエル人をさす。
¹¹⁾ 即ちこの上なく豊かに。

一〇 の民の只中にありても、人々之を知り、彼等を見る者は皆、之を弁う
 べし、そは是等の者主の祝し給える裔なればなり。一〇我^{われ}主^{しゆ}によりて
 喜びに悦び、わが靈魂わが天主によりて雀躍せんかな、そは主我に救
 いの衣を着せ、正義の服を纏わせて、冠を被飾りたる¹³⁾新郎の如く、
 宝石佩けて眼も絢なる新婦の如くなし給いたればなり。二実に地が芽
 を出す如く、また園が種子を生立たしむる如く、主なる天主も万の国
 民の前に、正義と讚美とを生ぜしめ給うべし。

第六十二章

メシアの都の栄え

一 我シオンの為に黙さじ、イエルサレムの為に休まじ、その義しき者
 光輝の如く現れ、その救主¹⁾炬火の如く光を放つまでは。二異邦人等
 は汝の義しき者を、王たちは皆汝の榮ある者を、仰ぎ見ん。汝は主の
 御口の命名け給うべき、新しき名²⁾もて称ばるべし。三かくて汝は主

12) 天主の民、教会
 の声。——13) 司祭の
 職務を果たすため
 司祭帽を戴いた。

第六十二章 1) ヘブ
 レオ語本、ギリシ
 ヤ語本では抽象的
 で「救い」。——2) 天
 主の御国に新しい

四 の御手^{みて}にある栄^{さかえ}の冠^{かんむり}、汝^{なんじ}の天主^{てんしゆ}の御手^{みて}にある王^{おう}の宝冠^{ほうかん}とならん。^四最早^{もはやなんじ}汝^{なんじ}は棄^すてられたるものと称^よばれず、汝^{なんじ}の地^ちは荒^あれたる處^{ところ}と称^よばれじ。却^{かえ}つて汝^{なんじ}は「之^{これ}ぞわが嘉^{よみ}するもの³⁾」と称^よばれ、汝^{なんじ}の地^ちは「人^{ひと}住^すむ處^{ところ}」⁴⁾と称^よばるべし。そは主^{しゆ}汝^{なんじ}を嘉^{よみ}し給^{たま}えるによりて、また汝^{なんじ}の地^ちには人^{ひと}住^すむべきによりてなり。^五實^げに青年^{わかもの}は処女^{おとめ}と共に住^すみ、汝^{なんじ}の子等^{こら}は汝^{なんじ}の中^{うち}に住^すまわん。しかして新郎^{はなむこ}の新婦^{はなよめ}を喜^{よろこ}ぶ如^{ごと}く、汝^{なんじ}の天主^{てんしゆ}は汝^{なんじ}を喜^{よろこ}び給^{たま}うべし。⁵⁾ ^六イエルサレムよ、^{ひる}昼^{ひね}は終^{ひね}日^{もす}、^よ夜^よは終^{よもす}夜^{がら}、我^{われ}汝^{なんじ}の石垣^{いしがき}の上^{うえ}に見張^{みはり}の者^{もの} ⁶⁾を立^たてたり。彼等^{かれら}はいつまでも黙^{もく}することなからん。汝等^{なんじら}主^{しゆ}を偲^{しの}ぶ者^{もの}よ、黙^{もく}するなかれ、主^{しゆ}に休^{やす}み給^{たま}う暇^{いとま}を与^{あた}うるなかれ、そのイエルサレムを安^{あん}定^{てい}して之^{これ}を地^ちの讃^{たた}うるものとなし給^{たま}うまで。^八主^{しゆ}はその右^{みぎ}の御手^{おんて}によりて、その大能^{ちから}ある御腕^{おんかいな}によりて、⁷⁾ 誓^{ちか}い給^{たま}えり。我^{われ}は最早^{もはやなんじ}汝^{なんじ}の小麦^{こむぎ}を、汝^{なんじ}の敵^{てき}に食物^{しょくもつ}として与^{あた}えじ。外国^{とつくにびと}人^この子等^ら

名がつけられるのは、その本質が全く変るから。四節参照。1) 3) ヘブレオ語本「ヘフシバ」すなわちわが愛。4) ヘブレオ語本「配偶を得ん」すなわち天主は再び汝の集いを配偶者となし給うだろう。5) 天主はシオンの靈的配偶者。6) 予言者たち。7) 天主には、依りて以て誓うべきものと偉い者がほかにないそれで御自分をさしてお誓いになるのである

九 は、汝が勞して造りたる葡萄酒を飲むことなかるべし。九そは小麦を取り
 入るる者こそ、之を食して主を讃え奉るべく、葡萄酒を搬び入るる者こそ
 わが聖なる庭にて。八之を飲むべければなり。一〇門を通りて進めよ進め。
 民の為に道を備え、通路を坦ならしめ、石を除き去れ。民の為に旗印を掲
 げよ。九二見よ、主は地の果にまで告げ聞かせ給えり。娘シオンに云え、
 見よ、汝の救主来り給う。見よ、その報賞はその御許にあり、その御業は
 その御前にあり。一〇一二人々は彼等を聖なる民、主に贖われたる者と称えん、
 また汝は選ばれたる都市、棄てられざるものと称えらるべし。

第六十三章

メシアの勝利—その御民に対する御仁慈—御民の祈願

一 エドムより、¹⁾ 染衣着てボスラ²⁾ より、来るかの者は誰ぞや。長き上衣
 纏い、力に充溢れて歩む、姿美しきかの者は誰ぞや。そは正義を語り、
 救霊の為に防ぎ戦う我³⁾ なり。然らば汝の服装が赤く、汝の衣が搾酒場

八) 犠牲の食事を暗示す。利
 六・一六など
 参照。九) 本五
 七・一四。一
 バビロンを去
 ること。
 一〇) 亞九・九。
 マテオ二一・
 五。

第六十三章
 一) すべての敵
 対民族の代表
 者。一2) ペト

三 にて踏む者の如きは何故ぞや。三我はただ独り酒搾を踏み。国人の中
 には誰も我を助くる人なし。我は憤りて彼等を踏み、怒りて彼等を蹂躪
 したり。さればこそ彼等の血汐わが衣に灌ぎかかりて、わが服装は全く
 我の汚す所となりたるなれ。四 実に復讐の日はわが心の中にあり、わが
 贖いの年は来れるなり。五 我見まわしたれども、助くる者なく、我探ね
 たれども、力を添うる者なかりき。是によりてわが腕我を救い、わが義
 憤我を助けたり。六 我は怒り狂いて国人を蹂躪り、憤激りて彼等を酔わ
 しめ、その力を挫きて地に倒したり。七 我は六 主の御憐憫を思い出で、
 凡て主の我等に賜いし所に対して、またイスラエルの家に、その寛大に
 より、御憐憫の豊かなるにより、惜しみなく与え給える御恩恵の夥しき
 八 に対して、主を讃え奉らん。八 かれは曰えり、寔に彼等はわが民にして、
 不忠ならざる子等なり、と。九 しかして彼等の為に救主となり給いぬ。
 九 彼等のいかなる患難の時にも彼は倦み給わざりき。その御面の前なる

ラと紅海との間にある町。
 3) 勝利者自身の答。—4) 「さかぶねを踏む者」とは、御傷の血に染み給う十字架上のキリスト。これは教父達およびキリスト教芸術によく用いられている。
 5) 本三四・八。
 6) イザヤの言葉

一〇	天使^{みづかい} ⁷⁾ 彼等^{かれら}を救^{すく}えり。主^{しゅ}は御^{おん}自^みらそ^の愛^{あい}と寛^{かん}仁^{じん}とによりて彼等^{かれら}を贖^{あがな}い、之^{これ}を搬^{はこ}び、之^{これ}を抱^{いだ}き上^あげて、幾^{いく}世^よの日^ひ々^びを経^へ給^{たま}えり。一〇されど彼等^{かれら}は御^{おん}忿怒^{いかり}を招^{まね}き、その聖^{せい}なる者^{もの}の霊^{れい}を悩^{なや}まし奉^{たてまつ}りしかば、主^{しゅ}も翻^{ひるがえ}りて彼等^{かれら}に敵^{てき}となり、御^{おん}自^みら之^{これ}を討^うち従^{したが}え給^{たま}えり。二時に人^{ひと}世^よ々の前^{まえ}なるモイゼとその民^{たみ}との目^ひを俾^{しめ}びていわく、彼等^{かれら}を己^{おの}が群^{むれ}の牧^{ぼく}者^{しや} ⁸⁾ と共に海^{うみ}より導^ひき出^{いだ}し給^{たま}いし者^{もの}は何^い処^こに在^{まし}ま
二	そ。彼等^{かれら}の中^{なか}に己^{おの}が聖^{せい}なる者^{もの}の霊^{れい}を置^おき給^{たま}いし者^{もの}は何^い処^こに在^{まし}ま
三	ず。 ⁹⁾ 三そは即^{すなわ}ち己^{おの}が稜^{みいつ}威^いの御^{おん}腕^{かいな}に、モイゼの右^{みぎ}手^てを執^とりて導^ひき出^{いだ}し、彼等^{かれら}の前^{まえ}にて水^{みづ}を裂^さき、以^{もつ}て御^{おん}自^みら恒^{とこ}久^{しえ}の御^{おん}名^なを贏^{かちえ}得^えんとし給^{たま}いし者^{もの}、一三彼等^{かれら}を淵^{ふち}より導^ひき出^{いだ}して、荒^あ野^のの馬^{うま}の躓^{つまず}くことなき
一四	が如^{ごと}くならしめ給^{たま}いし者^{もの}にて在^{まし}ま
一五	ず、と。一四畜^{けもの}の野^のに下^{くだ}るが如^{ごと}く、主^{しゅ}の霊^{れい}彼等^{かれら}を導^{みちび}き給^{たま}えり。汝^{なんじ}が、御^{おん}自^みら榮^{けえ}ある御^{おん}名^なを贏^{かちえ}得^えんとて、汝^{なんじ}の民^{たみ}を導^{みちび}き給^{たま}いしことかくの如^{ごと}し。一五天^{てん}より御^{おん}眼^めを向^むけ、汝^{なんじ}の聖^{せい}なる御^{おん}住^{すま}居^{まい}、汝^{なんじ}の榮^{えい}光^{こう}の輝^{かが}く処^{ところ}より、照^{みそ}覧^{なわ}し給^{たま}え。汝^{なんじ}の熱^{ねつ}心^{しん}と汝^{なんじ}の大^{みち}能^{から}、及^{およ}び深^{ふか}き汝^{なんじ}の

7) 契約の櫃の前
の天主の代理を
する天使か、あ
るいは天主の御
前に立つ天使。
これを大天使ミ
カエルと考える
人もあれば、御
父の輝きなる天
主の第二位たる
メシアと思う人
もある。出二三
・二〇など参照。
8) モイゼとアー
ロン。
9) 出一四・二九。

一六 慈悲の心腸と汝の御憐憫とは、今何処にかある。是等是我に対して抑制め
 られたり。10) 一六 実に汝は我等の父なり。アブラハムは我等を知らず、11) イ
 スラエルは我等に気付かざりき。されど主よ、汝は我等の父、我等の贖
 主なり。これぞ世々よりの汝の御名12) なる。一七 主よ、汝が我等をして汝の
 道を離れ迷わしめ、我等の心を頑固にして、汝を畏ることなからしめ給
 いしは何故ぞや。汝の下僕等、汝の嗣産たる支族の為に、歸り来り給え。
 一八 人々は汝の聖なる御民を己が有となして、恰も無に等しきが如くなした
 り。我等の敵は汝の聖所を蹂躪りぬ。一九 我等は元始におけるが如く、即ち
 汝が我等を治め給わず、我等が汝の御名を冠して称ばれざりし時の如くに
 なれり。

第六十四章

イザヤ御民の解放と彼等の罪の赦免とを祈り求む

一 願わしきかな、汝が天を裂きて下り給い、山々汝の御面前に崩れ、
 二 火に焼かるるが

10) 申二六・一
 五。巴二・一
 六。―11) 我ら
 の肉身の先祖
 たるアブラハ
 ムやヤコブの
 まだいない前
 からすでに。
 12) 汝の本質、
 すなわち汝御
 自身。

九 八 七 六 五 四 三

如く融け去り、水の火に沸返らんこと。これ、汝の御名が汝の敵に知られ、汝の御面前に国々の民震慄かんためなり。三 汝奇蹟をなし給わんか、我等之に得堪えざらん。汝下り給いしに、山々汝の御面前に崩れたり。四 天主よ、汝を待望む者に汝の備え給えることは、いかばかりぞ、そは、汝のほか誰も世々より聴かず、耳に留めず、²⁾ 眼にも見たることなし。五 樂しみて義を行ふ者は、汝之を迎え給えり。彼等は汝の道にありて汝を偲ばん。見よ、汝は怒り給えり、我等は罪を犯せり。我等は常にその中にありたり、されど、救わるべし。六 我等は皆淨からぬ者の如くなり、我等の義はすべて月経の女の布片の如くなり。我等は皆木葉の如く落ち、我等の不義は風の如く我等を卷きて去れり。七 汝の御名を呼び頼む者、起ちて汝に縋る者なし。汝は我等に御顔を隠し、我等の不義の手によりて我等を打碎き給えり。八 されど今は、主よ、汝は我等の父なり。我等は粘土、汝は我等を形成る者にして、我等は皆汝の御手の作なり。九 飽くまでも怒り給うなかれ、主よ。最早我等の不義を御心に留め給うな

第六十

四章

一三節

は間に

はさん

だ文と

取るべ

し。

2) 一、

二、両

節の希

望の理

由。哥

前二・

九参照

一〇 かれ。鬱せ、顧み給え、我等は皆汝の民なり。³⁾ 一〇 汝の聖所の都市は荒野となれり、シオンは荒野となれり、イエルサレムは人住まずなれり。二 我等を聖とし、⁴⁾ 我等が光栄とする⁵⁾ 家、我等の父祖が汝を讃え奉りし所は、火に焼かるるに至り、我等の懐る物は悉く壊滅に歸したり。二三 是等の事に対してさえ、汝己を制えんとし給うか。黙して我等を太く苦しめんとし給うか。

3) 詩七八・八。
4) 犠牲と祈りによつて聖化が行なわれる聖殿。—5) 異邦人等にも称賛される。

第六十五章

異邦人メシアを求めて之を得べし、されどユデア人は彼を迫害して見棄てられん—聖会は恵に充溢るべし

一 前に我を求めざりし者¹⁾、我を求め、我を探ねざりし者、我を見出でたり。わが名を呼ばざりし国民に我云いけるは、見よ我を、見よ我を、と。²⁾ 二 己が思のままに善からぬ道を歩む不忠の民³⁾に、我は終日わが手を差伸たり。^三 この民はわが面前にありて絶えずわが

第六十五章 1) メシアの時代に天主に帰依する異教者ら。

2) 羅一〇・二〇。

3) 二節からはイスラ

四 忿怒を招き、^{いかり まね} 牲を園の中に^{にえ そのなか}屠り、煉瓦の上に^{れんが うえ}供え、^四墓の中に^{はか うち}住い、⁴⁾
五 偶像の社に眠り、^{ぐうぞう やしろねむ} 豚の肉を食し、^{ぶたにく} 穢らわしき^{けが すいもの}吸物を己が器に入れ、^{おの うわい} 五し
かして云う、退きて我を離れ、我に^{われ はな}近寄るな^{ちかよ}かれ。そは汝^{なんじきよ}淨からざればな
り、と。是等の^{これら もの}者はわが^{いかり}激怒に^お逢いて^{けむり}煙となり、終日^{ひねもすも}燃ゆる火となるべし。
六 見よ、そは録されてわが^{まね}前にあり。我は黙せずして^{あだ かえ}仇を復し、^{かれら ふところ}彼等の懷
七 に報いん、^{むく} 汝等の不義と汝等の父祖の不義とに^{なんじら ふき ふそ ふき}対して共に、と主云い給^{たま}
う。彼等は山の上にて^{かれら やま うえ}犠牲を^{いけにえ}献げ、丘の上にて我を罵りたれば、我^{われかれら}彼等の
八 前の所行を^{さき しわざ}量りてその懷に報いん。主^{しゅ}かく云い給う、人葡萄の一房に^{ひとぶ どう ひとふさ}一
九 粒を見出でて、是を損うな^{つぶ みい}かれ、是は恵なればなり、と云う時の如く、我^{われ}
もまたわが下僕等の^{しもべら}為に^{ため}然^{しか}なして、その全部は滅ぼさじ。九しかして我、
一〇 ヤコブより一つの裔を、ユダよりわが山々^{やまやま}の所有者を出さん。わが選め
る者は之を承継ぎ、わが下僕等は其処に住むべし。一〇かくて我を求めたる
わが民にとりて、野は羊群の檻となり、アコルの谷^{たに}は牛群の臥処とな

エル人に当た
る言葉。

4) 死霊を呼び
出すため。

5) 夜に秘密礼
拝を行ふため

に。――6) 山の
多いカナアン

7) アコルの谷
は、アカンが

石打の刑に処
せられた所と

して知らる。
書七・二四、

二六参照。

二 らん。二されど汝等主を棄てたる者、わが聖なる山⁸⁾を忘れたる者、幸
 二 運の女神⁹⁾の為に食卓を設け、かれ¹⁰⁾に對して神酒を供うる者よ、二三我
 二 汝等を挙げて劍に付さん。汝等はみな斬殺されて仆るべし。そは我呼び
 二 たるに汝等応えず、我語りたるに汝等聴かず、わが眼の前に惡事をなし、
 二三 わが欲まざる事を択みたればなり。11) 二三この故に主なる天主はかく云い
 二 給う、見よ、わが下僕等は食せん、されど汝等は飢うべし。見よ、わが
 二 下僕等は飲まん、されど汝等は渴くべし。二四見よ、わが下僕等は樂しま
 二 ン、されど汝等は恥入るべし。見よ、わが下僕等は心の歡喜ゆえに讚美
 二 せん、されど汝等は心の悲哀ゆえに泣き叫び、靈の痛苦ゆえに喚くべ
 二 し。二五また汝等は己が名を遺すともそはただわが選みたる者の呪咀を招
 二 かんのみ。主なる天主は汝を殺して、己が下僕等を他の名もて¹²⁾称び給
 二 うべし。二六是により地上にて祝せらるる者は、天主によりて祝せらるべ
 二 し、アーメン。¹³⁾ 地にて誓う者は天主によりて誓うべし、アーメン。そ

8) シオン。
 9) ヘブレオ語「ガド」。—10) ヘ
 ブレオ語「メニ」
 いずれも幸運の
 女神をさす。ヴ
 ルガタのラテン
 語は Fortuna で
 ある。—11) 箴一
 ・二四。本六六
 ・四。—12) キリ
 スト信者と。
 13) 聖三位一体の
 御名により十字
 架の印をすること
 とを思い合せよ

一七 は前の患難忘れらるるに至り、わが眼より隠れたればなり。一七 実にも見よ、我
 は新しき天と新しき地とを創造す。前の物は記憶に存せずなりて、最早心に浮
 かばざるべし。¹⁴⁾ 一八 されど汝等はわが創造する是等の物によりて、永遠に喜び
 躍るべし。そは見よ、我イエルサレムを雀躍とし、その民を歓喜とすればなり。
 一九 我はイエルサレムゆえに雀躍し、わが民ゆえに喜ばん。その中には最早泣く
 声も叫ぶ声も聞えざるべし。^{二〇} また其処には最早数日にして死する嬰兒も、
 己が天寿を全うせざる老人も、あることなからん。そは童子というも百才を迎
 えて死すべく、罪人も百才に至りて呪わるべければなり。^{二一} 二二 彼等は家を建て
 て住い、葡萄畑を作りてその実を食せん。^{二三} 彼等は他人の住む為に建てず、他
 人の食する為に植えざるべし。実にわが民の齡は樹の齡の如く、彼等の手の業
 は永続せん。^{二四} わが選みたる者は勞して空しきことなく、生みて煩惱を招くこ
 となからん。そは彼等主の祝し給える者の裔にして、その孫も彼等と共に居れ
 ばなり。^{二五} 彼等の呼ぶより前に我応え、彼等のなお語りおる間に我聴くべし。^{二六}

一四) 本六
 六・二
 二。默
 二一・
 一。
 一五 百歳
 の高齡
 者でさ
 え、罰
 として
 命を縮
 められ
 た罪人
 のよう
 に見な
 される
 一六) 詩三
 一・五。

二五 狼と小羊と、共に草を喰み、獅子と牛と、藁を喰い、塵、蛇の糧とならん。是等はわが聖なる山の何処においても、害することなく、殺すことなかるべし、と主云い給う。

第六十六章

メシアの御国の完成

一 主はかく云い給う、天はわが位、地はわが足台なり。汝等がわが為に建てんとするこの家は如何なるものぞ、わが鎮坐するこの処は如何なるものぞ。一 わが手是等一切の物を造りたれば、是等の物皆成れり、と主云い給う。されどわが顧みるべきは、貧しき者、霊に痛悔ある者、及びわが言に慄く者を他にして、誰ぞや。三 牛を屠る者は、人を殺す者の如く、羊を犠牲にする者は、犬を撲殺す者の如く、供物を献ぐる者は、豚の血を献ぐる者の如く、香を忘れざる者は、偶像を頌うる者の如し。二 是等は皆彼等の己が好

第六十六章 一 汝らはどうしてわがために応わしい家を建てることが出来よう。一 徒七四九。一七・二四。一 二 イザヤはモイゼの律法にある犠牲に、異教の厭わしい犠牲を対照させる。即ち主への燔祭にはモロクへの人身御供を、贖罪祭にはエジプトのチフオンへの犬の犠祭を、素祭にはデメテルへの豚の血を流す祭を、記憶の犠祭には神々への焚香を。

四 みに従い^{したが}選^{えら}みたる所^{ところ}にして、彼等^{かれら}の靈魂^{たましい}はその憎^{にく}むべきものを樂^{たの}しみとせ
 り。^四この故^{ゆえ}に我^{われ}もまた彼等^{かれら}に對^{たい}して嘲弄^{ちやうろう}を選^{えら}み、彼等^{かれら}の恐^{おそ}る事を之^{これ}が
 上^{うへ}に來^{きた}らしめん。そは我^{われ}呼^よびたるに、応^{こた}えんとする者^{もの}なく、我^{われ}語^{かた}りたるに
 彼等^{かれら}聽^きかず、わが眼^めの前^{まへ}に惡事^{あくじ}をなし、わが欲^{のぞ}まざる事^{こと}を択^{えら}みたればな
 り。^三^五主^{しゆ}の御言^{みことば}を聽^きけ、汝等^{なんじら}その御言^{みことば}に慄^{おの}く者^{もの}よ。汝等^{なんじら}の兄弟^{きやうだい}^四はわが名^な
 の為^{ため}に汝等^{なんじら}を憎^{にく}み追^おい出^{いだ}して云^いえり、主^{しゆ}をしてその榮光^{えいこう}を顯^{あらわ}さしめよ、我^{われ}
 等^ら汝等^{なんじら}の悦^{よろこ}ぶを見^みん、と。されど彼等^{かれら}は滅^{ほろ}び去^さるべし。^六町^{まち}より民^{たみ}の聲^{こゑ}す。
 聖殿^{せいでん}より聲^{こゑ}す、そは主^{しゆ}がその敵^{てき}に仇^{あだ}を報^{むく}い給^{たま}う御聲^{みこゑ}なり。^七女^{おんな}、陣痛^{じんつう}を覺^{おぼ}
 えざる前^{さき}に生^うみ落^{おと}せり、その分^{ぶん}娩^{べん}の期^{とき}至^{いた}らざる前^{さき}に男^{おとこ}児^{このこ}を生^うみ落^{おと}せり。
 誰^{たれ}か曾^{かつ}てか^{こと}かる事^{こと}を聞^ききたる。誰^{たれ}か之^{これ}に類^{るい}する事^{こと}を見^みたる。地^ち豈^{あに}一^{いち}日^{にち}に
 して生^うまんや。また一^{いつ}つの民^{たみ}一時^{とき}にして生^うまれんや。しかも実^げにシオンは
 陣痛^{じんつう}を覺^{おぼ}えてその子^こ等^らを生^うみたるなり。^五^九我^{われ}は他^たをして産^うましむる者^{もの}なる
 に、自^{みづか}ら生^うまざることあらんや、^六と主^{しゆ}云^い給^{たま}う。我^{われ}は他^たをして出^{しゅつ}産^{さん}せし

3) 箴一・二四。
 本六五・一二。
 耶七・一三。
 4) 惡しきイス
 ラエル人。
 5) シオンのこ
 の出産とは、
 聖靈降臨の奇
 蹟とそれに続
 く人々の改宗
 6) 天主は多く
 の人をメシア
 の御國に來ら
 しめて、産み
 給う。

一〇 むる者なるに、子なきことあらんや、と主しゆなんじの天主てんしゆい云い給う。一〇 イエルサレム
 と共にとも楽しみ、その中なかにて喜び躍れ、汝等すべて之を愛する者よ。之と共に喜
 びに喜べ、汝等すべてその為に嘆ける者よ。二 是は汝等がその慰安の乳房より
 吸いて飽き足るを得ん為、その栄の豊かなるを搾りて悦楽に充溢れん為なり。
 二三 それ、主はかく云い給う、見よ、我之が上に平安を河の如く注ぎ、また汝等
 が吸うべき異邦人等の栄を、汨濫る激流の如く注がん。人々汝等を懷に抱
 き、膝ひざにのせて愛撫すべし。二三 母の愛撫するが如く、我も汝等を慰めん。汝等
 はイエルサレムにて慰藉を得べし。一四 汝等見んに、汝等の心喜び、汝等の骨
 草の如く萌え出でん。主の御手はその下僕等に知らるべし。されどかれ、その
 敵に對しては、憤り給わん。一五 実にも見よ、主は火に包まれて来り給うべし。
 その御車みくるまは旋風の如くにして、御義憤をもてその猛威を揮い、火焰もてその
 天譴を果さんとす。一六 それ、主はすべての肉に對し、火もて、またその御劍も
 て、審判を行ひ給わん。主に殺さるる者は多かるべし。一七 内なる門の背後にあ

7) 天主
 は戦車
 上の將
 軍の如
 く大な
 る勢を
 以て来
 り給う

二
 一八
 一九
 二〇
 二一
 る園⁸⁾の中にて聖別せられ、その身淨しと思える者、豚の肉、忌むべき物、及び鼠を食したる者、是等は共に滅尽くすに至らん、と主云い給う。一八さて我は来りて、彼等の業と思念とを、万の国民ならびに言語と共に集めん。⁹⁾ 彼等は来りてわが栄光を見るべし。一九我は彼等の中に徴を立て、救わるべき者の中より人を遣して、海の彼方なる異邦人等の許に至らしめ、アフリカやリヂアに入らしめて弓を引く者等の許に至らしめ、イタリアやギリシャに入らしめ、遠き島々にも、未だ曾てわが事を聞かず、わが栄光を見ざりし者等の許にも至らしめん。彼等はわが栄光を異邦人等に告げ知らせ、三〇万の国民の中より汝等の兄弟を悉く、馬に、車に、轎に、騾馬に、馬車¹⁰⁾にのせて、わが聖なる山イエルサレムに連れ来り、主に奉る献物とすべし、そは恰もイスラエルの子等が潔き容器に供物を入れて、主の家に持ち来るが如し、¹¹⁾と主云い給う。三二我また彼等の中より人を採りて、司祭及びレヴィ人となさん、¹²⁾と主云い

8) この庭における祕密の犠祭について、別に知られていない
 9) 審判に。
 10) ヘブレオ語本「駱駝」。—¹¹⁾ 帰依者は天主の御意に適う潔い供物のようなもの
 12) メシアの御国では、レヴィ人でない人の中からも、天主は司祭を選び給う。

三 給う。三それ、わが造りて以てわが前に常に存せしめんとする新しき天
 と新しき地との如く、汝等の裔も、汝等の名も、また常に存すべし、と
 二三 主云い給う。13) 三月々に、安息日安息日に、すべての肉、わが面前にて
 二四 礼拝せんために、来らん、と主云い給う。二四 彼等は出でて14) 我に逆いた
 る人々の屍を見るべし。その蛆は死なず、15) その火は消えざらん。そは
 万の肉にとりて厭わしき光景たるべし。

13) 黙二一・一。

14) ゲヘンナの谷

の死骸を焼く所

トフエトは聖都

の外にある。

15) 可九・四三参

照。